

日曜学校教案誌

vol. **5**

2002. 4. 5. 6月号



日本キリスト改革派教会 中部中会教育委員会

も く じ

| | | |
|-------------------------------|------|-----|
| まえがき | 村手淳 | 3 |
| 巻頭説教「御言葉に聞き入ることへ」 | 望月信 | 4 |
| 論文「オランダ改革派教会における契約の子の教育」その一 | 牧田吉和 | 8 |
| 日曜学校・教会学校訪問 | | |
| 神港教会 | 松村道雄 | 12 |
| 中学生・高校生のための教会史 | 杉山明 | 16 |
| 2002年4・5・6月分カリキュラム | | 32 |
| 聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例 | | 33 |
| 4月7日 | | 34 |
| 4月14日 | | 42 |
| 4月21日 | | 50 |
| 4月28日 | | 58 |
| 5月5日 | | 66 |
| 5月12日 | | 74 |
| 5月19日 | | 82 |
| 5月26日 | | 90 |
| 6月2日 | | 98 |
| 6月9日 | | 106 |
| 6月16日 | | 114 |
| 6月23日 | | 122 |
| 6月30日 | | 130 |
| 小学科下級工作 | | 138 |
| 2002年7・8・9月分カリキュラム | | 145 |
| 2002年度カリキュラム(2002年4月～2003年3月) | | 146 |
| 編集後記 | | 148 |

まえがき

村手 淳 (太田伝道所宣教教師)

教案誌の発行も一年が過ぎ、二年目に入りました。私は途中から協力させていただいている者ですが、このことをここに記して、発行に最初からたずさわった教師や奉仕者の方々、またこの教案誌を用いてくださる各教会伝道所の日曜学校の方々と共に感謝を覚えたいと思います。同時にこれからの子供たちの信仰の成長を願って共に祈りたいと思います。

私の働いている太田伝道所にも小学1年生を先頭にして小さな子供たちが5人います。毎週日曜学校をしながらこの子供たちの成長ぶりを楽しみにしています。子供たちが大きくなるに連れて、日曜学校の配慮や重要性も増しつつあります。そういう中で子供たちの成長ぶりに感謝を覚えもしますが、同時にそれを見守る私たち自身も、自分で言うのもおかしいですが、変えられていることに気がつき、感謝を覚えるようになりました。

以前 NHK で「少年 2」という家庭裁判所のことを扱ったドラマを見たことがあります。その中で自分の子供の教育に失敗をした裁判長が「親は子供によって親にしてもらっているんだ」というセリフを口にしていました。なるほど、私が以前牧会した教会では親の情報交換を兼ねて「親業」を学ぶ会を教会学校として開いたこ

とがありました。「親業」とはなんぞや！と言われそうですが、そういう言葉が最近はやっているようです。その神髄を私は究めているわけではありませんが、その要旨は子供を教育するというよりも教育する私たち自身のことを見つめ直して、子供と向き合い、その接し方を考えるというものだったように思います。子供には必ず教育が必要だと私は思っていますが、ドラマの裁判長が言うようにその子供の教育を通して、自分が親としてまた日曜学校教師としてふさわしい姿へと育まれているのもまた事実ではないかと思えます。

この教える側としての感謝は単純なものではなくて、実際には多くの苦しみや痛み、悔いを経たものであるように思います。先のドラマの裁判長は自分の子供に対する過度の期待から子供を苦しめてしまったという大変な痛みを覚えながらも、その最後で「それでも子供をもって良かったと思う」と言って話しを終えていました。こうした苦労はなかなか口には出して言えないため、人と分かち合うことは難しいのですが、涙をしながらも感じ得た感謝を分かち合えたらいいのになあと思うことがあります。そんなもどかしい思いを感じながら、同じように取り組んでおられる日曜学校の教師や親の皆さんに心からのエールを送りたいと思います。

「御言葉に聞き入ることへ」

- ルカによる福音書 10 章 38 ~ 42 節による説教 -

望月 信 (高蔵寺伝道所協力牧師)

今週も、まず第一のこととして、愛する兄弟姉妹方の皆さまと共に主なる神を礼拝できます幸いを心から喜び、感謝しています。

私たちの毎日の生活は、慌ただしさの中で過ぎ去っていきます。「貧乏ひまなし」という言葉がありますが、一生懸命働いてもなかなか生活は楽にならないという思いの中で、私たちはせわしく立ち働きます。食事をする間も惜しみ、家族とコミュニケーションをとったり、子どもたちと遊ぶ時間、ゆとりの時間をも惜しんで生活しています。そうして「光陰矢のごとし」。あっという間に時が過ぎ去っていき、自分の手元にはいったい何が残っているのか、自分は何をしてきたのか、何も残っていないということにもなりかねない、そういう毎日を過ごしています。そのような慌ただしさの中で、このひととき、教会に集められて、御言葉に耳を傾けて、礼拝を捧げることが許されていることは感謝であり、とても大切なことです。

私たちキリスト者は、そのような日常生活の中で、七日に一度は休むことをモットーにしています。すなわち日曜日、主の日です。主の日には、生活の慌ただしさを中断して、忙しさを理由にすることを止めて、教会の礼拝に集められます。主なる神の御前にひれ伏して、礼拝を捧げること。このことが決定的です。礼拝を捧げることによって始めて、私たちの人生に意味があるのです。自分はいったい何をしてきたのか、自分には何も残っていないという人生ではない。確かに自分の人生には意味がある、祝福され、確かなものがあると言うことができる。そのためには、この礼拝することが欠かせません。聖書はそのことを明確に語っています。

マルタとマリアという二人の女性が登場いたしました。この二人にはラザロという兄弟もいて、三人で暮らしていたようです。マルタという名前には「女主人」という意味があり、ですから、マルタが一番年長であり、一家の主人として、家族を取り仕切っていたと思われます。主イエスとその一行は、この三人兄弟の家に客として迎えられました。

主イエスとその弟子たちの一行は旅を続けておりました。ですから、これは旅の途中で客としてもてなされた出来事です。当時は旅をすると言っても、今のような自動車や電車などの交通機関が整っているわけではなく、また宿泊施設がどこにでもあるというわけではありません。旅人は通りすがりの家を訪ねて、一晩の宿を請うたのです。一晩泊めていただけませんかと願って、そうして休むところを得たのです。またそれだけに、旅人をもてなすことは人間としての基本的なこととして大切にされました。ほこりにまみれ、疲れを覚え、おなかをすかせている旅人に、一晩の宿を提供し、食事を用意して交わりを持つことが、大切な憐れみの業とされていました。ルカによる福音書は、このマルタとマリアの御言葉の前に、善いサマリア人のたとえを書き記しています。強盗に襲われた人を、サマリア人が助けたたとえ話です。主イエスは、その中で、憐れむことが大切であると教えになりました。ルカ福音書は、隣人を憐れむことが大切であると教えて、そして憐れみをもって旅人をもてなす姉妹の姿を描きます。

主イエスとその弟子たちが来られて、マルタたちは、憐れみをもって主イエスたちをもてなそうといたしました。主イエスとその一行が

いったい何人であったのか、それは分かりません。主イエスといつもそのおそばにいた十二弟子だけでも十三人になります。十二弟子以外の弟子もそばにいたかもしれませんから、もっと多かつたのかもしれませんが、いずれにせよ、それほどの客をもてなすとは、大仕事であったであろうと思います。しかし、マルタの妹マリアは、「主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」とあります。主イエスのおそば、一番近くが足もとです。「話」とは「御言葉」であり、福音の言葉にほかなりません。マリアは主イエスの足もとに座り、イエスを主と仰いで、その御言葉に聞き入っています。福音書は主イエスの御言葉に没頭している女性の姿を描き出します。「聞き入っていた」。夢中になってずっと聞き続けていた。主イエスの御言葉に引き込まれて、没頭して聞いていたということです。

福音書はもう一人の女性、マルタの姿も描いています。「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。『主よ。わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせているが、何ともお思ひになりませんか?』。「わたしだけにもてなしをさせて」とあります。これは、私を放っておいておもてなしをさせているということです。

ここから推測されることは、おそらく、ごく当然のことですが、マリアも主イエスと弟子たちのためにおもてなしをしていたのです。家に着いた主イエスと弟子たちのために、足を洗う水を差しだし、食事を用意して、マルタと共に忙しくもてなしていたのです。そもそも当時は、男性の弟子たちに混じって、女性がそこに同席するなどということは、通常あり得ないことでした。ですから、ここで描き出される光景、女性が主イエスの足もとに座ってその御言葉に聞き入っているなど、とても許されることではありませんでした。女性はもてなすために忙しく働いていればよいというのが、当時の考え方です。ですから、当然、マリアも忙しく働き、も

てなしていたのです。ところがマリアは、もてなしながら、主イエスの御言葉が耳に入り、その主イエスの御言葉に捕らえられてしまったのです。ひよっとすると、主イエスの前に食事を差し出そうとしたのでしょうか。そのときに語られていた御言葉に捕らえられて、そこから動けなくなってしまった。そうして、自分の為すべきことを放り出して、主イエスの御言葉に聞き入ってしまった。主イエスの御言葉に引き込まれて、だから没頭して聞いていたのです。

ですから、ここで福音書が描き出すこの女性の姿は、御言葉の力に屈服させられた姿なのです。何も彼女自身が自ら好き好んでそうしたわけではありません。もちろん、彼女は主イエスの御言葉を聞いたかっただけでしょう。しかし、それは事情が許しませんでした。ですから、彼女はもてなしていたのです。しかし、そのところで、逆に御言葉が彼女を捕らえた。すなわち、主イエス御自身が彼女を招き、捕らえたのです。主イエス・キリストの愛と憐れみの故に、彼女は主イエスに捕らえられて、御言葉に聞き入る者へと造りかえられました。福音書は、御言葉に聞き入ることへと至らせられた一人の女性の姿を描くのです。ここに、私たちがまず第一に見つめるべき、信仰者の大切な姿があります。

さて、もう一方のマルタにも言い分がありました。「主よ。わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせているが、何ともお思ひになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。マルタにとって、主イエスと弟子たちをもてなすこと、奉仕をすることは、当然のことでした。それは、女性に求められていることでありましたが、ただそれだけではなく、彼女も主イエスをもてなすことを喜びとしていたであろうと思います。彼女は、決していやいや主イエスをもてなしていたのではない、喜んで主イエスをもてなしていたのです。そして、マルタにとって、妹マリアも一緒に主イエスをもてなすべきであるということのごく当然のこと

とでした。ですから、主イエスに対しても躊躇することなく、「手伝ってくれるようにおっしゃってください」とお願いしたのです。

私たちは、ときおり、マルタを弁護する誘惑に駆られることがあります。マルタのような女性がいなければ、世の中は成り立たないと思うのです。皆がマリアのように主イエスの足もとに座ってしまったら、誰も食事をできなくなるではないか。マリアもよいが、マルタのようにもてなしてくれる人も必要なのではないか、そう考えるのです。世の中には、静かにもの考えるタイプの人がいれば、活動的で世話好きの人もあるのだ。そういう違いがあるからこそ、世の中は成り立つのだ。そのように考えて、それぞれの人の個性の問題として片づけようと思う誘惑に駆られるのです。

しかし、御言葉は、そのような人間の個性について語ってはおりません。私たちはわきまえておかなければなりません。主イエスは、まったく明らかなことですが、そのようには少しも語っておられません。「マルタ、お前の言うことももつともではあるが、マリアのような者もいてよいではないか」。そうおっしゃったのではありません。主イエス・キリストは、まったく単純に、まったく明らかに、「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ」とおっしゃいました。選ぶべきものはただ一つ。マリアはそれを選び、あなたはそれを選んでいない。ただそれだけです。ごく単純です。マリアにとって決定的なこと、大切なことなのである。そうおっしゃるのです。それはすなわち、人間として決定的なこと、必要なただ一つのことなのです。だから、「それを取り上げてはならない」と言われます。彼女からそれを取り上げるならば、それは罪を犯すことにもなる。もし私があなたに同意したならば、マリアから決定的なものを奪うことになる。そうおっしゃるのです。これは非常に厳しいことです。この言葉は、マルタに対して、マリアの大切なものを

取り去ろうとする罪を指摘する言葉です。

主イエスは、マルタに対しておっしゃいました。「マルタ、マルタ。あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」。マルタは、主イエスと弟子たちをもてなすということでは心がいっぱいであり、そのために、多くのことに思い悩み、心を乱していました。これは、心が向かうべきところにまっすぐに向かわず、右に左にそれているということです。ですから、マルタに対して、あなたはそれで本当に私をもてなすことができているのか、そう問う言葉でもあります。あなたは私をもてなそうとしている。しかし、心が集中していない。あなたは心を乱している。そうして、本当にもてなすとはどういうことか、忘れてしまっている。マルタ、あなたはそれを忘れた。しかし、マリアは忘れなかった。だから、マリアからそれを取り去ってはならない、そういうことなのです。

主イエスは、ここで、主イエスと弟子たちを憐れんでもてなす、そのもてなしとは何かということをお問うておられます。さらには、憐れみとは何かということをお問うておられるのです。私たちには、人をもてなそうとして、もてなすことができているということがありません。人に親切にしようとして、憐れもうとして、しかし本当の憐れみとはなっていないということがありません。行為としては親切にし、もてなしておきながら、しかし、心そこにあらずということがあるのです。同じように、主イエスをもてなすということにおいて、決して忘れてはならないことがある。「マリアはそれを忘れていなかった。だから、マルタ、あなたはそれをマリアから奪ってはならない。むしろ、あなたもそれを大切にしてください」。主イエスはそうおっしゃったのです。主イエスは、マルタに対しても、このただ一つの大切なこと、決定的なことを選ぶよう招いておられます。こうして、「それを取り上げてはならない」とは、第二に、マルタに対する招きの言葉にほかなりません。

主イエスは、この出来事に先立って、サマリア人のたとえを語られて、憐れむことの大切さを教えられました。しかし、主イエスは、ただ憐れむことの大切さだけを教えられたのではありません。そのたとえを語られる前に、主イエスは、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」という律法の要約が大切であると、教えられました。ですから、神を愛することと隣人を愛することです。このことが一つのこととして語られました。すなわち、神を愛し、その御言葉に聞き入ってはじめて、人を愛することもできる。人への憐れみをもつこともできる。私たちにとって憐れみとは、神を愛し礼拝することに加えて与えられる祝福なのです。

そうであるならば、主イエスをもてなすということにおいても、神を愛することがしっかりと覚えられていなければなりません。主イエスを仰いで、その御言葉を聞いて、神を礼拝するのは、この決定的なことが忘れられているならば、この決定的なことが欠けているならば、いくらもてなしたとしても、そのもてなしは無意味である。そう言われるのです。隣人を憐れむということにおいても同じです。人を愛することと同じです。神を愛することなく人を愛するのであるならば、その愛はむなしのです。どんなに人の目に美しい愛であっても、それは神の御前にむなしのであり、主の喜ばれるものではありません。だから、この決定的なこと、主イエスの御言葉に聞き入り、神を礼拝することを大切にしてください。この決定的なことを失ってはならない。そう教えられます。

私たちの日常生活は、マルタのように多くのこと思い悩み、心を乱すことが多いのです。決して自分のことばかりを考えているのではなく、人のためを考えて労苦して、そうして、人生は追いかけるようにして過ぎ去ります。世の中は、そのように心を乱していること

を求めます。さまざまなことによって私たちの心を引き裂こうといたします。しかし、大切なことがある。決定的なことがあるのです。この決定的なことを失うならば、いくら心配りをしても、いくら慌ただしく生活しても、それは無意味なのです。

マリアは、慌ただしい有様、もてなすことを求める周囲の状況の中から、御言葉に聞き入ることへと引き込まれ、御言葉にひれ伏しました。御言葉には、そのような周囲の状況を打ち破る力があります。私たちは、その御言葉の前にひれ伏します。へりくだって、謙遜になって、主イエスに捕らえていただくのです。主イエスに自らを差し出し、へりくだって御言葉に聞き入るのです。そうしてはじめて、私たちはすべての重荷から解き放たれます。主イエス・キリストに依り頼むことが始まります。主なる御神お一人を私の主とすることが始まるのです。

私たちが教会に集められている幸いは、それを一人ですのではなく、共同体の業として、兄弟姉妹と共にするというにありまます。マルタとマリアも、姉妹の関係の中で、御言葉に聞き入る者として成長させられました。私は、マルタも主イエスの御言葉に聞き入る者とされたことを確信しています。私たちも、愛する兄弟姉妹の交わりの中で、またそれぞれに与えられた教会の群れの中で、共に礼拝を捧げ、御言葉に聞き入る訓練を受け、主の御前に成長させられます。私たちには、主の導きと励ましを確信することが許されています。

御言葉に聞き入ること。これが、すべての人にとって必要なただ一つのことです。騒がしい中であって、すべてを忘れて御言葉に聞き入り、御言葉に没頭する時が必要です。私たちは、自らの人生が主なる神の祝福に満たされるよう、神の御前に喜ばれるものであるよう、祈り願います。そうであるならば、私たちは、御言葉にひれ伏すことを選び取りたい、大切にしたいのです。御言葉に聞き入ることに励むのです。

「オランダ改革派教会における契約の子の教育」 その一

牧田 吉和（神戸改革派神学校）

はじめに

日本キリスト改革派教会は、創立宣言において表明した教会形成論において「一つ信仰告白、一つ教会政治、一つ善き生活」の三本柱を主張しました。しかし、信仰告白を厳密に保持し、長老主義政治の確立を目指したからと言って、それで聖書的教会が自動的に形成されるわけではありません。それらは、必要条件ではあったとしても、十分条件とはならないからです。

筆者が見た限りにおいて言いますと、例えばスコットランド長老主義教会とオランダ改革派教会の場合を思い起こします。改革派教理の純正さの堅持、長老主義政治の徹底性において、両教会とも相互に勝るとも劣らない内容を持っています。しかし、現在における客観的状況としては、スコットランドの長老主義教会にはもはやかつての栄光の姿はありません。著しい高齢化が目立ち、衰退をどのように食い止めるかが現在の緊急の課題になっています。一方、オランダ改革派教会も、今日の世俗化の波に飲み込まれ、後退を余儀なくされ、困難に直面していることは事実です。しかし、オランダ改革派教会はなお活力を維持し、教会においてなお若い世代や多くの子どもたちを見出すことができます。この両者の差をそれほど単純に説明できるわけではありません。歴史的・社会的・経済的諸要素も複雑に絡まっているからです。それにもかかわらず、一つの点が指摘できるとすれば、それは契約の子の教育の問題です。スコットランド長老主義教会との比較において、オランダ改革派教会における契約の子の教育の徹底性はやはり注目すべき特色です。少なくとも現

時点における両教会の現状の差の一つは、契約の子の教育の徹底性に起因していることは確かだと思います。

オランダの改革派教会は日本の教会とは歴史的背景も宗教的環境も異なります。したがって、契約の子の教育自体もそれをそのまま日本の教会に適用するわけには行きません。しかし、オランダ改革派教会が、歴史において契約の子の教育とどのように取り組んで来たかを見ておくことは無意味ではありません。日本の状況を踏まえた上で、その歴史から学び、今日における契約の子の教育の具体策を独自に創出できる可能性があると思うからです。

そこでこの小論においては、オランダ改革派教会の契約の子の教育、特に「カテキズム教育」を中心に、その歴史的展開を紹介し、日本キリスト改革派教会の契約の子の教育の今後を考えるための素材を提供したいと考えています。

この小論で取り扱う範囲は、歴史的にはオランダ改革派教会が誕生してくる16世紀半ばから18世紀末までです。これ以前の宗教改革期にすでにカテキズム教育には実績があります。カテキズムについての詳細な歴史的研究を行ったW.フェアボームよれば、宗教改革期のカテキズム教育の中心は、ヴィッテンベルク、チューリッヒとその周辺、ストラスブルク、ジュネーブ、ハイデルベルク、ロンドン・オランダ亡命人教会などです（W.フェアボーム：『宗教改革と第二次宗教改革のカテキズム』、1986年）。ヴィッテンベルクはルター派の拠点ですが、他のところは皆改革派に関係します。この事実それ自体が、すでに改革派教会におけるカテキズ

ム教育の特別な熱心を示唆しているでしょう。オランダ改革派教会のカテキズム教育は、これらの中心地の影響を受け、その基礎の上に築かれたものです。しかし、この小論ではこれらの中心地のカテキズム教育に詳細には立ち入りません。上記の時代の範囲に限定し、必要な限りそれらの中心地のカテキズム教育についても触れることにします。

I. オランダ改革派教会のカテキズム教育と「家庭」

宗教改革期のカテキズム教育について、どの場合にも当てはまる一つの事実があります。それはカテキズム教育における「家庭」と「学校」と「教会」の「トライアングル」です。その三つ組は一体的なものです。この「トライアングル」は、オランダ改革派教会のカテキズム教育においても完全に当てはまります。そこで、まず「家庭」との関連におけるカテキズム教育の問題から取り上げることにします。

1. 家庭における契約の子の教育の強調

教会のカテキズム教育を行うにあたって、家庭における契約の子の教育が不可欠な前提です。オランダ改革派教会は、当初から恵みの契約の概念に基づき、契約の子の教育に関する両親の責任を特別に強調してきました。

教会的にはすでに 1568 年の「ヴェーゼル協議会」で両親の契約の子に対する教育の責任が指示されています。1572 年の「エアダム大会」では両親がどのように契約の子の教育を行っているかを監督する教会の義務に言及しています。しかし、幼児洗礼における誓約者（通常は両親）の契約の子に対する教育責任についての誓約条項が含まれるようになったのは 1586 年のことです。1603 年の「ハルダーウェイク地方大会」では、教会役員が家庭訪問し、両親によって契約の子たちが教育されている内容を試験することを定めています。1618 ~ 19 年の有

名な「ドルトレヒト全国総会」も、教会が家庭における契約の子の教育を監督する責任を明確にし、教会による譴責にも触れています。

しかし、以上のことは家庭における契約の子の教育が忠実に果たされたことを意味しているわけではありません。むしろ、その義務が無視されることがたびたび起こりました。上に述べた教会役員による契約の子の教育内容の試験実施、あるいは義務不履行に対する譴責の問題も、そのような歴史的現実を背景にしてはじめて適切に理解できることです。両親の怠慢に悩んだ教会は、1598 年の「アルンヘム大会」では公権力の干渉さえも必要とするといった議論をするほどでした。つまり、オランダ改革派教会の家庭における契約の子の教育は、簡単に実現されたわけではなく、教会が長い時間をかけて苦闘しながら、粘り強く取り組んできた結果なのです。

家庭における契約の子の教育に対する教会の監督は、歴史的伝統を堅持するオランダ改革派教会においては今日でも実践されています。オランダ改革派教会には年二回定期的に家庭訪問を実施する伝統があります。長老と執事が一組になって、担当地域の各家庭を訪問します。訪問の際には、聖書朗読と祈り、短い勧めがなされ、その後で両親に対し、また子供たちに対し、様々な質問が投げかけられます。その中で重要な役割を占めるのが、家庭における契約の子の教育の実情を問うことです。どのように家庭礼拝を実施しているのか。どのように子供たちに聖書や教理を教え、詩篇歌を覚えさせているのか。長老と執事が次々と質問してきます。留学生であり、牧師である私に対しても遠慮のない質問が向けられました。この家庭訪問の報告書が小会に提出され、問題があれば牧師があらためて訪問し、指導します。場合によっては、小会から譴責を受けることも覚悟しなければなりません。

2. 家庭における契約の子の教育の内容

家庭における契約の子の教育の内容は、宗教改革期の契約の子の教育内容とほぼ一致しています。整理すれば、以下のような内容に要約できます。

- ① 諸教理問答に含まれているような、「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」を内容とする基本的な改革派教理。
- ② 礼典について（これも諸教理問答に含まれている）。
- ③ 朝の祈り、夕の祈り、食事の時の祈り、その他の祈り。
- ④ 詩篇歌と他の賛美歌。
- ⑤ 聖書。聖句及び聖書物語。

3. 家庭における契約の子の教育の教材

家庭におけるカテキズム教育の教材に関して、1563年にペトロス・ダテヌスの「ハイデルベルク教理問答」のオランダ語訳が出版され、それが教科書として使用されることが推奨されました。しかし、それは実際には子供たちには難しすぎたために、1574年の「ドルトレヒト地方大会」では、マイクロニウスの「小教理問答」（1552年）の使用も容認されました。後には、ファウケリウスの「キリスト教要理」（1608年）がマイクロニウスのものに替わって用いられるようになりました。この書は、ミッデルブルフの牧師であったファウケリウスが「ハイデルベルク信仰問答」を契約の子の教育用に要約したものです。しかし、地域的に様々な教理問答書が用いられた事実も知られています。例えば、北部地域ではマルニックスの「小教理問答」（1592年）が、ゼーランド地域ではテーリィングの「小教理問答」（1592年）が用いられることがありました。その他、神学的な立場によっても分けられ多くの教理問答書が存在しました。1637年からは、ファウケリウスの「キリスト教要理」が公認「詩篇歌集」の巻末に収められ、契約の子の教育用として教会的権威をもつもの

となりました。

契約の子の教育は、教理問答にとどまらず、聖書物語にも及びました。17世紀半ばから18世紀初めにかけて、ポルスティウス、クールマン、ステレン、リッデルス、ドートレイン、ヒュブナー、ホンディウスなどの聖書物語教本が出版され、家庭で用いられました。

4. 家庭における契約の子の教育の実際

家庭における契約の子の教育の方法について、ヨハネス・ア・ラスコやマイクロニウスが奉仕した「ロンドン・オランダ亡命人教会」を例にとって紹介しておくことにします。この教会にとって、亡命人教会として、母国とは異なった環境の中で教会的アイデンティティを保つために、改革派教理の堅持は生命的な意味を持ちました。そのために教会における教理問答教育がきわめて重要な意味を持ち、それと一体化した家庭における契約の子の教育も一層重視されました。またこの教会における教理問答教育は、すでに言及したマイクロニウスの「小教理問答」が母国において使用されるようになった事実からもわかるように、母国オランダの改革派教会に大きな影響を与えました。

ロンドン・オランダ亡命人教会は、子供たちが5才か6才で基礎的教理を教会の試験の場で暗誦することを求めました。したがって、両親は家庭で子供たちに教理問答教育を施さなければなりません。小さな子供たちにはマイクロニウスの「小教理問答」（1552年）を用いて教え、成長するとア・ラスコの「大教理問答」（1546年）を教え込みました。教授方法は、記憶をし、暗誦するという古典的で、単純素朴な方法でした。

家庭における契約の子の教育の実際をさらに具体的にイメージするために、17世紀初め頃の家庭における安息日の過ごし方を紹介しておくことにします。当時、家庭を「小さな教会」と見なすことは広く行きわたっていました。こ

れをピューリタンの影響と見なす人も多いのですが、その点は確証されていないとする歴史家もいます。しかし、いずれにせよ、契約神学に立つ改革派・長老派の場合には、家庭はあくまで契約の家庭であり、家庭が「小さな教会」と見なされるのも当然でしょう。以下、テーリングが与えている安息日の過ごし方の指針を提示しておきます。

i. 午前中のプログラム

- ① 聖書朗読。
- ② 安息日礼拝への出席。
- ③ 個人祈禱。

ii. 午後のプログラム

- ① 説教についての語り合いをし、詩篇歌を歌って、食事をする。
- ② 午後の安息日礼拝への備え。
- ③ 午後の安息日礼拝への出席。
- ④ 個人的黙想、また説教についての共同の語り合い。
- ⑤ 子供たちと一緒に説教の復習及び個人的な時間。
- ⑥ 祈り

iii. タのプログラム

- ① 聖書朗読と食事。

- ② 交わり、祈りそして詩篇歌を歌うこと。
- ③ 個人的黙想。
- ④ 祈り。

以上のようなプログラムを見れば、家庭においてどのような信仰生活がなされていたか、またそれが契約の子たちの信仰教育といかに密接に結びついていたかを容易に想像していただけるでしょう。

このような伝統は、歴史的伝統を重んじるオランダ改革派教会では現在でも相当部分生きています。週日においても今日でも基本的に三回の食事毎に家庭礼拝が守られています。安息日には、礼拝の後に家庭で説教の内容についての話し合いがよくなされています。筆者自身、たびたび礼拝後にお茶に招かれ、そのときの話し合いはいつも説教をめぐるものでした。その伝統の根源は、上に掲げた安息日の守り方にあることを後になって理解することができました。

以上、今回は、「家庭」における契約の子の教育について紹介しました。次回は、上に指摘した「トライアングル」の他の二つ、「学校」と「教会」における契約の子の教育について記すことにします。

(次号に続く)

神港教会教会学校の紹介

神港教会聖書学校校長 松村道雄

1. 神港教会の近況と信仰教育体制

わたしたちの神港教会は4年後(2006年)に創立100周年を迎えようとしています。最近の歩みをふり返れば、一昨年(2004年)のクリスマスより安田吉三郎牧師の後任として岩崎謙牧師をお迎えし、5年前には新しい教会堂も与えられました。今年中にパイプオルガンも設置されることになっています。いよいよ新たな思いで着実な歩みをなすべき時を迎えています。そのことは同時に、自分たちの自己満足に満ちた姿勢を御言葉によって改革されるべき時を迎えている、ということが出来ます。改革されるのが最も求められているのは、子供たちと青少年に対する信仰教育と伝道の姿勢なのかもしれません。

神港教会の教会学校は、聖書学校(小学生までが対象)と成人科(長老たちによって指導される教理の学びの時間)に分類されます。中高生には、教会の公的礼拝と位置付けられたジュニア礼拝が用意されています。また、受洗・信仰告白希望者に対する求道者会・準備会が、必要に応じてなされます。それぞれの主な活動は、主の日の朝拝前に行われています。なお、子供たちを対象にした教会の働きとして、こひつじ文庫の活動(土、日の午後)も行われています。ここでは、聖書学校とジュニア礼拝について紹介いたします。

2. 聖書学校とジュニア礼拝

聖書学校では生徒数の急速な減少傾向に歯止めがかけられずにいます。昨年の統計では、生徒の平均出席人数は13名でした。神港教会の聖書学校といえば、かつては改革派教会の中でも目立った存在であったと思います。しかし、今、大きな試練の時を迎えています。なお、中高生のジュニア礼拝の平均出席は14名(担当教師等の出席約4名を含む)でした。

聖書学校の厳しい現状を痛烈に感じさせられたのは、昨年のクリスマスでした。それまでのいくつかの特別行事への参加者の減少から危機感を持ち、特別にきれいなチラシ(教会用に販売されている1枚5円のカラー印刷紙を利用)をたくさん準備し、近隣の小学校前で配布したり(教会員の奉仕)、協力いただける幼稚園には子供たちへのチラシの配布もお願いしました。しかし、23日午後のクリスマス行事への子供の参加者は、生徒たちも含めて19名しか



夏期学校にて

ありませんでした。わたしたちは、いまだに自信喪失状態を引きずっている感じです。

生徒数の減少の原因を分析すれば、いろいろなことが考えられます。日本全体の少子化傾向。加えて、神港教会の地区の半商業地化と、周辺地区の高級住宅地化にともなう著しい少子化があります。教会にも向けられる宗教に対する不信感や、日曜日に家庭および学校等から子供に提供される豊富なプログラムも、当然大きな影響を及ぼしているでしょう。また、契約の子供の多くが教会からの徒歩圏外に住んでいることも、教会と周辺地域の子供との関係を希薄にしています。これらは、すぐには解決できないことばかりです。希望の光を見いだすことのできない中で、反省を込めて、わたしたちの活動を紹介いたします。

聖書学校では、礼拝を9時15分から30分間行い、その後分級に分かれます。クラスは小学校入学前、3年生まで、6年生までの3つです。ただし、月1回は分級とせず、全員で旧約聖書物語の話の聞いたり、賛美の練習をしています。礼拝の話は、岩崎牧師、高島恵執事、松村が月1回ずつ担当し、後は他の教師たちが順に担当しています。分級では、礼拝の箇所を年齢に応じて学びなおしています。礼拝の教案は昨年7月末より、「日曜学校教案誌」を1号から用い始めました。ですから、本誌を利用している他の教会からは、少し後れながらの学びになります。なお、それまでは長く独自教案を用いてきました。最近では、安田牧師がジュニア礼拝でなされたマルコ福音書の連続説教、加藤常昭先生の「主イエスに出会った人々」などを基礎テキストとして用いました。

中高生向けのジュニア礼拝は、9時15分から10時まで行われます。説教は岩崎牧師の他、月二回を長老たちが担当しています。そもそもジュニア礼拝が始まったのは10年前のことでした。それまで、中学生は聖書学校に中学科生徒として属していました。しかし、小学校入学

前の子供たちから中学生までが多くの活動をいっしょにすることには、無理がありました。そのような中、「中高生の時期に(理想的には12才で)契約の子供たちに信仰告白をしてもらいたい」との安田牧師の強い願いから、ジュニア礼拝が開始されました。安田先生は、礼拝のほとんどをお一人で担当されました。そのお働きは、多くの祝福を受けてきました。中学入学によって教会とのつながりが切れる生徒の割合は低下しましたし、契約の子供たちの信仰告白も順調になされています。岩崎牧師に交替してからも、ジュニア礼拝が継続されるとともに、中高生を対象にした新しい取組も行われています。昨秋には、中高生が主体となって、中高生向け伝道集会(教会の夕拝)が行われました(新来会者は3名だけでしたが)。

中高生のジュニア礼拝に比べて、状況がより深刻なのは聖書学校です。この状態を何とかすることを願って、年数回の特別行事(いも掘り、おだんご大会、おもち大会、ハイキングなど)も行ってきました。二泊三日の夏期学校も続けてきました。また、ホームページも開設しました(<http://www.ne.jp/asahi/shinkou/kyoukai/>)。しかし、特別行事には参加する子供も、日曜日の聖書学校にはほとんど来てくれません。今年の統計(平均出席13名)の中、契約の子以外のお出席はほぼ1名という現状にその問題が端的に



特別行事「いも掘り」

現れています。種まき伝道としての、聖書学校の働きが機能しなくなっています。しかし、ここで聖書学校を契約の子のみを対象にしたものに変えてはいけないと思っています。

こうした思いから、今年は、これまでと違う切り口からの活動を取り入れることを考えています。具体的な計画の一つは、3月に渡邊郁子先生（引退牧師夫人、子育て論の専門家）を講師としてお迎えした、子育てに関する主題での伝道的講演会です。このような機会を通して、教会と聖書学校の活動に対する親の理解を得て、親と子とに伝道の働きかけをすることを目指しています。当日の教会の朝拝も、子供が主体的な礼拝参加者となれるような特別な形での礼拝を計画しています。教会として子供への伝道を真剣に考えるためです。このような新しい試みを行うとともに、わたしたちが長年続けてきたことも自己満足になっているのではないかとの反省をもって、ひとつひとつ点検しようと思っています。子供たちへの伝道の働きにおいて明るい兆しを得ている教会からは、ぜひその具体的な方法、また、担当奉仕者の姿勢等についても学ばせていただきたいと思います。



クリスマス劇

3. 「日曜学校教案誌」についての感想

まだ聖書学校での使用を始めて半年ほどですが、多くの点で感謝をいたしております。特に、礼拝の説教だけでなく、聖書箇所とカテキズムの学びの準備、また、年齢ごとの分級の指導例までが周到に用意されているため、礼拝と分級とを関係よく進めることができ、そのことが大きな益となっています。担当する奉仕者の学びとしても大いに役立っています。教理の学びについては、これまでも聖書学校の礼拝と分級で目指したこともありましたが、適当な教材がないために継続することができませんでした。大変なご努力によって、このような整った教案誌を作成してくださった担当者の方々に、心より御礼申し上げます。

今後もよりよい教案誌とするための検討も続けられると思いますので、ご参考までにこれまで使用した中で感じた疑問点を記させていただきます。

1) 教理を体系的に学ぶことの大切さは十分理解できますが、礼拝においてこの体系通りの学びを進めることの難しさを感じることがありました。たとえば、罪の問題が教案誌の2号において5回連続で取り上げられます。その期間はひと月以上になります。幼児教育における罪の扱いの難しさは同じ2号の吉岡良昌先生の文章(p.13)にもありましたが、罪を扱うこの期間に「喜びの礼拝」を維持できているだろうかという別の問題も経験しました。罪を語ることが福音を伝えるために不可欠であることは当然ですが、罪の本当の姿が理解できるのは信仰を通してであることを考えれば、もっと短い期間で切り上げて救いの部分に入る、あるいは、救いを語る中でまた罪を扱うといった方法もあっていいのではないかと思います。

2) 2回にわたる三位一体の学びについても同様な印象を持ちました。特に、存在論的三位一体は子供たちには(教師にも)かなりの消化不良という感じでした。

3) 教理の学びと礼拝の聖書箇所に関係に疑問を感じたこともあります。たとえば、8月19日に摂理が扱われ、そのカテキズムにおいて、運、占い、たたり等が取り上げられています。子供を取り巻く環境を考えれば、これらの間違いを教会がきつちりと教えることは重要であると思います。しかし、その礼拝において、ヨハネ9章の「生まれながらの盲人」の箇所が選ばれて、そこでのイエスさまのお言葉が因果応報思想を否定したものとして、このカテキズムと結びつけて展開している点に疑問を感じました。教案誌の扱いは、ここの聖書箇所のメッセー

ジの広がりはずいぶん小さくしてしまっているように感じるからです。このような問題を感じた背景には、そもそも、教理の体系を学びつつ、同時に聖書のメッセージを聴くということの難しさがあるのだと思います。しかし、礼拝において用いるのですから、御言葉の豊かなメッセージを聴き、そこで喜んでイエス様にお会いするという点に、さらにご配慮をお願いしたいと思います。

素人が不十分な理解のままに勝手な思いを記したのかもしれませんが。どうぞお教し下さい。この後も、本誌をよりよいものとするために、いろいろな意見・感想が寄せられることでしようが、そのご参考になればと思います。

本誌が改革派教会全体で、さらには教派を越えて用いられて、子供たちへの伝道の困難さを突破する力となることを願っております。

中学生・高校生のための教会史

杉山 明 (瑞浪伝道所宣教教師)

第1課 教会と土台とエルサレム教会

教会史への招待

私たちが生きているのは、キリストの御降誕から2000年以上も経った21世紀という時代である。神が人類のために救いの計画を立て、救い主を遣わして歴史の中でそれを実現されつつあることを、旧約聖書や新約聖書の学びを通してすでに知っている。救い主イエスが在世中に示された教えと行なわれた贖いの御業によって、神の救いの計画がすべて終わったのではない。また、新約聖書の中に書かれている使徒たちの伝道活動をもって、「救いの計画」が完了したのでもない。主キリストは、マタイによる福音書28章19節で、十一弟子たちに大宣教命令を与えられた後に、20節で「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがた共にいる」という約束を与えて、世の終わりまで神の人類救済の働きが継続することをお教えになった。現在の私たちの教会と信仰生活は、単なる人間の営みとしてあるのではなく、「救いの計画」実現の連鎖の中にあり、世の終わりに完成される神の御国にいたるひとこまである。

そう考えると、キリストの降誕から現代にいたる2000年間の教会の歴史も、「救いの計画」の実現の歴史であり、神の摂理的御業の足跡であるので、私たちの今日の信仰に深いかかわりを持っている。過去の教会の歩みは、現在の教会に影響を及ぼし深くかかわっている。もちろん、過去の教会の歩みには、教会に与えられた使命に燃えた模範となる営みもあれば、そこから逸脱した足跡もあり、傷つき、吐息をついている教会の姿もある。それにもかかわらず、教会の足跡を学ぶとき、神は教会を見捨てず、御

国の完成のために、教会を用いておられる摂理の恩寵を確信することができるであろう。過去の教会の足跡をたどりつつ、「戦いの教会」の姿を知り、終わりの日まで続く「信仰の戦い」に備えるために、教会史に興味を抱いて欲しい。

教会史の出発点

さて、キリスト教史はどこから始まるのであろうか。神に召された者たちの群れが教会であるという定義にもとづく、旧約聖書の時代からさかのぼることができる。しかし、一般的には、キリストの降誕から始まり、現代にいたる教会の歴史を教会史と呼んでいる。このテキストでは、「新約聖書の時代に起源をもつ教会」という一般的定義に従って、教会史を取り扱うことにする。

教会の土台であるキリスト

新約の教会はキリストの弟子たちの伝道を通して、ユダヤ人という民族的なわくを乗り越え、世界的で普遍的な教会として進展して行くのであるが、その教会の土台は主イエス・キリストであると、新約聖書は書き記している(コリントの信徒への手紙一3章11節)。罪人の罪と罪責を償うために、この世に遣わされ、ご自分の命を贖いの小羊として捧げられた主の十字架での死の御業と、死の恐怖と力を打ち破ってよみがえられた復活の御力が、弟子たちに救いと喜びを与え、イエスが真にキリストであるとの確信を与えたからである。弟子たちは、その復活のキリストから世界伝道への使命を与えられ、また、伝道に必要な内的力を与える聖霊降

臨の約束を受け、キリストの復活の証人となる決意をうながされた。

聖霊によるエルサレム教会の成立と中心的メッセージ

エルサレムに留まって聖霊が降る時を待つようにと、復活の主から命じられた弟子達は、120名ほどの少数の群れであった。ところが、西暦30年の五旬祭の日に、キリストが約束された聖霊が弟子たちの上にくんだり、聖霊に満たされた使徒たちはエルサレムで伝道活動を開始した。この日のペトロの証言(説教)の中心メッセージは、キリストの復活証言とその意義を示

し、悔い改めてイエスを旧約聖書が預言するキリストとして受け入れよ、ということであった。それ以後の新約聖書に記録されている使徒たちの説教も同様である。ペトロの説教に心を打たれた3000人ほどの群集が、五旬祭の日に悔い改めてエルサレム教会員となり、以来、日々仲間に加わる人々が与えられた。改宗者たちは、使徒たちの教えを学び、守り、相互の交わりを深め、共に食事をし、聖餐に与り、信仰共同体として、飛躍的成長を遂げている。こうして、キリストを土台とした教会がエルサレムと全世界に建てられていった。

第2課 使徒時代の世界伝道

地の果てに向かって

五旬祭の日、聖霊降臨によって力を得て始まった弟子たちの伝道と教会形成は、間もなく「ユダヤとサマリヤの全土、地の果てに至るまでわたしの証人となる」との主イエスの命令どおり、世界伝道へと発展していった。その様子の一端が、使徒言行録以下の新約聖書に記録されている。それによると、使徒時代の教会の進展は、次のような過程をたどっている。

使徒時代の伝道の進展

聖霊の力によって信仰共同体として歩み始めた頃のエルサレム教会は、組織も伝道体制も十分には整っていなかったが、次第に充実していった。

第一には、急速に増えた教会員の世話をする知恵と霊に満ちた7人の役員を選び、共同体の運営に当たらせ、使徒たちが十分に御言葉を語ることが出来るように配慮がなされ、組織の充実が図られた。

第二は、伝道の地域の拡大が図られた。エルサレムにある「開放された奴隷の会堂」と呼ばれていた外国語を話すユダヤ人の集まる会堂で

活躍し、最初の殉教者となったステファノの伝道をきっかけとして起きたエルサレム教会への激しい迫害に苦しめられたが、それによって伝道戦線がエルサレムからサマリヤやユダヤの全土へと拡大されていった。キリスト者たちはエルサレムを離れ各地に散らばったが、彼らが留まったところで福音宣教を始め、教会建設に従事した。その実例として、フィリポによるサマリヤ教会の設立やエチオピア人への伝道が記録されている。

第三に、本格的な異邦人伝道のための人的資源を備えられたことである。復活の主は、エルサレム教会の大迫害に中心的な役割を果たしたサウロという若者を異邦人の使徒として召し出し、ローマ世界への伝道を遂行させた。パウロと改名したサウロは、ユダヤ人であったがローマの市民権を持っていた。その特典を利用し、ローマ帝国が支配していた領土である地中海沿岸の諸都市を伝道して西に進み、シリア、キリキア、ガラテヤ、アジア地方、エーゲ海を渡って、マケドニア、ギリシア、そして帝国の首都ローマに、さらにスペインにまで福音を伝え、多くの教会を建設した。パウロのみならず、そ

の他の使徒たちもエジプト、メソポタミア、アラビアなどに伝道し、教会の設立に貢献したと伝承は伝えている。

教会進展の原因

西暦 45 年、パウロが第一回伝道旅行を開始してから、使徒時代が終わる 1 世紀末までの 50 年余りの歳月に、福音が急速にまた広く伝えられ、受け入れられ、教会が設立されていったことは、驚きである。なぜ、使徒時代の教会は、このように急速な進展をしたのであろうか。

(1) その第一の原因は、教会が主から授けられていた「優れた力」にある。使徒達が伝えた教え（福音）そのものが持っている力と、それを伝えた使徒たちの権威と信仰の力であった。罪の赦しを提供する福音の力は最大の原因である。次に、その恵みを受けたキリスト者たちの信仰が生み出す倫理的高さや普遍性が人々の心に影響を及ぼす力となった。当時のキリスト者たちは、一つの時代や一つの民族にだけ通用する信仰や徳ではなく、時代を超え、世界的に

通用する真理と倫理的高さをもって伝道に当たったからである。

(2) 第二の原因は、福音を聞く人々が住んでいる世界に対する神の摂理的導きである。キリストが「時が満ちて」この世に遣わされたように、福音の種をまき、実をよく結ばせるために、神は、ユダヤ人、ギリシア人、そしてローマ人を用いて土壌を耕す作業に従事させ、福音宣教の準備をされた。ユダヤ人は、旧約聖書の教える唯一神の信仰を世界に伝え、使徒たちの伝道基地となる会堂を各地に準備した。ギリシア人は世界共通語であるギリシア語をその文化と共に、世界に普及させ、ギリシア語を用いて伝道できる環境を準備した。ローマ人は、ローマ帝国による世界統一に成功し、人類は一つの法のもとに一つであるという思想やローマの平和と呼ばれる平和や、世界に張り巡らしたローマに通じる道路の整備などによって、福音宣教が容易にできるように準備した。このように福音を知らない民族を通して、神は福音宣教の備えをなさせ、教会の進展を導かれた。

第 3 課 初期ローマ帝国の迫害と使徒後教父たち

ローマ帝国初期の迫害

新約時代に活躍した主の使徒たちは、その後どうなったのであろうか。新約聖書には、使徒たちの活躍は記録されているが、その死については触れていない。使徒たちの働きや死については、次の世代のキリスト者たちが書き残した文書によって知ることができる。特に有名な文書は、カイザリアの監督エウセビオス（260 ~ 346 年）が書き残した「教会史」である。これは、キリストの出現からコンスタンティヌス大帝の勝利（324 年）までの教会の歩みを書いている。それによると、ローマ皇帝ネロの時代（在位 54 ~ 68 年）にネロが引き起こした迫害によって、「ローマでパウロスが斬首され、ペトロスも同様に串刺しの刑にされたと言われ

る」と記録し、その伝承の確かさについても続けて書いている。また、ローマ軍によるエルサレム包囲と陥落（70 年）について延べ、使徒ヨハネの晩年についてはドミティアヌス皇帝の迫害で島流しにあった後、エフェソで暮らしたことも記録している。使徒たちが殺されたり、教会が惨劇にあたりたりした 1 世紀のローマ帝国による迫害は、皇帝の個人的動機や地方的規模の迫害であった。2 世紀、3 世紀と次第にローマ皇帝の迫害が大規模化していったが、後で学ぶことにする。

使徒後教父たちの活躍

新約聖書の最後の書であるヨハネの黙示録は、西暦 90 年代の後半に使徒ヨハネが書き残

した書である。ヨハネが死ぬと使徒時代（新約聖書の時代）は終わり、教会は、使徒後教父の時代（1世紀末から2世紀半ば）を迎えた。使徒たちから教えを受けた教会指導者たちが、活躍する時代である。その代表者は、ローマの司教クレメンス、シリアの監督のイグナティオス、スミルナの監督ポリュカルポス、そしてヒエラポリスの監督パピアスである。彼らは、どのような働きをしたのだろうか。福音の宣教がローマ世界に広がり、時間が経つとともに、教会は様々な異教的思想と対決することになった。使徒後教父たちは、使徒たちが戦ったユダヤ主義との戦い、またギリシア思想との戦い、世俗主義との戦いに加えて、次第にエスカレートするローマ帝国による迫害とも戦い、教会を守らなければならなくなった。世界宣教よりも、教会を守ることが大切な役割となっていった。

(1) ローマの司教クレメンス (30 ~ 100年) . . . クレメンスは、当時の教会でよく読まれていた「クレメンスの手紙」を書いた教父である。新約聖書を除くと教会史最古の文章である。その内容は、コリントの教会で発生した若者たちの長老排斥騒動に対して、聖書が教えている秩序を示し、長老を重んじることを教え、長老への従順を勧告する説教である。教会が主から与えられた「優れた精神」を継承することの重要性を教えている。

(2) アンティオケアの監督イグナティウス(35年頃 ~ 110年頃) . . . イグナティウスは、ローマ皇帝トラヤヌスの迫害によって捕えられ、ローマに護送の途中で、六つの教会とポリュカルポスに手紙を書き送った。その手紙によって、殉教を喜ぶ信仰と意志、教会の一致を損なう異端への厳しい態度、教会の秩序付け、復活信仰と三位一体の神信仰を明らかに教えている。

(3) スミルナの監督ポリュカルポス(69 ~ 155年頃) . . . ポリュカルポスは使徒ヨハネに学び、スミルナ教会の監督となり、イグナティウスとも親交があった。現存する文書は、フィリピンへの手紙だけであるが、この手紙を見ると、家庭や教会における金銭欲の除去し、倫理的高さを持つこと、異端の排除、正しい信仰の堅持などを教えている。

(4) ヒエラポリスの監督パピアス (70年頃 ~ 150年頃) . . . パピアスは、原本は残っていないが、多くの文書を書いた。ポリュカルポスの弟子エイレーナイオスやカイザリアのエウセビオスという後世の教父たちによって引用され、当時の信仰や伝承を残し、次の世代に貴重な資料を提供した。

彼らの文書によって、1世紀末から2世紀半ばに教会が取り組んだ課題が、迫害に屈しない信仰の強化、信徒の育成、組織の充実であったことを理解できる。

第4課 異教と戦う教父たち

異教的思想との戦い

使徒言行録や使徒たちの手紙によると、使徒たちがエルサレムで福音の証人としての活動を始めてから絶えず、その伝道活動への抵抗に遭遇してきた。使徒後教父の時代も、また、それに続く2世紀後半から始まる古カトリック教会と呼ばれる時代も、教会は福音宣教に対する妨害勢力と戦わなければならなかった。ローマ帝国による国家的迫害という大きな戦いのほか

に、使徒時代から2世紀にいたる時代に生じた教会の異教思想との戦いの足跡をこの課で学んでいこう。その戦いを担ったのが、使徒後教父を含めた教父たちであった。

ユダヤ律法主義思想との戦い

最初の敵は、ユダヤ主義思想であった。主イエス・キリストを十字架につけたユダヤ人の宗教は、後期ユダヤ教と呼ばれている。神殿とモー

セの律法を誇り、神殿の儀式に預かり、律法を守ることによって救いを得ると堅く信じた民族宗教であった。自らを神の子、キリストであると語るイエスの教は、神殿と律法を汚す罪であると判断し、イエスを十字架に架けることに成功した。彼らは、イエスの教えを受け入れ、「イエスがキリストであり、罪の贖い主であり、彼をキリストと信じることによって救われる」と伝えるキリストの使徒たちをも神を汚す罪に値すると考え、敵視し、使徒たちの働きを絶滅せんと妨害をした。最初の殉教者ステファノも、ユダヤ人の宗教から回心した異邦人のための使徒パウロも、民族的宗教であった後期ユダヤ教との戦いの矢面に立ち、戦った。聖都エルサレムがローマによって破壊された後も、世界に離散していたユダヤ人の多くは、後期ユダヤ教を信じており、教会の妨害者として存続した。2世紀半ばに活躍し、回心して殉教者となった遍歴哲学者ユスティノスが律法主義者からのキリスト教批判に対して論駁をした「トリフォントの対話」を書き、戦いの足跡を残している。

ギリシア主義(ヘレニズム)との戦い

使徒たちの時代から継続しているもう一つの戦いは、福音を宣べ伝えた地域に広く影響を及ぼしていたギリシア文化との戦いであった。宗教的には多神教偶像崇拜であり、道徳的には人間の自由を謳歌し、不道徳で無律法主義である大衆と、それへの反作用として現われていた少数者たちの禁欲主義と戦いであった。次の聖書の中に彼らとの戦いの足跡が示されている。使徒言行録 14 章、17 章、コリントの信徒への手紙一、ユダの手紙、コロサイの信徒への手紙 2 章を参考にしよう。ギリシア主義の中からでてる一つの思想がグノーシス主義思想である。

グノーシス主義との戦い

新約聖書にすでにその片鱗を見せている戦いの相手は、グノーシス主義と呼ばれる思想である(ヨハネの手紙一 2 章、4 章を参照)。グノーシスとは、知識を意味する単語であるが、ギリシア哲学と東洋神秘主義の影響を受けた偽教師ケリントス(90 年ごろ活躍)によってキリスト教を人々が受け入れやすいように改竄された異端の教えを意味する言葉となった。ケリントスとその支持者たちは、キリスト教をギリシア哲学より優れた高度な知識であると考えた。また、世界は物質界と霊界という互いに対立する二つの究極的原理によって構成されており、物質界は悪であり、霊界は善であるという二元論を主張した。そのためイエス・キリストを人間イエスと、神キリストに分離し、人間イエスが洗礼を受けた時に神であるキリストが降り、素晴らしい奇跡や教えをしたが、キリストが離れたので十字架で苦しみ死んだと説いた。2 世紀の教父エイレーナイオスは「異端反駁論」を書き、グノーシス主義の誤りを論破した。

マルキオンとの戦い

教会の外からのキリスト教攻撃に加えて、教会内から発生した異端とも教父たちは戦った。当時の異端の代表者は、マルキオン(2 世紀中期)である。マルキオンは、グノーシス主義の教の影響を受け、キリスト教の教から旧約聖書の、外的儀式的要素を除き、パウロの思想をもって教会改革を試み、異端として破門された。10 年後には教会を脅かす勢力となったため、テリトゥリアヌスを始め多くの教父たちがマルキオンの教の誤りであることを指摘する文書を書き、これと戦い福音を守った。

第5課 ローマ帝国とキリスト教

ローマ帝国の迫害

神の國完成を目指して福音の宣教を目指す教会は、異教や異端の思想と戦いつつ目的を達成しなければならなかった。古代教会が直面したもう一つの、また、最大の敵はローマ帝国の国家的権力であった。1世紀の皇帝ネロやドミティアヌスの迫害は、ローマ市や小アジアという地域的迫害に留まっていたが、2世紀に入ると、次第に迫害が広範囲となり、ローマ帝国領土全体に及ぶようになった。313年、コンスタンティヌス大帝（一世）によって、あらゆる宗教に信教の自由を許可した「ミラノの勅令」が発布されるまで、ローマ国家との戦いが継続された。とはいえ、200年に及ぶ戦いの期間のすべてが迫害の時代であったというのではない。教会にとって平和で、教勢を伸ばし、伝道が活発に行なわれた時代もあった。どのような皇帝たちが、教会を迫害し、また、その迫害した理由が何であったのかを学んでいこう。

教会を迫害した皇帝たち

ドミティアヌス皇帝が96年に退位し、2世紀は賢帝時代と呼ばれる。6人の皇帝が支配するのであるが、そのうちの4名（トラヤヌス、ハドリアヌス、ピウス、マルクス・アウレリウス）が迫害を拡大した皇帝たちである。トラヤヌスはキリスト教迫害に関する最古の文書「トラヤヌス勅令」を発布した。ピテニアに派遣され着任した総督プリニウスがその町で見たことは、ローマの神々を祭る神殿が寂れ、祭礼が廃れていることであった。その原因がキリスト教の蔓延にあることを知ると、キリスト教を反ローマ勢力として取り締まることにし、皇帝に取り締まり方法を問い合わせたことへの返事が「トラヤヌス勅令」である。トラヤヌス(在位98～117年)はキリスト教ばかりでなく、斜陽のローマ帝国の回復を図ろうとし、

法律を厳しく適用し、多くの秘密結社を取り締まった。トラヤヌスは、密告による取り締まりは禁じたが、ストア哲学者でもあった賢人マルクス・アウレリウス(在位161～180年)はキリスト教を国家政策の妨害者と位置付け、密告を奨励し、財産を奪うことを許可するなど、アジア州では激しい迫害を実施した。3世紀以後の迫害については次の課で学ぶことにし、これら有能な皇帝たちが、教会を厳しく迫害した理由について述べておこう。

迫害の理由

(1) 迫害の最大の理由は、政治的理由であった。ローマ人は国家が最高善であると信じていた。国家目的のためにすべての民族も文明も宗教をも利用し、国家目的に合致する限りはすべてに寛容であったが、国家目的に反するものは厳しく排除した。ローマ国家の最高の権威が皇帝であり、皇帝への忠誠がローマ国家目的に合うか否かを示す鍵であった。キリスト教は、既に公認されていたユダヤ教の一派とされていた初期の時代には、ローマ帝国からの迫害はなかった。ユダヤ教を凌ぎ、皇帝の周辺にも信者となる者がでて、ユダヤ教とは異なる宗教であることが分かると、改めて国家目的に適合するか否かが問題となった。その結果、皇帝礼拝に応じない危険な秘密結社、国家安全を損なう危険集団と判断された。ローマ帝国を強化し、国政に熱心をもった皇帝たちは、国体を損なう集団としてキリスト教に危機感を抱き、排除しようと試みたのである。

(2) 第二の理由は、宗教観の相違であった。多神教的偶像礼拝の宗教観を持つローマ人たちの目には、キリスト教徒たちは、無神論者であり、不敬虔な者と映った。偶像、祭壇、聖火もなく、日曜ごとに集い、秘密めいた儀式(聖餐式)を行ない、血や肉を食する野蛮人であり、

親近相姦をする不道德な集団と誤解されたのである。

(3) 第三の理由は、社会的理由である。キリスト教を受け入れた人々はローマの下層階級や奴隷が多く、彼らがローマの経済を支える基盤であった。新しい宗教が説く平等の思想や愛の教え、皇帝礼拝の拒絶、キリストへの服従を

教えるので不正な略奪に対する反抗集団となる可能性を恐れたのである。

多くの教会教父たちは、迫害がキリスト教に対する誤解や悪意からでていることを迫害するローマ皇帝たちに指摘し、キリスト教信仰の正当性を弁明する多くの文書を送り、迫害を思いとどまらせる活動に従事した。

第6課 全国的迫害とその終結

三世紀と四世紀前半の迫害

賢帝時代は、2世紀の末で終わり、ローマはセウエルス王朝によって引き継がれた。この王朝の最初の皇帝セウエルス・セプティモウスはキリスト教を迫害したが、次の皇帝カラカラや後に続く皇帝たちはキリスト教に対して寛大であり、約25年間は、キリスト教が進展した期間であった。セウエルス王朝は235年に幕を閉じた。

それからの50年間は、軍人達が皇帝となってローマを治める軍人皇帝時代となった。この期間には、激しい迫害を試みた皇帝デキウス(在位249～251年)や皇帝ウァレリアヌス(在位253～260年)が現われ、教会は多くの殉教者をだした。デキウスは、伝統的なローマの規律を回復し、ローマの神々への供養を強要し、共和制時代の官職をも復活させ、反対者を厳しく処罰した。それゆえに、歴代の皇帝の中で最大の迫害者となった。教会への迫害は、高位聖職者から始まり、次に一般信徒への迫害を全国に指示した。しかし、統治期間が短期間であったため教会は絶滅から逃れることができた。

上記の二人の迫害者である皇帝の前後には、最初のキリスト者皇帝アラブスやキリスト教に友好的な皇帝たちが在位し、その間は迫害が中止され、教会は勢いを盛り返すことができた。

最後の徹底した迫害者ディオクレティアヌス皇帝
284年、全国的な迫害を遂行する最後の皇帝

が登場した。ディオクレティアヌスである。彼は領土を東西二つに分け、分割統治を実施した。共和制を廃止、独裁政治を遂行するために、東西にそれぞれ正帝と副帝を置き、東の正帝の住まいをニコメディアに、西の正帝の住まいをミラノに定め、領土全体を効率的に治めようとした。キリスト教に対しては、最初の20年間は寛容な態度を取ってきたが、303年に大迫害に転じた。ニコメディアの教会に軍隊を派遣して破壊し、翌日、迫害の勅令を出し、全帝国内の会堂の破壊、聖書の焼却、高級官僚であるキリスト者の身分と役職の剥奪、一般信徒への保護の停止とキリスト者奴隷の開放の禁止、を命じた。さらに、第二、第三、第四の勅令を出し、聖職者たちの逮捕、神々への犠牲の強要、信徒にも犠牲の強要と、全国的迫害を命じた。捕えられたキリスト者は猛獣の餌食にされ、拷問にかけられ、運がよくて労働キャンプに送られ、高山での強制労働に従事させられた。

このような教会壊滅の勅令が下されたとはいえ、西の正帝は、第一の勅令には従ったが残りの勅令を実行しなかったため、西方の教会の被害は比較的に軽いものにとどまった。305年に東帝ディオクレティアヌスと西帝マクシミアヌスが退位すると、西方では、大迫害の嵐が過ぎ去り、東方の教会にだけその余波が残った。しかし、新たに東帝に就任し迫害を続けたガレリウスも重い病氣にかかり、キリスト教迫害政策の失敗を認め、311年には「寛容令」を

公布して迫害が沈静化した。迫害に耐えて福音を宣べ伝えてきた教会がローマ帝国との戦いに終止符を打つのは、その2年後の313年、「信教の自由」を公にする「ミラノの勅令」が東の正帝リキニウスと西の正帝コンスタンティヌスによって合意され、公布されたときであった。

迫害がもたらしたもの

200年間のローマ帝国との戦いの期間に、教会は多くの犠牲者を出し、会堂を破壊され、棄教者をだすなど、失ったものも少なくない。しかし、歴史を支配する神は、迫害をとおして教会に益をももたらされた。

(1) 第一に、教会の進展である。「キリスト者の血は種である」との言葉のとおり、教会は

進展した。1世紀は、小アジアが中心であったが、2世紀にはローマ帝国のどこにでもキリスト者が見出せるようになり、3世紀になると北アフリカにまで教会が存在するようになった。

(2) 第二に、皇帝の聖書焼却命令から聖書を守るために、正典となるべき各書がまとめられ、統一保存されたことである。聖書の正典化が推し進められた。

(3) 第三に、教会の組織化が整備されたことである。迫害に教会は対処するために、教会は教会組織の整備と強化を図った。監督制度の設置や各教会間の連絡を密にしていた。

(4) 最後に、廃教した人の復帰について、どう取扱うかの神学論争が生じ、神学問題に発展をもたらした。

第7課 ローマ帝国下における礼拝と信条

「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を讃美した」とエルサレム教会の礼拝と生活については使徒言行録に記録されている。それ以来ローマ皇帝が300年間治める領土で教会は、どのような礼拝を捧げ、生活を過ごしてきたのであろうか。

礼拝の日の確定

使徒たちの時代にすでにユダヤ教の土曜日安息から、主が復活された日曜日に礼拝をささげるように移行し始めている痕跡が新約聖書に記録されている（使徒言行録16章2節、ヨハネの黙示録1章10節）。キリスト者たちは、公的礼拝を捧げる日を主の日と呼び、この日の礼拝を重んじるようになった。さらに、キリスト教に好意を寄せたコンスタンティヌス大帝が日曜日に政務や司法の事務を休ませ、公の見世物を禁止したことが、教会の日曜礼拝の促進に大きな影響を及ぼしたと考えられている。

礼拝の順序と要素

キリスト教会の礼拝は、ユダヤ人の会堂における礼拝を参考にし、必要なものを選択して礼拝順序を定めた。礼拝では、聖書朗読がなされている。読まれた箇所は、旧約聖書の一部、使徒の手紙、そしてキリストの教訓の朗読である。新約聖書27巻が諸教会にそろうのは迫害が激しくなった後であるが、諸教会にあった書を朗読に用いた。

次に、勧め、あるいは、教え（説教）がなされていた。さらに、祈禱が捧げられた。祈禱文は初期にはなかったが、司会者の祈禱と会衆の祈禱も捧げられた。また、讃美歌も歌われた。主に、旧約聖書の詩篇が歌われたが、キリスト教会の歌として、マリアの賛歌、ゼカリヤの賛歌なども歌われた。

礼拝の要素として重要な要素の一つは、礼典の執行であった。洗礼式は、志願者の申し出た場合にのみ執行したが、聖餐式は、最初は礼拝ごとに執行していた。洗礼の方法については、120年頃に書かれた「十二使徒の教訓」という

古文書には、「水が十分ないときは、三度水をそそぐように」と記録されているので、通常は浸礼であり、浸礼が行なえない場所で滴礼が実行されたことが分かる。礼拝は聖餐式の執行をもって終わった。今日の聖餐式と異なり、愛餐を伴う形で行なわれていた。「十二使徒の教訓」には、聖餐は「靈的食物と飲み物」であり、「永遠の命をえる」ものと書かれ、イグナティオスは彼の「エペソ人への手紙」で「不死の妙薬であり、・・・永遠に生きるための解毒剤」であると書いている。また、ユスティノス（150年頃）は「第一弁明論」で、聖餐式はキリスト者のみが受ける礼典であり、愛餐と聖餐式とは分離されていたことを書いている。聖餐式の順序について、2世紀から3世紀初めに活躍したヒッポリュトスは「使徒的伝承」に「詩篇の詠唱を随所に交えた聖書朗読、会衆のアーメンを伴う公禱、平和の接吻、パンとぶどう酒の聖別、陪餐」をしたことを書いている。

信条

諸教会はユダヤ教や異教からの改宗者に洗礼を施すにあたり、受洗志願者たちが正しいキリスト教信仰をもつよう指導し、また、信仰を試問しなければならなかった。そのため、聖書が啓示する神への信仰を、「父と子と聖霊の御名

によってバプテスマを授けよ」との主の命令を参考にして、三位一体の神を信じる信仰告白を作成した。細部においては異なっているものの基本構造をもった信仰告白文が諸教会にあり、その一つ古代ローマ教会信条が現存している。そして後世にそれが「使徒信条」として発展した。

使徒的權威の継承者

使徒時代の教会は、使徒たちの權威によって支えられてきた。使徒たちの死後、教会の一致のために使徒的權威の継承をどこに認めるかが教会の問題となった。また、教会に異教の影響や異端が発生し、彼らの誤りを正し、指導していく權威を明確に示すことが必要となった。教会は、使徒的權威は、長老あるいは監督によって継承されると理解していたが、一人の長老によるのか、複数の長老によるのかという点では、教会間に統一がなかった。リヨンの監督エイレーナイオスは、監督と呼ばれる教職者に權威があり、その監督の中でもペトロとパウロによって立てられたローマ教会の權威を第一と考えた（異端反駁論Ⅲ-3-1と2）。こうして、次第にローマ教会の監督が使徒的權威の継承者としての地位を占める傾向を強めた。

第8課 国家と教会の結びつき

コンスタンティヌス一世(大帝)の勝利

信教の自由を保証した「ミラノの勅令」によってローマ帝国の迫害が終焉したことを第6課で学んだが、それがローマ帝国全土の教会に自由を実現するものとはならなかった。なぜなら、一年後、東の正帝リキニウスが「ミラノの勅令」の約束を廃棄し、異教を擁護し、キリスト教を迫害したからである。西の正帝コンスタンティヌスは、ミラノでの合意に基づく帝国の単一支配をかけてリキニウスと戦うことを決意

し、313年から324年まで、両軍が激突した。まさに宗教戦争である。

この戦いで、コンスタンティヌスは、十字架を掲げて戦い、リキニウス軍を破り、勝利を占めた。コンスタンティヌスが洗礼を受けたか否かは明確ではないが、キリスト教の保護者を自認し、キリスト教的国家の建設を目指し、十字架刑の廃止、罪人の額の烙印禁止、日曜休日の制定、教会法律の国家承認、キリスト教教職者の兵役免除、ニカイア会議の招集など、保

護者として活発な働きを示した。カイザリアのエウセビオスは「教会史」の最終章で、コンスタンティヌスを「神に最も愛されたカイザル」と呼び、彼によって「悪事は忘れ去られ、不敬虔な行為の一切は、忘却の中に投げすてられた」と書き表し、神が遣わされた皇帝の偉大な業に感謝を表している。それが当時の教会の偽らざる心境であったと考えられる。330年にコンスタンティヌスは帝国の首都をローマからコンスタンティノポリスに移し、そこにソフィア聖堂を始め幾つかの会堂を建立し、教会に力を添えている。

国家と教会の密接な関係

当時、教会は信教の自由を得たばかりでなく、キリスト教的国家建設を目指す為政者の保護を得て喜び、終末的神の国が到来したかのように受け止める者も多かった。しかし、私たちは、コンスタンティヌスの出現によって新たに生じた国家と教会の関係を手放して喜ぶことに疑問を抱かねばならない。

迫害者である為政者のもとにある教会は、信教の自由のための戦いを遂行し、国家と教会の関係は、緊張関係にあり、政教分離の関係を保とうとした。現在でも信教の自由が保証されず、そのための戦いに従事している国々の教会が世界に多くある。国家目的にかなわないという理由で戦っている外国の教会をおぼえて祈らなければならない。

他方、信教の自由が与えられているだけではなく、キリスト教を国教とする国々もある。ここでは、国家と教会は癒着の関係、祭政一致の関係にある。200年間の迫害の後に、古代の教

会は、信教の自由を与えられただけではなく、皇帝によって保護され、さらに、391年には、皇帝テオドシウス一世によってキリスト教の国教化という時代を迎えた。それ以来、長い教会の歴史を通して問題となってきた「教会と国家の関係」という新しい課題を抱えることになった。政教分離の原則が破られたからである。祭政一致の関係になったことにより、皇帝の側からはキリスト教会への干渉や政治的駆け引きに教会を利用することが生じ、他方、教会の側でも皇帝の権威を利用して伝道を有利に行ない、教会間の勢力争いや神学論争を有利に導こうという駆け引きが生じ、教会の世俗化を引き起こす原因の一つとなった。また、中世に入ると、政治と宗教が密着する関係の中で、世俗の権威と教会の権威のいずれが上位にあるかという優位性の争いが発生した。純粋な宗教問題に政治を利用したり、あるいは、政治問題に宗教を利用したりという事態を招いたのである。

コンスタンティヌスのキリスト教への期待

コンスタンティヌスがなぜキリスト教を優遇し、また、教会に何を期待したのであろうか。彼は、国家は一つの皇帝、一つの法律、また、一つの宗教によって成り立つべきであるとの政治的信念を持っていた。一つの宗教としてふさわしい宗教は、長期にわたる迫害の中で組織化されたキリスト教であると理解し、公認し、聖職者たちを優遇した。帝国の一致の手段と考えたのである。従って、一致を損なう分派（セクト）についてはローマ帝国の統一を破壊する集団とみなし、厳しく対処した。このため分派の教会を閉鎖し、聖職者を追放する措置をとった。

第9課 世界教会会議とニカイア信条

最初の世界教会会議の開催

コンスタンティヌスがローマ帝国を統一しようとしている頃にローマ帝国を統括する一つ

の手段であった古カトリック教会の一致を脅かす神学論争が起こった。その論争を解決するために、皇帝は325年、首都近くにある町ニカイ

アに監督を招集し、教会会議の開催した。これがキリスト教公認後、最初に開催されたニカイア会議と呼ばれる世界教会会議（公会議）である。

会議開催と主題

キリスト教会の一致を損なう論争は、318年頃、エジプトのアレクサンドリア教会の主教アレクサンドロスが長老たちと三位一体である神の単一性を論じたが、長老の一人であったアリウスがこれに反対し、キリストを神として認める主教はサベリウス主義（神は一つであって父・子・み霊は神の存在様式の違いにすぎないとの説）の異端であると異議を唱え、両者の間に激しい論争となった。キリストの神性を問う論争であった。

アレクサンドリア教会は320年に地方会議を開催し、アリウスと支持者を逆に異端とし職務から追放したが、アリウスはニコメディアの監督エウセビオスのもとに逃れて論争を続けたので、問題が小アジアから全国に拡大し、皇帝の耳にも入り、会議の開催となった。西方の教会からは10名に満たない出席者であったが、総数318名の指導者達が集い、325年6月19日から8月25日まで開催された。参加者たちの長い論議の後にアリウスを退け、三位一体の神を告白するニカイア信条を生み出した。

ニカイア会議の議論の経過

皇帝が臨席して開催された会議で、子なる神が父と同じ本質を持っているかどうかについて三つの異なった教説が述べられ、議論がなされた。アリウスの述べる教説と、正統派の代表アレクサンドロスの代弁者である助祭アタナシオスが主張した教説と、カイザリアのエウセビオス（教会史を書いた監督）が述べた中間的教説が検討された。

議論の後、最初にアリウス派提案の信条草案が提出されたが、会議はこれを否決した。アリウスの主張は、父なる神のみが神の本質をもつ

ており、始めもなく終わりもなく永遠であるが、子なる神は父によって造られた被造物であり、始めがある。だから、神に似た本質（類似本質）を持つだけで、神ではなく、神と等しくもなく、永遠でもないということであった。

アリウス案が否定されると、次にカイザリアのエウセビオスの信条案が提出された。アリウス派は賛成したが、正統派は強行に修正を迫った。エウセビオスは、御子が無から創造された被造物であることを否定し、時間が存在する以前に御父より生まれたことを認めたが、御子は父に似ている本質であると主張した。アレクサンドロス派はこの最後の点に同意できなかった。 「父と子との本質、あるいは実質が一つである」という文章の挿入を求め、修正に成功した。こうして、アリウス派の御子が神の本質を御父と等しく持つことを否定する教説は異端として退けられ、三位一体の教理が擁護され、ニカイア信条が作成され、教会の信仰として公に表明された。

三位一体の教理の確立

三位一体の教理を支持したアタナシオス説が正統であるとニカイア会議で決議されたとはいえ、正統説が直ちに世界の教会に浸透したのではなかった。勝利を占めたはずの正統派の論客アタナシオスは五回も教会を追放されるほど、アリウス主義者たちは、政治的に巧みに立ち回り、その勢力を保持し、戦いを続けた。キリストの神性論争と三位一体信仰が教会全体に行き渡るのは、381年開催の第一コンスタンティノポリス総会議を経て、451年開催のカルケドン総会議の決議によってであった。

第一コンスタンティノポリス総会議では、アタナシオス説を正統と確認すると共に、「聖霊が父からでた」という聖霊のどこを明らかにした一節を加えた信仰告白を作成した。その一節は、聖霊も御子も父と同等であり、本質において神であるとの三位一体の教理を表明したものである。ニカイア・コンスタンティノポリ

ス信条と呼ばれ、全体の条文はニカイア信条と使徒信条を合わせたような信条である。教会は

こうしてキリスト教信仰の基本的教理である三位一体の神を正しく告白する教理を確立した。

第10課 ゲルマン民族の侵入とアリウス派の伝道

三、四世紀の伝道地

ニカイア会議に勝利を占めた正統的キリスト教会は、勝利者としてローマ世界に広がって行った。2世紀から4世紀にかけて、キリスト教はローマ帝国内ばかりでなく、帝国周辺の地方にも浸透していった。

ペルシアには、1世紀に伝道がなされたようであるが、224年には主教座が20もあったと記録されている。4世紀には大迫害を受け、アラビア北部に多くのキリスト者が逃れている。そのアラビアではオーマン領内で3世紀の初めに主教区が出来上がり、4世紀にはペルシアから逃れてきた多くのキリスト者が北部に移り住み教会を建設した。エチオピアでは4世紀の初頭に伝道がなされ、4世紀半ばにはエジプトから指導者が派遣され、教会が組織化された。現在のトルコの北東に位置するアルメニアからグルジアにかけて、王族の間にキリスト教が受け入れられ、グルジアは4世紀の半ばにはキリスト教を国教とした。また、英国にも3世紀には伝道がなされ、4世紀の初頭には監督がいたと伝えられている。このように、ローマ帝国周辺の地方にキリスト教信仰が受け入れられ、浸透していったのである。

ローマ帝国の弱体化

ローマ帝国の周辺、特に北方には、さらに多くの人々が住んでいた。北方は陸続きであるため、ローマ帝国は自国を守るためと領土を拡張するためにも、早くから彼らと相対し、戦い、そして勝利を占めると彼らを奴隷や傭兵として用いてきた。北方領土に住んでいたのは、ローマ人には「蛮族」と呼ばれたが、ゲルマン民族（チュートン人とも言う）であった。ゲルマン

民族は、フランク族、アングル族、デーン族、スエネ族、ゴンバルト族、ヴァンダル族、サクソン族、ゴート族など多くの部族を含んでいた。彼らは今日のヨーロッパ人の祖先であり、より豊かで、住みやすい南部の地、ローマ帝国の領土を得ようと紀元前1000年頃から民族の移動を開始してきた。次第にゲルマン族は力をつけ、紀元350年頃に、ライン川とダニユーブ川の北岸にまで南下し、ローマ軍と対峙することになった。

帝国を一人で統治してきた皇帝テオドシウス一世は、395年二人の息子に領土を分割し、協力して統治するように計らった。しかし、この分割統治は失敗に帰した。彼らは父の意志を継がず、東ローマ帝国と西ローマ帝国という別々の国として歩み始めたため、ローマ帝国は弱体化した。弱体化に乗じて、ゲルマン民族は西ローマ帝国内に侵入し、フランス、イタリア、スペイン、北アフリカにまで進出し、彼らの国家を形成した。「永遠の都」と呼ばれたローマも、410年には、首長アラリクスが率いた西ゴート族の手に陥り、略奪されてしまった。

ローマ人たちは、ゲルマン民族の侵入を許したのは、ローマの神々を捨てたことへの神々の呪いであると考え、キリスト教への攻撃の矢を放った。キリスト教側では、それに反論をし、キリスト教の正当性を歴史的に立証しようとした。その代表作がアウグスティヌスの「神の国」という書物である。その後もローマは何度か略奪にあい、476年、ついに西ローマ帝国が完全に滅亡し、東ローマ帝国のみが存続することになった。

アリウス派はどこへ

ゲルマン民族とローマ帝国がにらみ合っていた4世紀半ば、ニカイア会議で異端とされたアリウス派は、東ローマ帝国の領土では依然として勢力を持っていた。また、ゲルマン民族に自分達の教えを伝えていた。西ゴート族が小アジアに侵入してきた時捕虜とした者の中に、ウルフィラという一人のキリスト者がいた。彼の証言によって、すでにゴート族の地に教会があることが分かった。ウルフィラはアリウス派の信仰をもっていたニコメディアのエウセビオスと接触し、アリウス派の信仰を持つようになり

ゴート族教会の監督に任命され、伝道に貢献した。そのほかウルフィラはゴート語に聖書を翻訳するなどの活躍をし、ゴート族の間で大きな影響を与えた。

やがてフランク族を除くゲルマン民族の間では、キリスト教とはアリウス派を意味するほど勢力を拡大した。そのためゲルマン民族と戦う西ローマ帝国の戦いは、アリウス派の教会と正統派の教会との戦いであった。ミラノの執政官であったアンブロシウスはこの戦いの中で司教とされ、町と教会を守ったのである。

第11課 カルケドン信条の作成

ニカイア公会議後の神学論争

ニカイア公会議において、聖書の神は、三位一体の神であり、御子キリストが神であることが認められ、教会の公認の信仰となったが、その後、神であり人であるキリストの人格の中に二つの性質（神性と人性）がどのように関係しあっているかについての議論が問題となった。キリスト論と呼ばれるこの論争を通してキリストの二性一人格の教理が確立していった。三つの論争である。

(1) 第一は、アポリナリオス論争と呼ばれている。361年にシリアのラオディキア教会の司教となったアポリナリオスは、反アリウス主義者であったが、キリストの二つの性質については、独特の教義を展開した。キリストを神性と人性と不当に分離することを避けようとして、ギリシアのプラトンの人間観をキリストに当てはめ、神によって統一していることを論証した。人間は、「肉体と心と霊」から成り立っているが、キリストの場合には、その「霊」に相当するところに「神のロゴス」が位置し、この神学的ロゴスが肉体と心を支配したと教えた。しかし、この教えは、キリストの人間性を限定し、十分に認めないことになり、友人であったアタナシウスやカッパドキヤの二人のグレゴリウスたち

に反対され、381年開催のコンスタンティノポリス公会議で異端として退けられた。

(2) 第二の論争は、ネストリオス論争である。ネストリオスは、アンティオキアで神学を学び、説教家として名をなしていたが、428年にコンスタンティノポリスの総主教となった。彼の配下である司祭アナスタシオスが、アポリナリオスがキリストの母である「おとめマリア」を「神の母」（テオトコス）と呼んでいたことに反対したことから、論争が始まった。ネストリオスはアナスタシオスを支持し、マリアはキリストの人間的な面だけの母であるから、「キリストの母」（クリストコス）と呼ぶべきであると主張した。アポリナリオスの主張は神性を強調しすぎており、人性と神性とが分離していなければならないと批判した。しかし、結果として人性を強調しすぎ、二性の不可分な関係を立証することに失敗した。そこで、アレクサンドリアの司教キュリロスなどが、ネストリオス説は神性を弱体化し、キリストの人格の統一性を破壊する異端であると追及し、激しい論争に発展した。

キュリロスはローマ教皇ケレスティヌス一世を動かし、430年開催のローマ会議でネストリオスを退けることに成功した。さらに431年

開催のエベソ公会議はネストリオスの追放を決定した。また、451年のカルケドン公会議においても異端が再確認され、ネストリオス派はアラビアに追放された。激しい迫害のためペルシアに移り、そこを基点として7世紀にはインドや中国へと伝道し、勢力を拡大した。このネストリオス派のキリスト教が中国で景教と呼ばれて8世紀に栄えた。

(3) 第三の論争は、エウテューケス論争である。ネストリオス説が退けられるとまもなく、ネストリオス説への反動として、キリストの神性を偏って強調する異端が出現した。コンスタンティノポリスの修道院長であったエウテューケスはキリストにおける人格の統一を強調し、キリストは受肉前には二つの性質を持っていたが、受肉後は神性の下に人性は融合したと主張した。これは、キリストの人性を弱める異端であると告発され、448年にコンスタンティノボ

リス地方会議で断罪され、451年のカルケドン公会議でアポリナリス、ネストリオスの教説とともに、異端として確認された。エウテューケスのキリスト論を単性論と言う。現在も、コプト派の名でシリヤやエジプトに存在している。

カルケドン公会議とカルケドン信条

以上の三つの異端によって生じたキリスト論に終止符を打ち、キリストの二性一人格の教えを適切な言葉で表すために、すなわち、二つの性質の結合関係を正しく告白する信条作成のために、451年、ビテニアのカルケドンで公会議が開催された。御子の二性の関係を、「まざることなく、かけることなく、分けられることもできず、離すこともできない」という四つの句で表すカルケドン信条を作成した。この公会議はアリウス主義をも断罪し、古代教会で成立した正統神学を確立した。

第12課 新約聖書の結集と修道院

新約聖書正典の結集

教会には主の弟子達によって書かれた福音書や手紙、さらに教父たちが書き残した信仰の文書が残され、蓄積されて行った。最初は、文書が書かれた場所や送られた教会に使徒的権威をもった福音書や使徒たちの手紙などがあったが、次第にそれらを筆写して、近隣の教会にも手渡され、諸教会の交流の中で多く教会が共通の信仰文書を用いるようになった。しかし、二つの理由によって教会に残された多くの文書の中から、使徒的権威を持つ文書を見出す必要に迫られることになった。

一つの理由は、反ユダヤ主義を標榜した異端者マルキオンが2世紀半ばに出現し、旧約聖書を正典とすることを拒むばかりでなく、新約聖書の正典をパウロの10の手紙とルカによる福音書の縮小版のみに限定したからである。マルキオンは儀式主義が旧約聖書とその思想の偏重に

由来すると考え、教会の儀式主義の傾向に反対し、教会改革を唱えた。パウロの手紙でもテモテへの二つの手紙とテトスへの手紙を除き、ルカによる福音書の一部も除外したのは、旧約聖書の思想を反映しているからである。マルキオンの出現により、2世紀半ばには未だ一つにまとまっていなかった新約文書の正典化について教会は関心呼び覚まされ、2世紀末には、各教会がおよそ一つのまとまりとしての正典を受け入れるようになった。また、二つ目の理由は、皇帝ディオクレティアヌスの勅令によって聖書の焼却が命じられたことにある。

玉石混合の文書から使徒的権威を持つ文書を正典に選び出し保存しようと教会は努力した。新約聖書の諸書のほかに、東方教会では、古代教会で重んじられ、礼拝でも読まれたが、新約聖書の正典に入らなかった幾つかの書物がある。クレメンスの手紙第一（ローマのクレメン

ス著)、十二使徒の教訓、バルナバの手紙、ヘルマスの牧者など、教会の歴史資料として価値ある書物があったが正典とはされなかった。新約聖書の中でも、ヘブライ人への手紙、ペトロの手紙二、ヨハネの手紙二と三、ヤコブの手紙、ユダの手紙、ヨハネの黙示録の七つは、ある地方では使徒的權威に疑いがもたれ、全般に認められるまでに時間を要した。新約聖書が一つにまとめられるようになって約 100 年後、397 年開催のカルタゴ会議において 27 の書が新約聖書正典として公認された。このように、異端の出現や迫害という試練を通して神の摂理的導きとして正典化が実現した。

修道院の発生

ローマ帝国の迫害から逃れたり、教会の組織化への反発を感じたり、社会の世俗化を憂いて砂漠に生活したキリスト者たちがいた。その中の代表者がエジプトのアントーニオスである。285 年に財産を肉親に託して砂漠にある洞窟に住み、数年間欲念と戦った。人々に知られて慕われ、人々が彼のもとに集まり教を乞うた。修道士の前身と言うべき人物である。

彼のような個人的な修道生活の時代の次に修道院を建て、隠修共同生活が始まった。共同生活のために、最初に規則を作ったのは、エジブ

トのパコーミオスである。従軍中の 314 年に回心し、除隊後洗礼を受け、砂漠の聖者パレーモンに教えを受けたのちに修道院を建て、軍隊を参考にした組織や規則を作り、共同生活を始めた。これが最初の修道院である。

やがて東方では、広く修道生活が行なわれるようになり、なかには、働かず、祈りにのみ専念する隠修者や、柱の上に 20 年間も生活した柱上の聖人と呼ばれたシメオンのように、行過ぎた禁欲主義生活を送る者も現われた。

修道院が西方教会に伝わったのは、300 年代の中頃である。フランスの守護聖人と呼ばれたトゥールーズの監督マルティヌスがフランスで最初の修道院を建てた。400 年代に入ると、東方で修道生活を送ってきたカッシアヌスが 415 年、マルセイユに二つの修道院を建て、また修道院の規則を作り、靈的指導を西方修道院に残した。しかし、西方の修道院に最大の影響を与えたのは、ベネディクトゥスである。529 年にそれまで修道していた修道院を去り、ローマとナポリの間にあるカシノ山の断崖にベネディクト派修道院を創立し、独身、清貧、服従を三本柱とした厳格な修道院規則を定め、厳しい修道を指導した。この修道会が西方の修道会に長期にわたって影響を及ぼした。

第 13 課 東方教会と西方教会

東西帝国の分離の教会への影響

ローマを統一支配した皇帝テオドシウス一世の死後、二人の息子達がローマを分割して統治し、そのために北方民族に対する防衛力が弱体化し、ゲルマン所属の侵入を容易にしたことは、略述した。分割された東ローマ帝国は、ゲルマン民族の侵入を撃退し、中世半ばまで存続する。この東ローマ帝国は、バルカン半島、小アジア、パレスチナからエジプトにいたる広大な領土を持っていた。ここはキリスト教が生まれ、初期

の時代から歴史を刻んだ土地である。一方、西ローマ帝国の領土は、ダルマティアから西にあるイタリア、ガリア、スペイン、北アフリカなどの地方であり、5 世紀にゲルマン民族の激しい侵略にあい、ゲルマン民族が主導権を握る世界となった。それ以来、一層、東西両帝国が異なった文化や伝統を築いていった。このような帝国分離は、教会にも影響を及ぼし、それぞれが個別の歩みを始めた。

東方教会の特徴と教父たち

東方教会の中心地は、コンスタンティヌス大帝が首都移転を遂行したコンスタンティノポリスとなった。東方教会のある地域は、ギリシア文化圏であり、ギリシア語を用い、思弁的傾向を強く持っていた。そこで、抽象的な概念で信仰を正しく表すことに秀で、三位一体や二性一人格についてふさわしい表現をしようと努力した。古代教会で成立したニカイア信条、コンスタンティノポリス信条、カルケドン信条は、いずれも東方で議論が発生し、東方で公会議が開かれ、また解決が図られた結果、作成された信条である。東方教会は現代にいたるまでこれらの信条を厳格に守り、保っている。

この期間に東方教会で活躍した教父のうち、すでに名前を挙げた「教会史」を書いたエウゼビオスやニカイア会議で活躍したアタナシオス以外に、彼らと共に活躍した教父たちがいた。名説教家として名高いクリソストム（本名ヨハネス）をまず挙げたい。精練潔白な人物であり、カルヴァンの註解書にもしばしばその名前がでてくる聖書学者でもある。キリキアのモブスエスティアの主教であるテオドロスも忘れてはならない。彼はアンティキア学派の神学者で、聖書の比喩的な解釈を退け、歴史的聖書解釈学に道を開いた。東方教会には、このアンティオケ学派に対立する比喩的聖書解釈を主張するアレクサンドリア学派があり、3世紀にはクレメンス(150～215年頃)やオリゲネス(185～254年頃)、4世紀以降にはアタナシオス、アポリナリオス、キュリロスなどがこの学派からでた。

西方教会の特徴と教父たち

他方、西方教会が存在している地域は、ロー

マに近い関係で、キリシヤ語よりはラテン語を用いていた。4世紀末になると教会は、ギリシア語聖書ではなく、ラテン語訳聖書を用い始めた。このために貢献したのがヒエロニムス(345～420年)である。イタリア北部の町ストリンダの出身であったが東方で修道生活を過ごしたのち、382年にローマに行き、教皇 Damas の秘書として仕え、聖書翻訳を依頼された。ほどなく彼のためにベツレヘムに修道院が建てられ、そこで聖書翻訳に従事した。新約聖書の翻訳は388年に完成し、旧約聖書の翻訳は405年に完成した。「ラテン世界にヘブライ語聖書の隠れた財産をわかちあいたい」との思いで翻訳に当たったと言われている。この聖書は、1546年、プロテスタントに対抗して開かれたトリエント会議でローマ教会の公認聖書であると確認され、20世紀まで用いられてきた。また、「ウルガータ」聖書と呼ばれるようになったのは、彼の翻訳が「普通に通用する」性質のものであったのであったからである。

古代ローマ教会の四大博士の一人であるアンプロシウス(339～397年)の名前も忘れてはならない。ミラノの執政官であったアンプロシウスは、アリウス派の主教の死に伴ない次期主教選出をめぐる正統派とアリウス派が対立し、混乱状態に陥った教会の事態收拾に乗り出した。すると、民衆は彼こそミラノの司教に相応しいと声をあげ、求道者に過ぎなかったアンプロシウスを短期間で司教とした。教会を自分達の手に取り返そうとするアリウス派の勢力を退けたばかりでなく、マニ教やアポリナリオスにも反対し、正統信仰のために戦い、多くの人々を導いた優れた説教家でもあった。

日曜学校 2002年度カリキュラム (2002年4～6月分)

2年サイクル第2年 (子どもカテキズム問34～85)

| 月日 教会暦・行事 | 主 題 | 子どもカテキズム | 参考教理問答 |
|--------------------------------------|------------|------------------|--------------------------|
| | | 聖書箇所 | 暗唱聖句 |
| 単元の目標 | | | |
| 4月7日 進級 | 神の民の祈りの家 | 問 34 | ウ小 88、ウ告白 25章、ハイ 54,55 |
| | | 使徒 2:42-47 | イザヤ 56:7b |
| 信仰の歩み・救いは神の民と共なる歩み、教会に生きることなしに成立しない | | | |
| 14日 | キリストの体なる教会 | 問 34 | ウ大 64-66、ウ告白 25章 |
| | | エフェソ 2:14-22 | エフェソ 1:23 |
| キリストとの結合によって、お互いを感謝して受け入れ、共に生きる | | | |
| 21日 | 再臨の約束 | 問 35 | ウ小 28、ウ大 56、ハイデ 52 |
| | | マタイ 24:29-31 | 使徒 1:11b |
| 天に昇られた主イエスが再び来てくださる約束の確かさ、その希望に生きる | | | |
| 28日 | 再臨に備える | 問 35 | ウ小 36、ウ大 79-83、ハイデ 52 |
| | | マタイ 25:1-13 | マタイ 25:13 |
| 喜んで待つ者だけが、地上の生を大切に、的外れにならずに生きることができる | | | |
| 5月5日 | 死のときの祝福 | 問 36 | ウ小教理 37、ハイデ 1 |
| | | ヨハネ 11:17-27 | ヨハネ 11:25-26 |
| 主イエスと離れて死ぬことをこそ恐れ、主イエスに結ばれて死の恐れを克服する | | | |
| 12日 母の日 | 復活のときの祝福 | 問 36 | ウ小教理 38、ハイデ 57-58 |
| | | ヨハネ黙示録 21:1-8 | ヨハネ黙示録 14:13b |
| 主イエスと完全に一つにされ、神共にいます幸いに入れられる約束を確信する | | | |
| 19日 ペンテコステ | 教会の誕生 | 聖霊降臨祭 | ハイデ 53,54 |
| | | 使徒 2:1-13 | 使徒 1:5 |
| 聖霊によって教会が生まれ出され、今ここで子どもたちに聖霊が注がれている | | | |
| 26日 | 感謝—神の求め | 問 37 | ウ小 39、ウ大 91、ハイデ 86,87 |
| | | ルカ 17:11-19 | テサロニケー 5:18 |
| 律法的な生活ではなく、福音的な感謝の生活を生きる | | | |
| 6月2日 | 感謝としての服従 | 問 38 | ウ小 39,40、ウ大 92、ハイデ 90,91 |
| | | マタイ 13:1-9,18-23 | ヤコブ 1:22a |
| 御心に従うことが喜びに生きる唯一の道であることを、喜びをもって分かち合う | | | |
| 9日 花の日 | 十戒—感謝の道標 | 問 39 | ウ小 41、ウ大 93-98、ハイデ 92 |
| | | 申命記 6:16-25 | 申命記 4:8 |
| 十戒は神から神の民への愛の贈り物、愛の言葉。熱情の愛に燃やされて生きる | | | |
| 16日 父の日 | 神と人への愛 | 問 40 | ウ小 42、ウ大 98、ハイデ 93 |
| | | マルコ 12:28-34 | ルカ 10:27 |
| 神の愛の言語化が十戒。十戒が神と人への愛に生きることを呼び覚ます | | | |
| 23日 | 贖いの御業—過越 | 問 41,42 | ウ小教理 43,44、ウ大教理 101 |
| | | 出エジプト 12:21-27 | 出エジプト 20:2 |
| 十戒の根拠となる神の御業。十戒(律法)が主なる神の福音であることを明確に | | | |
| 30日 | 過越の成就—キリスト | 問 41,42 | ウ小教理 43,44、ウ大教理 101 |
| | | ヨハネ 19:17-30 | コリント一 5:7c |
| 主イエス・キリストの光を通して、私たちへの御言葉として十戒を受け取る | | | |

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

聖霊降臨、ペトロの説教に続く初代教会の様子が描かれている箇所です。

(1) 彼らの熱心

42節の「彼ら」とは37節で出てくるペトロの説教を聞いて「仲間に加わった」「人々」のことです。彼らは「ペトロの言葉を受け入れた人々」ですが、ここで言う「受け入れた」とは承認したとか了解したという意味ではなく、「大いに心を打たれ」「私たちはどうしたらよいのですか」という心からの感謝を伴うことを意味しています。ですから彼らの信仰生活も「熱心であった」と記されているのです。その根底にはいつも「心を打たれ」た感謝があるからです。

彼らの熱心は四つ。「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」。使徒の教えは、40節で「このほかにもいろいろ話しをして、力強く証をし、・・・勧めていた」と記されていますから、礼拝説教のみならず使徒的な教育全般を指しているのでしょう。相互の交わりとは、44節の「共有」という言葉ですから、45節の財産の共有や共同生活を指すのでしょうか。46節では「家ごと」と記していますから共同生活と言っても群れ全体が同じ行動をとる集団生活ではないようです。ここでの交わりとはむしろ財産共有や共同生活の根底にある「主に救われ」という意味での共有を指しているのでしょうか。パンを裂くとは、食事と区別されていますから、聖餐の礼典を指しています。更に祈ることが加わえられていて、当時の信仰生活の生き生きした様子が伝えられています。

(2) 人々の反応

43節以下には、このような「彼ら」の熱心が

他の人々に大きな影響を与えたことを記しています。「心を打たれ」「仲間に加わった」からこそその礼拝生活にも「熱心」さが現れてきますが、それは個人の中に留まることなく、それを見聞きするものにも「心打つ」ものとなって響きます。特にここでは「恐れが生じた」とあり、「好意を寄せられた」と記していますから、恐怖心というよりも尊敬という感じだったようです。

(3) 主は・・・日々・・・加え、一つとされた

この聖書の箇所は当時の初代教会の様子を伝えることを主眼としているのではないようです。それは、47節後半に「こうして主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」と信仰的解説を加えることでわかるようになっていきます。

仲間に加えられた理由にはペトロの説教や「使徒たちによって多くの不思議な業としるし」があったからですが、ここではそれに「信者たち」の生活の証も加えています。47節の「こうして」とは、使徒の働きだけではなく、信者たちの生活をも含めたものを指しています。

さらにその主語は「主は」と説明しています。仲間に加えたのは、使徒の働きでも、信者の生活の証でもなく「主」なのです。逆を言うと主は私たちの「日々」の信仰生活を豊かに用いられるのです。

44節や46節に「一つ」と記し、最後の主の行為も「一つにされた」と説明されているように「加わる」こととは単なる「仲間」になることではなく「一つ」になることを意味しています。パウロが教会を「キリストの体」と表現しているのと同じ信仰です。(コリント一 12章 12節以下参照)

カテキズム 子どもカテキズム 問34
ウェストミンスター信仰告白 25章

子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 私はひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、

キリストの体なる教会と共に歩みます。

〈契約共同体としての教会〉

私たちの救いと信仰の歩みは、「神の民の祈りの家、キリストの体なる教会」（「子どもカテキズム」）に生きることなしには成立しません。キリスト教の信仰は、個人の信仰である前に、共同体の信仰です。旧約の時代のイスラエルも、新約のキリストの教会も、ともに神の「民」であるという事実を見ましょう。

私たちの救いは、神の永遠からのイエス・キリストにある選びの恵み（エフェソ 1:4）ゆえですが、重要なことはこのキリストにある選びも、個人の選びではなく民単位の、共同体としての選びであったのだということです。そして神はキリストにあって選ばれた聖徒らを恵みの契約の中に招き入れ、キリストをかしらとする聖なる公同の教会につらならせ、教会とそこに生きる民をかしらなるキリストの恵みの主権のもとに支配しておられるのです。

日本にプロテスタントの信仰を伝えた宣教師たちは、当時欧米にあって大きな影響力を持っていた信仰復興運動（リヴァイバリズム）とのかかわりを有していた人々であったと言われています。そのこともあってか、日本の教会には信仰や救いを個人レベルで考える傾向がやはりあるのではな

いかと思われます。キリストを信じて生きることは、キリストの教会につらなって生きることにはほかならないことを理解することの大切さを深く覚えるものです。

〈恵みの手だてを分け合う〉

神は教会に、聖なる民らを守り育て、終わりの日の完成にまで至らせるためのさまざまな恵みの手だてを備えていて下さいます。私たちは教会につらなって生きるときに、これらの恵みを受けて歩むことができます。

聖霊降臨の出来事によって生まれた最初の教会について、使徒言行録は教会員たちが「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈ること」に熱心であったと語っています（2:42）。これはみ言葉（の説教）と礼典と祈りに熱心であったということです。ウェストミンスター小教理問答 88 問は、このみ言葉と礼典と祈りの三つを、主イエス・キリストが十字架の贖いの恵みを聖徒らに伝達する外的な、普通的手段として挙げています。神がご自身の教会に備えておられるこれらの恵みの手だてを、私たちはともに分け合いながら生きるのです。

テキスト 使徒言行録 2章 42～47節
カテキズム 子どもカテキズム 問34

「神の民の祈りの家（共同体）と共に生きる歩み」

〔単元のねらい〕

日曜学校も進級式を迎え、教師も子どもも新鮮な気持ちをもってスタートしておられることと思います。本誌も第二年目。カテキズムカリキュラム最後の年となりました。志を新たにして、一人でも多くの地域の子らを主イエス・キリストのみもとに導き、また契約の子らをはっきりとした福音理解に導くべく、皆様と共に、より良き教案作成に励んで参る所存であります。どうぞ、共に志を新しくして、この光栄ある務めを担って参りましょう。

さて、問34は、本カテキズムの強調点、特質があらわになる箇所である。信仰の歩みは、徹底的に共同体形成的なものである。信仰は、神の民の祈りの家と離れたところでは成立しない。子どもを生かす福音の力は、福音によって生み出される交わり（共同体）の現実のなかで豊かに注がれる。その意味でも日曜学校が、「子どもの教会」となることが神学的に支持されよう。進級式にこの教理を学べる事に摂理を覚える。「わたしはひとりぼっちではない。先生、友達がいる……。イエスさまと一緒に歩いて下さる……。」このような喜びを味あわせてあげたい。子どもの信仰共同体の形成を自覚的に目指して、日曜学校の奉仕に当たりたい。何故、子どもらに、日曜日に教会に集うのかを悟らせたい。

今日は、進級式を行いました。皆、一学年ずつ大きくなりました。上のクラスの分級に行ったお友達もいますね。中学科に入ったお友達もいます。おめでとうございます。教会には入学式や進級式はあるけれど、卒業式はありません。この一年間も、休まずに教会に来てください。イエスさまと一緒に礼拝することができるのは、先生にとってどんなに嬉しい事か分かるかな。そして、皆が教会に来て礼拝を捧げることが一番喜んで下さるのは、イエスさま、そして天のお父さま、神さまが一番喜んでくださるのです。先生は、皆と一緒に礼拝できることがとても嬉しくて、今日も日曜学校に来ました。

さて、今日の聖書のお話は、一番最初の教会の様子でした。イエスさまが天に戻られてから、50日目のことです。イエスさまの約束どおりに、聖霊なる神さまが来て下さって、お弟子さん達に勇氣と愛、力と喜びとを満たしてくださいました。そこで、イエスさまを十字架につけた人々がたくさんいる、エルサレムの真ん中で、あのイエスさまを捨てて逃げてしまった、ペトロさんが説教を

始めました。ペトロさんは、大胆にわたし達の救いのためにイエスさまがどのようなお働きをしてくださったのかを語り始めました。十字架と復活を語りました。そして最後に言いました。「皆さん、悔い改めて、イエスさまを信じなさい。罪を赦していただき、天国に行ける神さまの子にしてくださいなさい。」すると、どうでしょう。三千人の人々が、イエスさまを信じて洗礼を受けたのです。

さあ、洗礼を受けてイエスさまを信じた人たちはこの後、どうしたのでしょうか。「ああ、僕たち私たちは、イエスさまを信じて罪が赦されたんだ。ばんざい。嬉しいな。でももう時間がきました。さあ、それでは、皆さん、さようなら。また、いつかお会いできたら良いですね。それまで、神さまを信じて行きましようね。ばいばい。」こんな風に、ばらばらになって、それぞれ自分の家に帰って行ってしまったのでしょうか。違います。先ほどの聖書の朗読の中に「信者たちは皆一つになって」とありました。つまり、イエスさまを信じた人たちは、ひとりぼっちではなくなったのです。イエスさまを信じた人たちは、これまでお互

いのことをぜんぜん知らなかった人も、これまで仲良くなかった人も、男の人も女の人も、大人も子どもも、一つになって信仰の生活を始めたのです。一緒に集って、礼拝をささげました。一緒にお食事をするような仲の良い関係になりました。そればかりか、自分達のなかで、お金や食べ物が少なくて困っている人のために、自分の物を売ってしまって、皆で自由に使えるようにしたのです。「これは、自分だけのもの、君になんか貸してあげられないよ」、「ただであげるわけなんかないだろう」と言うようなことはしなかったのです。反対に、「困っているなら、お互いに助け合おうよ。イエスさまを信じて、僕たち私たちは、イエスさまに喜ばれるようにしようよ。そのために、仲良くしよう。愛し合おう。イエスさまの教えを守って生きて行こう。」このように、イエスさまを信じた人たちは、いつも集って、使徒のペトロさんや、ヨハネさんから、聖書のお話を聴いて、一緒にお祈りしあったり、礼拝を捧げたりして、暮らし始めました。

それを見ていた人たちは、とても驚きました。なぜなら、今までそんな仲の良い人たちなど一度も見つからなかったからです。本当の親子だって、本当の兄弟だって、喧嘩したり、憎しみあったり、自分のお金を取った、取られたとか言って、殺しあったりすることも珍しいことではないからです。周りの人たちは思いました。「この人たちの信じているイエスさまって、一体どんな人なのだろう。きっと悪い教えじゃないと思うな。だって、

信じている人たちの顔つきを見れば、分かるよ。やっている行いを見れば、イエスさまって素敵なんじゃないかな。」こうして、最初の教会は、皆から、「わあー、羨ましいなあ、僕らも仲間に入れてくれないかなあ。」こんな風に見られるようになったのです。

さて、僕たち私たちは、今日、イエスさまによって呼び集められて、教会に来ました。イエスさまを信じ、イエスさまを愛して歩む僕たち私たちも、この人たちと同じです。僕たち私たちも、イエスさまによって、神さまの家に住む、神さまの子どもとされています。日本キリスト改革派教会と言う僕たち私たちの教会は日本に150余りあります。さらに世界中には、教え切れないほどの教会があるのです。皆、イエスさまによって、一つにつながっています。でも、はじめに大切にしなければならないのは、僕たち私たちの〇〇教会のここにいるお友達です。お友達のために、毎日お祈りしていますか。土曜日には、必ずお祈りしてください。休んでしまったお友達のためには、学校で、声を掛けてあげましょう。そして、ここにまだ来ていないお友達もたくさんいるでしょう。新しいお友達とどんどん仲良くなって、イエスさまのところに、教会に連れて来てあげてください。イエスさまを信じている僕たち私たちには、いつもイエスさまと一緒にいてくださいます。お友達も先生も神さまの子と一緒に、天の国を目指して、歩み続けるのです。

今週の暗唱聖句

わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

イザヤ書 56章7節より

〈目標〉

日曜日には日曜学校（教会）に来て、みんなと一緒に神様を礼拝する気持ちを新たにします。

〈導入〉

今日から新しいクラスです。みんなのこと教えてね。

- 「お名前は？何才？好きなものは？」-
- 「ここはどこですか？」-（皆に聞く）

教会！・・・教会は、神様が集めてくださった神様の家族。皆は、ただのお友達ではなくて神様を信じる神様の子供らである。神様は神様の家族であるみんなが、教会に来て礼拝し賛美することを一番喜んでくださることを話す。

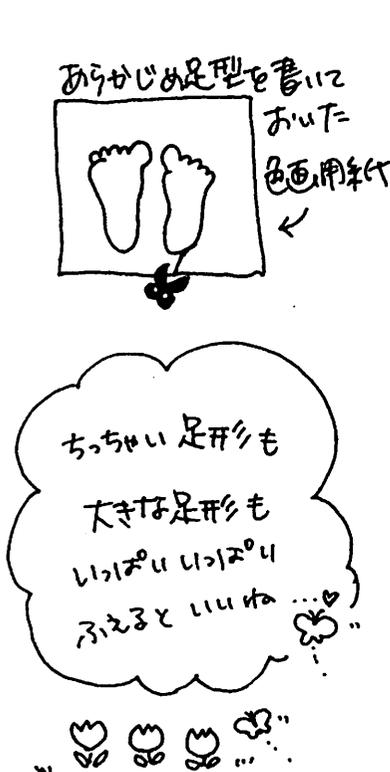
〈展開例〉

「イエス様と歩む私たち」足形製作

材料／ B紙、色画用紙、はさみ、のり、水性ペン、クレヨンなど

- ① あらかじめ、子供の足のサイズを聞いておき、それぞれの大きさの足形を色画用紙にサインペンで書いておく。
- ② 線にそって足形に切り、B紙に貼る。
- ③ 名前を書いたりして飾る。

余談・・・本当に足形をとれたらいいですよね。やるなら、夏場。小さな椅子に座らせてとり、ぬれ雑巾で、すぐに拭き取るとよい。



〈祈り〉

神さまの家族が、次の日曜日にも、みんなそろってあつまり、礼拝できますように。アーメン。

〈目標〉

イエス様を信じるということが自分だけの信仰でなく、交わりの信仰であることに気がつく。

〈お話を振り返る〉

初代教会の姿の特徴を考えてみましょう。

- ・なんでみんな一緒にいたのかな？
イエス様を信じる仲間だから
イエス様が「愛し合いなさい」と教えられたのを実現するため
- ・イエス様を信じた人達は、みんな集まって、何をしていたのかな？
使徒の教え（御言葉を聴くこと）
相互の交わり
パンを裂くこと（今の聖餐式）
祈ること
- ・教会に集まっていた人を見たほかの人達はど
う思ったのかな？
すごいなー
仲の良い人達だなー
どうしてこんなふうにできるんだろう？
私も仲間に入りたい！
みんなの信じているイエス様って、どんな方なんでしょう？
- ・こうして神様は、イエス様を信じて救われた人達を、教会の仲間に入れてくださいました。2000年も離れていますが、私たちも、この教会に、神様がいれてくださったんです。さて、みんなが熱心にしていた四つのこと、覚えていませんか？ この四つはイエス様が教えてくださったことなので、今も私たちの教会に受け継がれています。皆さんも、熱心でできるように、神様にお祈りしましょう。

〈みんなでやってみよう〉

進級後初めての分級ですね。持ちあがりのため顔見知りのお友達ばかりかもしれませんが、改めて自己紹介をし（もちろん先生も）、おうちでもお友達のことをおぼえてお祈りできるように、名前を書いたカードを作りましょう

138ページをご覧ください。

・用意するもの

教会の形に作った紙（画用紙や厚紙）・・・

人数分（それぞれの会堂の形に合わせて面白いかも）

教会の屋根につける十字架・・・人数分
色鉛筆やサインペン

・自己紹介はできるだけ詳しく一人ずつ順番に発表します。

自分の好きなこと

嫌いなこと

今熱中していること・困っていること

やってみたいこと

今年目標、など

（人数に合わせて時間を調節してください）

・一人発表するごとに先生がそのお友達のためにお祈りをします。先生の分はできればお友達の誰かに祈ってもらいましょう

・全員終わったら、教会の絵を裏返し、一番上に「イエス・キリスト」とそれぞれ書いてもらいます。その後、みんなで廻しながら他の人の紙に自分の名前を書いて行きます（自分のところに帰ってきた時には、他のお友達の名前がみんな書いてあるようにします）。最後に自分の名前を書いて、屋根に十字架をつけたら、完成です。

・おうちでも、この教会を見ながら、みんなのために祈るよう促します。

・人数の少ないところは、他の分級のお友達や先生にも名前を書いてもらおうと良いでしょう。

〈目標〉

教会とは、イエス様を信じ、イエス様と共に歩む人たちの集まりであることを覚える。

〈指導上の心得〉

一人でがんばるのではなく、みんなで共に祈り合い、助け合うことの大切さを伝える。

〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・教会というと、「建物」のように思わなかったかを尋ねてみる。
- ・イエス様を信じると、イエス様につながり、同じように信じるみんなと一緒に歩むことになることを覚える。
- ・弱い私たちが共に助け合い祈り合うことによって、イエス様が私たちを助け導き、強くして喜びに満ち、教会の中で共に歩むことができるようにしてくださることを覚える。

〈ワーク〉

1. 世界中には沢山の教会があるけど、この教会以外の教会は、私や僕には関係がないのかな。

a) 関係ない b) 関係がある

2. その理由は何だろう。下のア～カから選んで文を作ろう。

()を信じる人の集まっている教会は、()

によって一つに結ばれています。その教会につながっている私たちは()をすることで一つにされて、世界中の教会と関係があるのです。

ア) お話し イ) 自分 ウ) 聖霊

エ) イエス様 オ) 接着剤 カ) お祈り

※世界中の教会の人と一つにされているから、あなたは一人ぼっちになることはないんだよ。

3. イザヤ書 56:7の後半を覚えましょう。

〈答え〉1. b 2. エ、ウ、カ (イエス様、聖霊のお祈り)

〈目標〉

神様を信じている人々是一个の群(共同体)である。イエスの教えを守り、互いに愛し合っている。

〈指導上の心得〉

神の家族として生きる共同体生活における四つの熱心、①使徒の教え、②相互の交わり、③パンを裂くこと、④祈ることは、個人的信仰(孤独)生活ではなく、共同体の中で培われ、主の導きによって、ひとつとされた。

〈展開例〉

イエス様が好き、イエス様のお話が聞きたい、お友達にもイエス様のことを教えてあげようと、みんなは教会に集まっています。一人ぼっちではありません。一緒に聖書のお話を聞いたり讃美したり、お祈りしたりしましたね。これはもう立派

な「神の民の祈りの家」です。今日から新しいクラス。みんなで「神の家族ゲーム」をしましょう。

① 輪になって自己紹介。自分のことを皆に知ってもらおう。お互いにお父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんと呼び合う(おじいさん、おばあさんも…?)

② 祈りのリクエストをし、皆で祈る。

③ 大きなパンを裂いて、皆で分け合って食べる。(お茶用意)

④ 共同作業(後片付けをする)カテキズム問 34を唱和し、感謝の祈りで終わる。

〈祈り〉

私たち一人一人は神様によって一つにされた神様の家族です。お友達のために祈ることができ、仲良くできますように。いつも喜んで神様の家に集まることができますように。アーメン。

問34の理解



問32～35の流れの中で理解させる。「どこを歩むの?」「どこまで歩むの?」などの質問をして、生徒が自発的に前後を確認するように促す。救われた者が天国を目指し聖化の歩みを歩む中で、だれと歩むのか?

「ひとりぼっちではない」「教会と共に歩む」ということについて、「神の民の祈りの家である教会」(今週)、「キリストの体である教会」(来週)の2週に渡って学ぶことを生徒に伝え、学びの見通しを持たせる。

生徒用プリントの使い方

拡大コピーしてお使い下さい。空欄は、a.生徒の思ったこと分かったことを自由に書かせる、b.板書を写させる、c.問答・聖書を写させる、などに使えます。

聖書箇所を読み取り



41節の「新しく加わった3000人」は何をしていたのか? 彼らが恵みの伝達の外的な普通的手段(聖言葉・礼典・祈り)に熱心であったことを読み取らせる。

祈り合う時を持つ



新しい学年の最初なので、自己紹介をし、今祈ってほしいこと(現在の課題)を述べ合う。それぞれの課題を聞いて、お互いに祈り合う。

自由に祈るより、ルールを決めた方が祈りやすい場合がある。Aそれぞれが「わたしは〇〇のために祈る」と決めて祈る、B隣りに座っている子のために祈る、など、祈り方のルールを指定して祈り合う。

月 日 「神の民の祈りの家」 中学科

名前 _____

聖書：使徒2：41～47

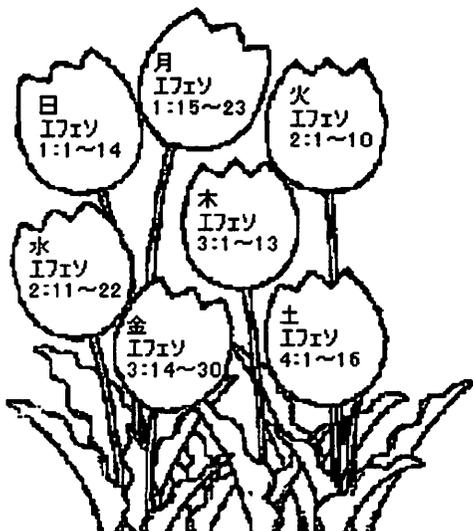
問34

☆「だれと歩むのですか」

☆神の民の祈りの家

☆祈り合おう

毎日聖書を読もう



暗証聖句

(イザヤ 56:7b)

テキスト

エフェソの信徒への手紙 2章 14 ~ 22 節

「キリストはわたしたちの平和」と言って、キリストによる和解を教える箇所です。またその和解によって造り上げられた新しい人、つまりキリスト教会のことを扱う箇所となっています。

(1) 二つのものを一つに

ここで言われる二つのものとは 11 節にでてくる「あなたがた・・・異邦人」と「割礼を身に受けている人々」すなわちイスラエルの民とのことです。11 ~ 13 節では、「あなたがた」異邦人が以前はおよそ神から遠く離れていたのに、今は「キリストの血」によって近いものとされた事実を思い起こさせています。つまり神を知らずに生きていた以前の自分を考えることが「平和」を考えることの大切な点です。

「キリストは私たちの平和」と言うとき、この箇所では二つのことを指しています。それは「異邦人」であるあなたがたと「イスラエルの民」との平和、つまり人と人との間の平和のことです。また 16 ~ 18 節では「御父に近づくことができる」と言っているようにもう一つは人と神との平和のことです。通常私たちの信仰教理ではまず神との和解があって、その聖化の実として人との和解を捉えますが、ここではキリストの業そのものがまず人と人との和解を実現したのだと教えています。

イスラエルの民と異邦人の間には「敵意」という隔ての壁があります。約束にあずかっていないとか神を知らないという立場や認識の違いではなく「敵意」というまさに人を隔てる壁です。「ご自分の肉」とは十字架というより（「十字架」は 16 節で出てくるので）、肉をまとった地上のイエスの生涯のことでしょう。地上のイエスの働きはまさにこの「敵意」を滅ぼす働きだったとりたいのでしよう。

和解の結果、異邦人をユダヤ人化したというの

ではなく、「こうしてキリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げ」たのです。一人の新しい人とはキリスト教会のことです。新しいとは異邦人加入による性格の変化ではなく、古いものとの対比による新しさ、すなわち質的な違いや「造り上げた=創造された」と言われるように誕生したという出来事を意味します。

(2) 神との平和

その上でキリストは「十字架」によって「両者をも一つの体として神に和解」されました。この和解をキリストは「おいでになる」、「福音を告げ知らせる」方法で私たちに伝えられましたし、またその結果「一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。」まさに「キリストはわたしたちの平和であります。」

(3) キリストの教会

19 節以下はそのあなたがたキリスト教会が「神の家族」であり、「聖なる神殿」「神の住まい」となることを教えています。

この箇所ではキリスト教会を建物になぞらえて教えられます。中心は 20 節「かなめ石はキリスト・イエス御自身」、21 と 22 節の「キリストにおいて」と繰り返されるように、あなたがたを教会に建て上げるのはキリスト御自身であるということです。

その中心をしっかりと記した上で「使徒や預言者という土台の上」とか「建物全体は組み合わせられて成長」「あなたがたも共に建てられ」と言われているように御言葉に仕える働きや、信徒どうしのつながりが必要不可欠なものとして語られています。

また「成長し」と言われているように、教会は建物にたとえられてはいても、刻々と変化をする生命体としても捉えられています。

カテキズム 子どもカテキズム 問34
ウェストミンスター大教理問答 問64 ~ 66
ウェストミンスター信仰告白 25章

子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 私はひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、

キリストの体なる教会と共に歩みます。

〈キリストと結び合わされる〉

救いの祝福を一言で言い表すとすれば、それはイエス・キリストと結び合わされることの祝福であると言えます。イエス・キリストがご自身のみ霊によって私たちとともにいて下さることこそ、救いの喜びそのものです。

ただここでもキリスト教信仰が個人の信仰である以前に共同体の信仰であることを思い起こすことが大切です。つまり、キリストとの結合ということを、教会共同体のレベルで考えるということです。

パウロは、教会はキリストの体であると言っています(エフェソ 1:23)。かしらなるキリストと体なる教会とは、しっかりと結び合っています。そして体の各部分も、かしらなるキリストに結び合っていることによって、体全体にも一致と調和がもたらされています。キリストはご自身との結合の恵みを、教会とは離れたところで個々の信者らにばらばらにお与えになるのではなく、ご自身の体なる教会を通してお与えになります。私たちは教会につらなることによって、聖徒の交わりを通してこれを分かち合うのです。

〈教会のしるしみ言葉と礼典〉

カルヴァンは教会が教会であることのしるしを、み言葉(の説教)と聖礼典のふたつに求めました。このふたつの手だてを通して、イエス・キ

リストは(み霊によって)私たちに生きて臨まれます。そこにインマヌエルの祝福が実現します。

キリストの十字架と復活による罪の赦しと永遠の命の福音を告げ知らせ、聖霊はみ言葉を用いて私たちを有効に召し出し(ウ小教理問 30、31)、キリストを信じる信仰を生み出して下さいます。そして聖礼典(洗礼、聖餐)はみ言葉によって生まれた信仰を確かにし、強めるために備えられています。

大切なことは、洗礼も聖餐も個人で受けるものと言うよりも、教会共同体として受けるべき恵みであることです。洗礼は個人的な信仰の表明ということをごえて、キリストの体なる教会につらなることです(「洗礼式」を「洗礼入会式」と呼ぶ教会もあると聞いています)。信者の子どもたちも恵みの契約にあつて幼児洗礼を授けられ、見える教会の一員とされます。また聖餐の食卓を通して、聖霊は私たちを、今は天にあるキリストの栄光のみ体と結び合わせて下さいます。そこにおいて私たちは、霊肉ともにキリストとひとつの体とされる恵みをいただくのです。それは主が主の民のために設けて下さる祝宴であり、天のみ国の祝宴の先取りでもあります。それゆえにキリストの体なる教会をたてあげる一切のいとなみは、聖餐の食卓をふさわしくととのえることから始められていくのです。

テキスト エフェソの信徒への手紙 2章14～22節
カテキズム 子どもカテキズム 問34

「お互いを感謝して共に生きる」

〔単元のねらい〕

子ら一人一人は、それなりの価値を認めるゆえに日曜【学校】に来ている。いずれの子らにとっても、楽しいから自発的に来るのであろう。その楽しさをよりよく提供したい。勿論それは、この世が与えてくれる楽しさとは異質なものであろう。(そうありたい。)

さて、本日の我々の目標は、教会がキリストの御体、霊的な救済機関、「公同教会を信ず」(ニカイア信条)と告白されるものであることを伝えることである。教師にとってこのリアリティーを言語化することは難しいかもしれないが、深めさせていただくことは容易であるはずである。何故なら、聖餐を受領することが許されているからである。それだけに、聖餐を受けていない子らには、説教(を中心にして)によって示すことが求められる。「日曜学校」と銘打つ我々であるゆえに、教師自らが、日曜学校を単なる聖書の「学校」と言うイメージで捉えているなら、この課題を担う事はできまい。子どもと共にキリストにある交わりを形成する地道な努力のなかで、本日の単元が子らに体得されるのである。ここでは、その根拠として、お互いが主イエスにあって、一つに結ばれている者同士であることを認め合うことへと導きたい。

今日も、愛する皆と教会に来る事ができました。とても嬉しいです。心から神さまに感謝します。

先週のお話を覚えていますか。僕たち私たちは、ひとりぼっちで、また一人一人ばらばらでイエスさまを信じているのではないと言うことでしたね。先週のカテキズム問34も思い出してください。今日も同じカテキズムです。「神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。」だから、僕たち私たちは、今日来ていないお友達のために、お祈りしましょう。何故来れなかったか、知っているお友達は先生に伝えてください。もしも、前の週に、来れない事が分かっているなら、先生に「来週はこれこれがあって来れません」って教えておいてください。何故って、皆と一緒に、礼拝する事ができないことは先生にとって、とても悲しく残念なことだからです。心配だからです。昨日の夜、「明日は日曜学校です。お友達が休まず来れますように」ってお祈りできましたか。分級の先生のためにお祈りしてくれたかな。先生達は、今日のためにお祈りしていました。

さて、今日の聖書のお話は、何のことが書いて

あったのでしょうか。難しかったかもしれませんがね。それは、教会のことでした。今日の暗唱聖句は「教会はキリストの体」です。とても短いのですぐに覚えたでしょう。僕たち私たちが今、ここに来ているのは、日曜学校ですね。ここで、僕たち私たちは何をしていますか。先ず、一番大切なことは今こうして礼拝を捧げるということです。その後で分級に分かれて、今日の聖書の御言葉を学んだり、工作したり、遊んだりします。日曜学校って言っているけれど、皆の通っている小学校とは全然違うでしょう。皆の学校では決して教えてくれない、人間にとって一番大切な知識を教えてくれるから、普通の学校とは違うのでしょうか。先生はそう言っても構わないと思います。本当に、皆の学校のお友達が全員、日曜学校に来て欲しい、人間にとって最も大切な、イエスさまのことを知って欲しいと心の底から思っています。でも、日曜学校が普通の学校だとか、どこかの子ども会と違うのは、これは、〇〇教会が子どもたちのために開いている集会だからです。

町を歩いていると立派な教会堂を見ることがあります。大きな十字架が屋根についているのです。

でも、よく見てみると、それは結婚式をするための建物なのです。つまり、結婚式場です。結婚式場は、どんなに大きな十字架が建っていても、決して教会ではありません。教会は、建物のことではありません。それなら、教会というのは、どんなところなのでしょうか。

皆は、教会って言うと、何を思い出しますか。分級の先生、牧師先生、やっぱりお友達のことでしょうか。今日の御言葉は不思議でしたね。教会は、「イエスさまの御体」だと書いています。イエスさまは、十字架についてその三日後に復活されて、天に戻られました。ですから、お甦りになられたイエスさまとお体は今、天にあります。それなら、なぜ、教会のことをイエスさまの体というのでしょうか。教会は、先生達の考えや力で、「そうだ。一人にいるより、大勢集ったほうが元気が出るし楽しいから、教会をつくろう」と考えて、出来たものではありません。教会は、「私はこの岩の上に私の教会をつくる」と仰ったイエスさまによってつくられたのです。問 30 にこうあります。「聖霊なる神さまがわたし達に信仰を与え、私達を主イエス・キリストと一つに結び合わせて下さる。」こうして、教会はできたのです。とても不思議なことですが、イエスさまを信じる人は、イエスさまと一つに結び合わされるのです。イエスさまにはお体がありますから、僕たち私た

ちは、イエスさまのお体と合体させていただいたのです。僕たち私たちは、イエス・キリストのお体の一部分とされているのです。だから教会は、イエスさまの御体です。だから、ここにいる一人一人は、とてもとても大切な一人一人です。イエスさまの体の一部分だからです。

大きな石をひとつひとつ積み上げて建てた建物を見た事がありますか。その天井を見た事がありますか。たった一つの石が欠けてしまったら、崩れてしまうのです。一つの石が他の石を支えています。一つの石は他の石によって支えられています。イエスさまは、僕たち私達をこの〇〇教会に集めてくださいました。そして、イエスさまによって、僕たち私達はお互いに小さな石かもしれませんが、イエスさまの御体なる教会、イエスさまを礼拝する神殿として、建て上げられて行きます。だから、ここにいるお友達の一一人一人、先生方の一人一人が僕たち私達にとって、とてもとても大切なのです。あなたがいないと石の建物は崩れてしまいます。「僕一人休んでも構わないでしょう。わたしなんかなくても日曜学校は、いつもと同じでしょう。」そんな風に考えてはいけませんね。僕たち私達には、お互いになくならない大切な「石」なのです。お互いにありがとうって言いましょ。

今週の暗唱聖句

教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

エフェソの信徒への手紙 1章 23節

〈目標〉

神様が、教会に集めて下さったお友達を、大切に
にする。

〈導入〉

今日もみんな、イエス様に呼ばれて教会に集ま
りました。

- 「なぜイエス様は、この教会に〇〇ちゃんや、
〇〇くんを呼んだのでしょうか？」 -

それは、神様が〇〇ちゃんや〇〇くんを、この
教会のイエス様の弟や妹として選んでくださった
から。みんないつも一緒にいてくださって、み
んなのことをいちばん良く知っている神様が、決
めてくださったことを話す。

〈展開例〉

その1 「さんびしよう」

『ブレイズワールド』1ばん

1 ハ ハ ハレルヤ♪ みんなでさけばば
ハ ハ ハレルヤ♪ なんだかウキウキ
主イエスといっしょ いつでも いっしょ
この身にあふれ おさえられない!

2 ハ ハ ハレルヤ♪ ところにさけばば
ハ ハ ハレルヤ♪ なんだかわくわく
主イエスの ちから おおきな ちから
この身にあふれ おさえられない!

みんなでさんびする喜びを味わおう (^ ^) /

その2 「手をつないで遊ぼう」

みんなで一つのものを作る楽しさを味わおう。

手をつないであそぼう ♪

みんな手をつないで 輪になり 先生のいう

おどりをたなず。 (例: まる! 三角! 四角! たんご! ハート!)
たど



長めのD-フやひもを
使って机の上や床に
おどろくものも
あもしろい。

大きなパズルをつくらせて
みんなが完成させるはたのも
いかがでしょうか?

みんなが
きれいに色をぬりから
カットしてあそぶ



~~~~~

〈祈り〉

てんのおとうさま。教会に集まるみんなが、イエスさまによって仲良く出来ますように。アーメン。

〈目標〉

一人一人がイエス様にとって大切な存在であり、その一人一人が集まってイエス様の御体である教会を形づくっていることを理解する。

〈お話を振りかえる〉

・ 何でみんなは日曜学校に集まっているのかな？

面白そうだから

イエス様を信じているから

お父さん、お母さんに行きなさいって言われたから

お友達に誘われたから

・ 理由は色々あるけれど、今日、日曜学校に集まっているのは、イエス様があなたのことを必要だからです。みんなの隣に座っているお友達も、先生も、みんなイエス様に招かれた人達です。そういうイエス様に招かれた人達の集まりを「教会」と言います。

・ 皆さんのお家は何人家族ですか？

3人？ 4人？

(もっと、或いは2人の場合もある)

・ その中で、誰かいなくてもいいやって思う人いますか？

たまにはお母さん(又はお父さん)、いつもガミガミ言うからキライ！って思うかも……。でも、いなくてもいい人なんていないですね。みんな大事な家族です。

・ 教会の人達も「家族」と呼ばれることがあります。では、一体、何人家族なのでしょう？ 先生も想像できないくらいいっぱいです。日本だけではなく、世界中のイエス様を信じる人みんなが家族です。それに、大昔のイエス様を信じた人も、今生きていて信じている人も、これから生まれてイエス様を信じることになっている人も、全部そうなんです。そして、ここにいる、〇〇くんも、〇〇ちゃんもイエス様の大事な家族なんです。

・ もし、「家族」だったら、一人でもいなくなったらどう思うかな？ イエス様はきっと悲しまれるでしょうし、みんなも寂しいよね。毎週みんなが教会に来れるように、神様にお祈りしましょう。

〈やってみよう〉

「みんなて手をつなごう！」

139ページをご覧ください。

・ 用意するもの

人型に切った画用紙、または厚紙・・・人数分+1枚(1枚は少し大きめに切り、イエス様をあらかじめ描いておきます)  
色鉛筆やカラーのペン、はさみ

・ 紙にそれぞれ自分の絵を描きます。  
・ 手の部分に、左は上から、みぎは下からそれぞれ半分ぐらいのところまで切りこみをいれます。(反対でもいいですが、みんな同じにしないと、うまく手がつながなくなります。)  
・ イエス様の絵を真中にして左右に絵を並べ、隣り合った絵の手を切りこみで組み合わせます。  
・ もし場所があるなら、壁などに飾ってもいいでしょう。(その場合は、裏からテープなどで、手が離れないようにとめてください)

〈目標〉

信者は、キリストの体という木につながる一つひとつの枝として生きる者であることを覚える。

〈指導上の心得〉

違いがみえる教会も、実は大きな一つの教会であり、自分もその中の一人であることを伝える。

〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・木と枝のつながり具合、働きの違いを考えてみましょう。
- ・人間の体についても同様に考えてみましょう。
- ・それぞれの働きは違っていても、それらが組み合わせられて一つにまとまっている。そのどれかがなくてはならない大切な一つひとつであることを覚えましょう。
- ・その一人ひとりが、神様に支えられ生かされ、用いられることを祈り合ひましょう。

〈ワーク〉

1. みんなの来ている教会はどんな材料で造られているのかな？
2. 見えない教会の材料は何だろう？
  - a) イエスを信じる人たち
  - b) 木とか石とか
3. イエスを信じる人たちの教会には必要のない人はいるのかな？
  - a) いない b) いる
4. 今のみんなに教会のためにできることは何だろう？
5. エフェソの信徒への手紙 1:23 の前半を書いて覚えましょう。

〈答え〉 2. b 3. a

〈目標〉

教会はキリストの体である。一人一人はキリストの体の一部分。だれ一人欠けてもダメ。お互いが支えあってイエス様についていこう。

〈指導上の心得〉

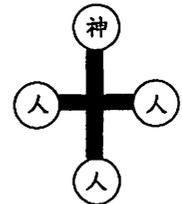
イエス様の十字架により「神と人との和解」「人と人との平和」与えられ、父なる神への一つの道「天の御国」に向かう一つの群れ（一つの体）となる。これが神の家族、教会である。その礎石はイエス・キリストである。

〈展開例〉

子供達と「教会」について自由に話しをする。その中で以下のポイントをおさえたい。

- ① 教会は建物のことではない。
- ② 教会はキリストの体であり、頭なるキリストと体なる教会はしっかりと結び合っている。
- ③ 教会とは神の家族・神の子供・聖なる神殿・神の住まいと言われる。

- ④ イエスの十字架によって、人と人、神と人が一つとなり、キリストの教会を形成する。



- ⑤ どうしたらキリストに結びついていられるのか？ 聖霊の働きによって、自分の力ではなく、インマヌエルの祝福（神様がいつも共にいてくださる）によって支えられている。

- ⑥ 教会にとって大切なことは？（先週学んだ復習の意味で確認しておこう。「御言葉と礼典と祈り」。聖餐については信仰告白をしている子供にはきちんと説明すべきだが、他の子供達には難しいかもしれない。

〈祈り〉

イエス様によって私達一人一人がしっかりと結びつき、神様の体である教会ができますように。



問34の理解

救われた者が天国を目指し聖化の歩みを歩む中で、「ひとりぼっちではない」、「キリストの体である教会」と共に歩むことを確認する。

教会がキリストの体であるなら、キリストは教会の何であるか？

本日のテキスト、また先週読んだ聖書箇所、あるいは知っている話から、キリストと教会の関係について分ったこと知ってることを聞く。

- 頭-体-成長する、
- 土台-建物-建てあげる、
- ぶどうの木-その枝-実を結ぶ、
- 夫-妻-愛され、従う

などの回答を期待。



イメージを表現する

上記のイメージを絵や図に表現させ、交換し合う。



考えてみよう

「教会と共に歩む」とはどのようなことか？ あなたはどのように教会と関わりを持って来たのか？ これからはどのように自覚的に

持っていくのか？

4月から教会に来たばかりのビギナーさんたちには、教会には知らないおじさんやおばさんがいっぱいいるけど、みんな、あなたが救われていっしょに歩むことを楽しみにしている、と伝えて下さい。「挨拶をする」など、基本的な関わりが自覚的に持てるといいですね。

月 日 「キリストの体なる教会」中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：エフェソ2：14～22

問34

☆キリストの体なる教会

毎日聖書を読もう



☆教会と共に歩む

暗証聖句

(エフェソ1：23a)

テキスト

マタイによる福音書 24章 29 ~ 31節

24章から一連の終末の教えが始まります。29節以下は其中で本当の終末の出来事とキリストの再臨を教える箇所となっています。

### (1) 終末

24章の3～14節まで、戦争や騒ぎ、飢饉や地震といったことを扱っていますが、イエスはこうした一般に終末の徴として流布している出来事があっても「惑わされるな」「あわてるな」と注意しておられます。「そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」からです。14節で、「福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」と言われ、16～28節で「大きな苦難が来る」と説明を加えていますから、29節以下はまさに終末そのものの教えとなっています。

「その苦難の日々の後、たちまち」とは前節から福音宣教と新約時代の大きな苦難のさなかのことになります。この終末の大きな特徴は「たちまち」であることと、「太陽、月、星、天体」が「暗くなり、放たず、落ち、揺り動かされる」ことにあります。「たちまち」とは順次とか、徐々にの反対を表現しています。終末を様々な徴候の現れ、段階的な進展などと考えると、「たちまち」とは突然で待たなしの出来事として驚き覚えることになります。

「太陽、月、星、天体」とは国や人々の生活の比喩ではなく、この世界全体を指すのでしよう。特に「天体」は直訳で「天のもろもろの力」と記していますから、これらは宇宙的な支配や力を表しています。「暗くなり、放たず、落ち、揺り動かされる」とはそうした力が取り除かれてその意味を失うことを言うのでしよう。万物が新しくなるために取り除かれるのです。(使徒3章21節)

### (2) 人の子の再臨

その万物更新の終末の時、30～31節「人の子」が再臨します。「人の子」とはダニエル7章13～14節で描かれている「権威、威光、王権」を受け、「とこしえの統治」をおこなう者のことです。主イエス・キリストの来臨は王権と統治が象徴するように神の国の成就として起こります。

「人の子の徴が天に現れる」とは誰もが認めざるをえない様子を指しているのでしょうか。ですから「地上すべての民族は」とも言われます。この来臨には二つの人々の姿が描かれています。一つは「地上すべての民族は悲しむ」、もう一つは「選ばれて人々を四方から呼び集める」です。「悲しむ」人々は「人の子が大なる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見」ることになります。「悲しむ」とは、言い換えると51節「泣きわめいて歯ざりりする」ことなのでしょう。

逆に「選ばれた人々」には、まず第一に「大きなラッパの音の合図」があります。(テサロニケ1章15節以下)ラッパは旧約の昔から王即位の合図、国民への喜びの合図でしたから、主イエスの来臨は真の王の即位成就を表します。第二に「天使たちが遣わ」されます。第三にその天使たちが「天の果てから果てまで」(つまり漏れることなくという意味です)「選ばれた人々を四方から呼び集め」ます。そこでルカによる福音書21章28節では「身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ」とまとめているように、ラッパの合図と天使派遣、天使による招集はメシヤ・イエスの王国完成であると同時に私たちの解放の時でもあると説明しています。

|       |                    |
|-------|--------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問35       |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問28 |
|       | ウェストミンスター大教理問答 問56 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問52    |

---

子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

ウェストミンスター小教理問答

問28 キリストの高い状態とはどの点にあるか。

答 キリストの高い状態とは、彼が三日目に死人の中からよみがえられたこと、天にのぼられたこと、父なる神の右に座しておられること、また終りの日に世をさばくために来られることである。

〈再臨—高い状態のきわみ〉

主イエスの再臨は、主イエスの高い状態（復活・昇天・着座・再臨）のきわみです。聖審は一度救い主としてこの世に来られた主イエスが、終りの日にふたたび来られると語ります。僕のすがたで来られた主イエスは、かの日には世をまっつき義のはかりによってお審きになる方としておいでになります。

この再臨の主イエスによるまっつき審判によって、神の救いのお働きは完成されます。この日聖徒らの救いは完成し、信じなかった者は罰を受けます。そしてすべての被造物が贖いにあずかって更新され、新天新地の祝福が到来するのです。

〈最大の希望としての再臨〉

私たちのために死んでよみがえって下さることによって私たちの罪を贖い、神との和解をもたらし、私たちの死を永遠の命の祝福にかえて下さった十字架と復活の主イエスの再臨は、世界と私たちにとっての最大の希望です。

再臨の約束によって私たちは、世にいかなる出来事が起ころうとも、世の歴史は滅びによって終わるのではなく、主イエスの再臨と新天新地に向かっていくことを、信仰の目によって確かめることができます。世界をはなはだよきものとしてお造りになった神は、終わりの日にはよきことのきわみをもたらして下さることによって、ご自身がまさに世界の主でありたもうことを証したもうのです。

そして私たちがこの地上でいかに世の不義に苦しめられ、悩まされようとも、神の義を求めて歩んだ私たちの信仰の歩みを、再臨の主イエスは豊かに祝し、かえりみたまうのです。主イエスによる最後の審判によって信仰者の義は義そのものとして確証され、ふさわしい報酬にあずかるのです。

私たちは再臨の日を待ち望みつつ、地上を歩み続けます。そして再臨の信仰こそが私たちの地上の歩みを励まし、慰め、主の民にふさわしいものとしてととのえる原動力なのです。

テキスト            マタイによる福音書 24章 29～31節  
カテキズム        子どもカテキズム 問35

## 「信じて待ち望む」

〔単元のねらい〕

子どもカテキズム第二部「信仰の道」も終わりが近づいてきた。最後に、終末に関する教理を扱う。世界と個人にかんする終わりの事柄についての教えは、私共の希望を言い表す告白である。この世の旅路をうまずたゆまず前進し、上昇するために、この教えを子どもらと確信したい。そこで、注意したい事は、再臨の審きのメッセージの語り方の問題である。「苦難の日々」が予告されている。どこまで子らに語るべきか悩まれる教師もおられよう。基本は、背筋を伸ばして、力強く歩み続けるための慰めの教え、励ましの教え、何よりも希望の教えとして語ることであろう。

僕たち私たちのイエスさまを信じる生活、信仰の旅は、イエスさまがいつも一緒にいてくださる楽しい旅です。ひとりぼっちではなく、教会の先生、お友達と一緒にいます。「神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩む」のです。それなら、その旅行のゴールはどこでしょうか。どこを目指して歩むのでしょうか。問35の答えは「イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。」とあります。イエスさまは再び、この地上に戻って来られます。それを再臨と言います。今日はイエスさまの再臨について、聖書のお話を聴きましょう。

今日の暗唱聖句をもう一度唱えましょう。「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

僕たち私たちを救うために、十字架について下さったイエスさまは、三日目にお甦りになられました。そして、復活のお姿を弟子達に現され、弟子達に、あらためてこれまでの教えのおさらいをしてくださいました。けれども、イエスさまはいつまでも一緒にいることができません。何故なら、イエスさまは、イエスさまの救いを世界中に届けるために、天に戻って働かなければならないからです。預言者・祭司・王として僕たち私たちを救い、神様の子らしく生きられるように働かれるために天に戻られたのです。

けれども、イエスさまは天に行きつばなしではありません。再び戻って来てくださるのです。これは、イエスさまのお約束です。イエスさまは、僕たち私たちのために天のお父さまの家で、場所を用意するために戻られたのです。そして、整ったらイエスさまのもとに迎えて下さる、戻ってこられると約束してくださいました。(ヨハネによる福音書 14:3) イエスさまは、弟子達に何度も仰いました。「人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。」(マタイによる福音書 24:30) 天使も言いました、「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」イエスさまは必ず、再び戻ってきてくださいます。

イエスさまは、約束を決して破られません。皆は、お友達と遊びの待ち合わせの時間をうっかり間違えてしまったことがありませんか。待ち合わせの場所を間違えたり、忘れてしまうこともあるかもしれません。けれども、イエスさまはまことの神さまで、神さまが間違えたり、忘れてしまう事など決してありません。はっきりと何度も何度も聖書のなかで仰ったのに、その約束を破ると言うのは、うそをつくと言う事です。僕たち私たちのイエスさまさまが僕たち私たちを騙したり、嘘をつくと思像できますか。決して決して出来ません。考えられません。

もしも皆が、大好きなお友達と、「明日きつと

遊ぼうね。絶対絶対遊ぼうね。」と指さりげんまんをして、お別れしたらどんな気持ちになりますか。家に帰る道でも明日の事が楽しみで仕方がないでしょう。「ああ、早く明日にならないかな。」と思うでしょう。もしも、お父さんが「明日は、どこでも遊びに連れて行ってあげるぞ」と突然言ってくれたら、「ああ、早く明日にならないかな。」とわくわくドキドキするでしょう。きっと、「宿題はきちんと片付けておくんだぞ。」って言われても、嬉しく頑張れるでしょう。

でも、ある人は言うかもしれません。「イエスさまが天に戻られてから、もう 2000 年も過ぎちゃったじゃないか。」確かにお弟子さんたちは、明日にでも来るかもしれないと思って、わくわくドキドキして待っていました。けれども、その 2000 年の間に世界中のお友達がイエスさまのことを知ることができるようになったのです。イエスさまは、イエスさまが神さまの子として選んでくださった人が全員、救われるように、ちゃんとご計画してくださるのです。だから、お弟子さんたちや僕たち私たちよりも、神様がちゃんと一番良い時を考えてくださるのです。いつ戻って来てくださるのか、それは、天のお父さまにお任せしていれば良いのです。

もしも、「遊びに連れて行ってくれるなんて、嘘に決まっている」と思ったら、そのお友達は、

ちっとも勉強しないかもしれません。たとえ、宿題をやったとしても、楽しくやれないでしょう。イエスさまは、僕たち私たちが楽しく、悪魔の誘惑に負けないで正しく生きてゆけるように、きちんと約束してくださったのです。イエスさまが戻って来られる時には、僕たち私たちは地上でどんな事をして過ごしたのか、天のお父さまの前で、明らかにされます。隠れて悪い事をしていた人も、決してイエスさまの前で、隠し通す事はできません。むしろ僕たち私たちは、イエスさまのお約束を信じて待っていますからイエスさまの喜ばれることをしたいと思います。イエスさまが来られたら「良くやりました。立派な弟子でした。」とほめていただく事もできるのです。

この希望を持っている人は、勇気が湧いてくるのです。悪い誘惑に負けなくなります。誰かが、「日曜日は遊ぶ日なんだぞ、教会なんか行かないで、一緒に楽しくやろうよ」って言っても、僕たち私たちは、負けません。イエスさまは必ず、戻って来られると思出し、信じて、楽しみにして待っている人は、強い人になれます。イエスさまに喜ばれることを探して行なう力が湧いてくるのです。イエスさまは、僕たち私たちが必ず迎えに戻られるのです。ですから、僕たち私たちが、その時まで、日曜日に教会に集まってお迎える準備を怠らないのです。

---

#### 今週の暗唱聖句

あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。

使徒言行録 1 章 11 節後半

---

〈目標〉

イエス様が必ず来てくださることを信じる。

〈導入〉

- 「私たちが起きている時も、眠っているときも、いつも一緒にいてくださるお方がいます。それは、誰でしょう？」 - イエス様
- 「じゃあ、イエス様のお顔を見たり、触ったりしたことがある人はいるかな？」 -  
イエス様は、今は天におられるので、今はイエス様のお顔を見たりすることは出来ません。でもイエス様は『私は必ずもう一度来ます。』と約束してくださいました。その時が来たらイエス様と顔と顔を合わせてお会い出来ること、いつまでもいつまでも一緒にいられることを話す。

〈展開例〉

「手形もよう」

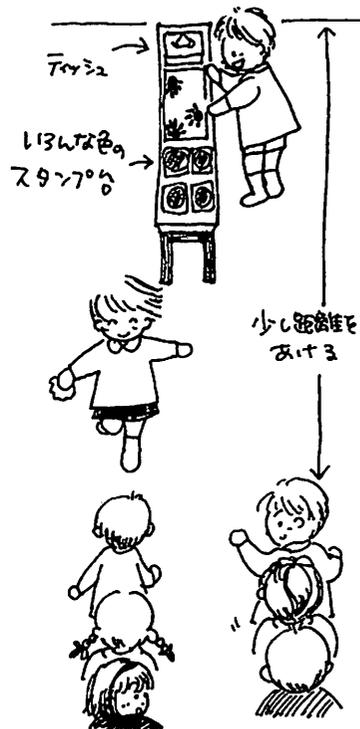
綺麗な色を使って、喜びを表現しよう！

材料／大型画用紙1枚、スタンプ台、ぬれ雑巾、ティッシュ、大きめのゴミ袋人数分

- ① スタンプ台は、脱脂綿をガーゼで包み（てのひらの大きさ）絵の具を溶かしたものをしみこませ、お盆の上のせておきます。
- ② スタートラインを決めておき、リレー式で順番に一回ずつ手形を押して、もようを描く

イエス様が来られる時、「大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って・・・」と記されています。イエス様が来られる時を想像してみよう。

- ルール
- よーいドンでスタート。
  - ↓
  - 自分の好きなスタンプの色を片方の手のひらにつけて画用紙にべったんこ。
  - 押した手で、ティッシュをしっかりと握って掃って来る。
  - ↓
  - 次のお友達スタート
  - ↓
  - ぬれ雑巾で手を拭いてもらい次の順番を待つ。
- ※服が汚れないように、ゴミ袋を利用してエプロン代わりにする。



〈折り〉

「イエス様来てください。」と祈りつづける僕たち私たちにしてください。アーメン。

## 〈目標〉

イエス様が再び来られることを理解し、確信を持ってこの世の歩みを送ることができる。

## 〈お話を振りかえる〉

- ・イエス様は今どこにいらっしゃるのかな？  
天の国・父なる神様といっしょにいらっしゃる。(地上にはおられない)
- ・でも、イエス様が天に上られた時に、神様の御使いは弟子達にイエス様は再び地上に来られると言いました。神様はどうしてそのことを教えてくださったのかな？  
イエス様が再び来られる時を信じて、楽しみに待つことができるようにするため。
- ・イエス様はいつ来られるんだろう？  
もしかしたら明日かもしれないし、何千年もずーっと先のこともかもしれない。いつかは私たちにはわからないけど、神様が一番良いと思われる時に必ず来られます。
- ・イエス様が来られたら、待っていた人達はどのようなのかな？  
イエス様を信じてこの世を生きた人たちは、天国に入れていただいて、イエス様に「よくやりました」って誉めていただけます。さて、私たちはイエス様が来られる時、なんと喜んでいただけるでしょうか？ イエス様に喜ばれるように、イエス様を信じる人になりましょう。

## 〈やってみよう〉

「ジグソーパズルをつくろう」

- ・用意するもの  
画用紙 (B5サイズぐらいのもの) . . . 人数分  
色鉛筆やカラーのペン、はさみ
- ・画用紙にできるだけ白いところが残らないように絵を描きます。
- ・描き終わったら、ジグソーパズルのように絵を切ります。(小さくきりすぎないように、10から15ピースぐらいになるようにします)
- ・自分の絵では簡単過ぎるので、みんなで交換して、パズルをして遊びましょう

## 〈目標〉

昇天されたイエス様が、選ばれた人たちを引き上げるために再び来られることを覚える。

## 〈指導上の心得〉

裁きより、救われる希望の日であること、その希望に生かされていることを喜ぶように導く。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・人間は死んだら終わりか、死んだ後の世界があるのか、あるとしたら私たちはどこへ行くのでしょうか、天国なのか地獄なのか考えてみよう。
- ・聖書はキリストがもう一度来られると言っています。本当でしょうか、何のためでしょうか。
- ・信じない人を裁き、信じた人を集めて神の国に導き入れるためであることをお覚えましょう。
- ・その日が来ることを待ち望み、喜びつつ希望と忍耐を持って日々生活ができるように導く。

## 〈ワーク〉

1. みんなの中で絶対死なない人はいるかな？
2. 死んだ後どうなるのかな
  - a) 消えてなくなる b) 天国か地獄に行く
3. イエス様を信じている人が持っている、本当の目標は何かな？ 考えて書いてね。
4. 使徒言行録 1:11 を書いて覚えて、みんなの前で発表意してみよう

〈答え〉1. いない 2. b 3. いろんな将来のことではなく、天国にいくことができることを目標にする。

## 〈目標〉

主イエスの再臨こそわたしたちの最大の希望であることを理解しよう。

## 〈指導上の心得〉

主イエスの再臨は世の終わりにおけるみわざである。しかし、それは私にとって、手の届かない遠いところにある事柄ではない。再臨を信じる信仰は、この世にあつて主イエスを信じて生きる私たちにとっても生きた、現実の力である。そのことを子供たちにはっきり教えたい。

## 〈展開例〉

けさの聖書箇所では、イエスさまご自身が、世の終わりに再びこの世においてなることを約束しておられます。イエスさまの御言葉は確かです。

今は天の父なる神様のところにおられるイエスさまは、その日まことに世をさばくお方としておいでになります。そのイエスさまの最後の審判によって、神様の正義と恵みのご支配が完成します。

私たちのまわりにも、正義が曲げられたり、弱い人々が苦しめられたりとうちがあるでしょう。また、この世界は結局戦争によって滅ぼされてしまうのではないかと心配したり、恐れたり、あるいはあきらめてしまっている人もあるでしょう。

けれども、神様の義と、世界を救うあわれみのみわざは、サタンのご支配と人間の罪にこそ打ち勝つのです。イエスさまは来られます。み国が到来します。その希望があるからこそ、私たちはこの世でたゆまずイエスさまのみ心を行って生きるのです。

問35の理解



ゴールの話。何のゴールか？  
私たちの人生のゴール。聖化の歩みのゴール。救われたわたしが教会と共に歩む行程のゴール。ゴールは再臨の日。天の国。

再臨とは何か？ 「イエスさまがこの世の終わりに再び来られること」だと説明できる生徒でも、「再び臨む」という言葉の意味からちゃんと分っているか確認するとよい。天の国については5月12日に問36の学びで扱うことを伝える。

聖書箇所を読み取り



再臨の日になにが起こるのか？  
本日のテキスト、その前後、あるいは知っている話から、再臨について分ったこと知ってることを話させる。

考えてみよう



わたしたちは再臨の日をどのように迎えるのか？ 「個人的終末」「世界的終末」という言葉とその意味は中学生には教えておきたい。個人的終末については5月5日問36の学びで扱うことも伝える。

イエスの再臨の約束を信じる生活とそうでない生活の違いを明確にし、暗証聖句を記入させて結びとする。

この世の終わりについて、生徒たち、また彼らの友達、どのように考えているのでしょうか？  
ノストラダムス騒動も終わり、21世紀も平和とは言えない始まりをした今、最近の中学生の考える世界の終わりとは、どんなものかしら？  
興味津々でリサーチに努めましょう。

月 日 「再臨の約束」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：マタイ 24：29～31

問35

☆再臨

毎日聖書を読もう

|                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 日<br>フィリピ<br>1:1-11  | 月<br>フィリピ<br>1:12-20 |
| 火<br>フィリピ<br>1:21-30 |                      |
| 水<br>フィリピ<br>2:1-11  | 木<br>フィリピ<br>2:12-18 |
| 金<br>フィリピ<br>2:19-30 | 土<br>フィリピ<br>3:1-11  |

☆この世の終わり

暗証聖句

(使徒 1：11)

テキスト

マタイによる福音書 25章1～13節

終末の教え集のなかで、「目を覚ましていなさい。」「忠実で賢い僕」でありなさい、と教えられます。「十人のおとめ」のたとえはそうした私たちの主をお迎えする備え方を教えるたとえとなっています。

### (1) 十人のおとめ

このたとえでは当時の結婚の運び方を用いて教えが語られます。花婿は主イエス・キリストを指し、それを出迎える十人のおとめがキリスト教会を指すのでしょうか。十人のうち五人が賢く、五人が愚かと描かれるのは、キリスト教会のうち半数は閉め出されるという意味ではなく、すぐ前の「忠実で賢い僕のとえ」で「いったいだれであろうか」と語られるのと同様に、だれもが自分をよく自己吟味をして備えるという意味での「五人五人」という分け方をしているのでしょうか。

ユダヤでは婚約は結婚を意味します。実際と同様生活はその後一年程してから始められますが、その始まりに際して婚宴の席が設けられるのです。十人のおとめは全員花婿を出迎えようと待っていますから、その点では何の違いもないのです。ただ13節で「あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」と言われているように、花婿が来ることはわかっていても、それがいつ何時なのかかわからないということをよく踏まえているかどうか「賢い」と「愚か」に別れていくポイントとなります。またその踏まえ方が主を出迎える「用意」(10節)に現れてくるのです。

### (2) 賢さと愚かさ

この「用意」は「目をさましていること」ではありません。十人のおとめは花婿の到着が遅いために「皆眠気がさして眠り込んでしまった」とありますし、そのことを取り上げてもしません。ま

た、愚かなおとめたちは油を持っていなかったわけでもありません。『花婿だ。迎えに出なさい』という叫ぶ声に「皆起きて、それぞれのともし火を整えた」のですから、愚かなおとめたちもちゃんともし火は着けたのです。ポイントは3,4節にあるように「油の用意をしていなかったか」「ともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていたか」が「賢い」「愚か」の違いとなります。この油は10節で「自分の分」と言われているように、それぞれが「自分の分」として用意しなければいけないものとして教えられています。

### (3) ともし火と油

花婿を出迎える上でともし火は絶対に必要です。それが出迎えるおとめの徴でもあるからです。世の人々と、そうではなく主を花婿として迎えるおとめの違いは、ともし火を持っているかどうかにあります。その意味でともし火は世の人と区別される諸々の信仰生活を指しているのでしょうか。しかし主を迎えるにはともし火の他に、主がいつ来られるか分からないことを踏まえてそのともし火の燃料となる十分な油が必要となります。ともし火が信仰生活という徴なら、油はその原動力をたえています。パウロは「霊の火を消してはいけません。」(テサロニケー5章19節)と言っていますから、信仰生活を燃やし続ける原動力は聖霊と言っていていいでしょう。

こうした信仰と聖霊はそれぞれ「自分の分」として備えることができるようにされていますが、他方他人から急遽『油を分けてください』と言って借りることはできません。それぞれが自分自身でともし火と油が自分には必要で、それをいつ来られても困らないように用意しておくことが勧められているのです。

|       |                       |
|-------|-----------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問35          |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問36    |
|       | ウェストミンスター大教理問答 問79～83 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問52       |

## 子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

## ウェストミンスター小教理問答

問36 この世で義とすること、子とすること、聖とすることに伴い、あるいはそれらから出てくる祝福は何であるか。

答 この世で義とすること、子とすること、聖とすることに伴い、あるいはそれらから出てくる祝福は、神の愛の確信、良心の平和、聖霊による喜び、恵みの増加、そして、それらのうちにあつて終りまで堅く保たれることである。

## 〈よき知らせが信仰の忍耐を生み出す〉

ウェストミンスター小教理問答問32は、有効召命を受けた者がこの地上においてあずかる祝福として義認、子とされること、聖化の三つを挙げています。そして問36では、これらの祝福にあずかった者は「神の愛の確信」「良心の平和」「聖霊による喜び」「恵みの増加」のうちにあつて「終りまで堅く保たれる」と述べています。

主イエスは「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と仰せになりました(マタイ24:13)。この忍耐は希望なき忍耐ではありません。主イエスの再臨の日に神が私たちの救いを成就し、世界によきことのきわみをもたらして下さることを知らされたところで生み出されるものなのです。つまり、主イエスが再び来たりたもうとのよき知らせを待ち望む希望が、おのずから信仰による忍耐を生み出すのです。

## 〈堅く保たれることの恵み〉

最後まで耐え忍ぶ者は救われると言われる時によく理解しておくべきことは、そこでの忍耐のいとなみも神の恵みに支えられたものだということです。信仰には確かに意志的な面がありますが、その信仰自体が神からの賜物なのです。

そして私たちが最後まで忍耐して救いをまっとうすることができるのは、神の私たちへの選びの恵みの確かさゆえです。神は一度キリストにあつて救いへと選ばれた聖徒らを、必ず終わりの日まで堅く保たれます。

救いの確かさは人間の側の行いや功績にもとづくのではなく、神の永遠からの選びのみ心と、選びの民のためになしとげて下さった救いのみわざそのものの確かさにもとづくのです。

確かに選ばれた者らも、時には信仰の確信が弱くされることもあれば、罪をおかすこともあります。(これはサタンと世の誘惑、彼ら自身になお残る腐敗ゆえであつて、神の恵みが不十分、不確かであるということではありません)。しかし神の永遠の選びの確かさは、私たちの側のそのような罪や弱さによって揺らぐものではありません。眞実なる神は聖徒らに日々悔い改めと信仰による服従の思いを与え、恵みの手段を備え、聖化のたたかいを励まし、一度置きたもうた恵みの中に彼らをあわれみ深く堅くとどめ、その中に主の再臨の日まで力強く保持したもうのです。この神の選びの恵みへの確信の中で、私たちはおのおの忍耐して自分の救いをまっとうするためにつとめるのです。

テキスト マタイによる福音書 25章1～13節  
 カテキズム 子どもカテキズム 問35

## 「再臨に備える」

〔単元のねらい〕

再臨の教えの第二回目。ここでは、再臨を待望する教会がどのような備えをするべきかを、「10人のおとめ」のたとえから説教する。この終末の希望が不鮮明になるとき、教会の倫理は緩む。教会が自己目的化し、戦闘の教会から偽りの勝利の教会へと退行する。愛が冷め、冷たい官僚的な教会となる。子どもらにとっても、終末の希望が、罪の行いや悪への勧誘から守ってくれる。また、終末時の審判の教説も、そのような福音的な威嚇の効用を持っている。先週と同様、賛美の歌を口ずさみつつ、悪（自分自身）と戦い、キリストの栄光を求めて歩むことへと招きたい。教会が、キリスト者一人一人がこの希望の教理、慰めの教理に生き生きと生きているかどうか。子どもらの前に立つ説教者、分級の教師に鋭く問われている。

今日も先週に続いて、問35を学びます。今一緒に、イエスさまがご自身の再臨のたとえをお話くださった聖書の箇所を覗きました。今日は、この10人のおとめのお話をします。イエスさまがいつ地上に戻ってくださるのか、僕たち私たちは知りません。勿論、先生達も知りません。その日は、神さまにお任せしていれば良いのだと先週学びました。さて、それならイエスさまが戻って来てくださるその日その時をどのように待っていることがイエスさまに喜ばれる、待ち方なのでしょうか。

イエスさまの当時の結婚式は、花嫁さんが花嫁さんの家に迎えに行くしきたりがありました。そして、花嫁さんの家では、花嫁さんの友人の女の人が門の外に立って、花嫁さんを出迎える準備をしていました。ある結婚式で、花嫁さんのお友達のおとめが、花嫁さんを出迎えることになりました。5人のおとめは賢かったとイエスさまは仰いました。他の5人は愚かだったと仰いました。どうして、それが分かるのでしょうか。

10人とも、花嫁さんがいつ迎えに来るのか、聞いていませんでした。知らなかったのです。さあ夜になってしまいました。10人のおとめはともし火をかかげて、門の外に立って待っているのです。ずい分、明るかったと思います。これだけ、

明るく照らされているのですから、たとえ夜だって花嫁さんも、迷ってしまう事はないでしょう。

さあ、いつ来るかな、いつ来るかなとわくわくドキドキしながら、10人のおとめは、待っていました。けれども、いつまでたっても来ません。だんだん、眠くなって来てしまいました。そして、一人があくびをすると、皆、大きなあくびをしてしまいました。もう、眠くて眠くてしかたがなくなりました。とうとう皆、こっくりこっくり居眠りをし始めてしまいました。そして、ついに、ぐっすり眠り込んでしまいました。

さあ、そのときです。「花嫁が来ました。さあ、出迎えなさい。」花嫁のお友達の声です。10人のおとめたちははっとしました。「いけない。眠ってしまった。」そして、地面に下ろしておいたともし火をさっと握り締めて立ち上がりました。ところが、愚かなおとめは、自分達のともし火が消えかかっていることに気づいたのです。「ああ、これは大変。どうしましょう。そうだ、油を分けてもらおう。」そして言いました。「あの……すみません。火が消えそうなのです。油を分けてください。」賢いおとめはとても気の毒そうな顔つきで言いました。「ごめんなさい。分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来てください。」すると、5人のおとめは、買いに出かけて行ってしまいました。

けれども、家から離れているその間に、花婿の一行は到着してしまったのです。そして、賢い5人のおとめは、花嫁の一行を迎え入れて、結婚のパーティーの準備をし始めました。そしてとても、楽しいパーティーが始まりました。テーブルの上には、美味しいご馳走が並んでいます。花婿さんと花嫁さん楽しそうにしています。

さあしばらくたって、あの愚かな5人のおとめが戻ってきました。けれども、ドアは閉められてしまっています。彼女達はドアの外にたって、どンドン叩きながら、「ご主人様、ご主人様、開けてください。」とお願いしました。しかし、ご主人様はきっぱりとこう言いました。「はっきり言うておく。わたしはお前達を知らない。」実は、この物語はたとえ話なのです。つまり、花婿はイエスさまのことで、10人のおとめは、教会のことで、

このたとえ話を終えられたイエスさまは、仰いました。「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」イエスさまは、この賢いおとめと愚かなおとめとの譬えを語って、僕たち私たちに何を考えて欲しいのでしょうか。10人のおとめは、10人とも同じようにともし火をかかれています。外側から見ると、いったい誰が賢くて、誰が愚かなのか分かりません。しかし、よく見てみると、賢い5人の方は、ともし火と一緒に油の用意をしていました。

花婿が到着するのが、1時間位だったら、ともし火だけであっても大丈夫であったかもしれません。けれども、2時間、3時間、そして4時間続けて火をともし事は決して出来ません。賢いおとめは、油を準備していたから賢かったのです。何故、油を準備していたのでしょうか。それは、「花婿は必ず来られる、けれどもいつ来られるかは、自分勝手に決めてはいけません。だから、いつ来ても大丈夫なように、準備しておこう。」こう考えていたからです。

さあ、それなら、僕たち私たちはイエスさまをお迎えするためには、どんな準備をすれば良いのでしょうか。一つは、ともし火をかかせることです。ともし火とは、信仰のことです。イエスさまは必ず僕たち私たちのところに戻ってきてくれると言う事を信じることです。二つ目は、油の用意です。油とは聖霊なる神さまのことで、信仰の火が燃えるためには、聖霊なる神さまをいつも求めることです。そして、それは、神さまの言葉をいつも聴き続けていること、いつも心を神さまに向けるお祈りを止めないことです。僕たち私たちの日曜学校は、神さまの言葉を聴いて、お祈りします。礼拝を捧げますね。これこそ、神様の前で賢いことです。ただし、ただ、来ていれば良いものではありません。イエスさまが大好きで、心を込めて、お話を聴いて、お祈りすることこそが、あの賢い5人のおとめだったことを先生と一緒に忘れないようにしましょう。

---

#### 今週の暗唱聖句

だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。

マタイによる福音書 25章 13節

---

〈目標〉

イエス様のことを忘れないように、聖霊を送ってくださいとお祈りする。

〈導入〉

- 「お家に来て誰かが来るのを待っていたことあるかな？」 -
- 「大好きなお友達が来るのを待っているのはとっても嬉しいね。でも・・・もし、朝からずっと待っているのに、お昼になっても夜になっても来なかったら？」 -
- 待ちくたびれてしまうね。
- イエス様は、必ず来られるけれど、いつ来られ

るかにはわからない。私たちは、ずっと待っていたら本当に来るのかな？と心配になったり、イエス様に来られることを忘れてしまうかもしれない。でも神様は、私たちのそういう弱いところも知っていてくださって、私たちがイエス様を忘れないように助けてくださる「聖霊」を送ってくださっていることを話す。

〈展開例〉

うたをうたおう！

「わたしはちいさいひ」

・・・『ふくいんこどもさんびか』86 ばん

# わたしはちいさいひ

1. わたしはちいさいひ ひかりましょ  
 わたしはちいさいひ ひかりましょ  
 ※ ひかれ ひかれ ひかれ

2. かくれましょ いいえ ひかりましょ  
 かくれましょ いいえ ひかりましょ  
 ※ くりかえし

3. あくまがふいても ひかりましょ  
 あくまがふいても ひかりましょ  
 ※ くりかえし

4. 教会の入り口の前を  
 歩いて  
 うたう  
 4. ぜんちにひかりましょ  
 ぜんちにひかりましょ  
 ※ くりかえし

5. 主のきましまで ひかりましょ  
 主のきましまで ひかりましょ  
 ※ くりかえし

楽器を借りた)

振り付けをつけて

たむびましょ



イエス様がもういちど  
 こられる日、天の国をめざして  
 うたいつ あゆみます。



〈祈り〉

天のお父さま。イエス様を持つ心のともしびが消されないように、助けてください。アーメン。

〈目標〉

再臨を信じる信仰を燃やし続けるために必要なことは何かを学ぶ。

〈やってみよう〉

「クイズに答えてイエス様のところへ急ごう！」  
140ページをご覧ください。

〈お話を振りかえる〉

- ・賢いおとめとおろかなおとめは、何が違ったのかな？

花婿がいつ来ても火が灯せるように油を準備していたか、そうでないか

- ・花婿が来た時、賢いおとめとおろかなおとめはそれぞれどうなったかな？

賢いおとめ・・・きちんと花婿を迎えて祝宴に入れられた

愚かなおとめ・・・油が足りなくなり、

買いに行っている間に花婿が来てしまい、戸を閉じられて祝宴にいれてもらえなかった。

- ・先週イエス様が再び来られることのお話を聴きましたね。このお話はイエス様が来られる時の事の譬え話です。もちろん、花婿はイエス様です。では、賢いおとめはどんな人達のことでしょう？

イエス様を信じてこの世を生きた人達

- ・では、賢いおとめが持っていた油は、なんの譬えでしょう？

イエス様を信じることをできる様にしてくださる聖霊なる神様のこと、そして、聖霊なる神様を求めるために、お祈りしたり、聖書を讀んだりすることです。イエス様がいつ来られても良いように、賢いおとめのように、いつも「油」を持って待っていきましょう。

- ・正しいこたえの方に進んでゴールを目指してください。

- ・適当な大きさに拡大して使ってください。

- ・時間があれば塗り絵として遊んでください。

## 〈目標〉

再臨の日に備え、イエス様を信じ、御言葉に聴き従うように導く。

## 〈指導上の心得〉

恐れ慌てて備えるのではなく、イエス様を信頼して、静かにそして着実に備えるよう導く。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・再臨は、いつどのようなときに来るかを考え、みんなで話し合ってみましょう。
- ・再臨は、盗人のようにそして突然にやってくると言われている。ではそのための備えはどうしたら良いだろうか、話し合ってみましょう。
- ・再臨の日が来たら、もうやり直しがきかない。手遅れにならないようにイエス様を信じ、聖霊なる神様の導きを受け、御言葉に聴き従って歩むように導く。

## 〈ワーク〉

1. 私たちが天国に入るのはいつかな。
  - a) 死んですぐ b) そんな時は来ない
  - c) イエス様がもう一度来られるとき
2. イエス様がもう一度来られるときはいつなんだろう。みんなは知ってる？
3. イエス様がもう一度来られるときのためにみんなはどんな準備をすればよいのかな。考えて（ ）を埋めてね。  
イエス様が来られるときのために、イエス様を（ ）、（ ）を読んで、（ ）に従って行く。
4. マタイ福音書 25:13 を書いて覚えましょう。

〈答え〉1. c 2. 知らない 3. 信じて、聖書、イエス様

## 〈目標〉

主イエスがいつもおいでになってもよいように、信仰の備えをして歩もう。

## 〈指導上の心得〉

再臨の信仰は、この世における私たちの信仰を引き締め、ととのえるものである。再臨の信仰に生かされているとき、私たちの地上の歩みはふさわしい緊張感と慎み、また世における責任意識とを帯びるものとなることを教えたい。

## 〈展開例〉

イエスさまが再びこの世においでになるのはいつなのか、世の終わりはいつ来るのか。そのことは私たち人間があらかじめ知ることができる事柄ではありません。そのことはただ神様だけがご存知です。

けれども私たちは、けさの聖書箇所5人の賢いおとめたちのように、イエスさまがいつおいでになってもよいように、イエスさまをお迎えする用意を整えておくことはできますね。イエスさまをお迎えする用意とは、私たちがいつもイエスさまから目を離すことなく、しっかりとイエスさまを仰いで歩む歩みをかさねていくことです。

先週、イエスさまが世の終わりに来られることは、この世を正しく審判なさるためだということを確認しました。イエスさまを信じる私たちは、もちろんみ国に入れていただけますが、しかしイエスさまの審判を免れるというわけではありません。私たちもその日、イエスさまのみに立ちます。そのとき、よい僕だとイエスさまにおっしゃっていただけるように、今からよく備えていきましょう。

聖書箇所を読み取り



何のたとえか？ 24章36節「その日、その時は、だれも知らない」だから、忠実な僕と悪い僕、タラントのたとえと共に10人のおとめのたとえが語られる。

愚かと賢いのかれ目は？ 油とは何か？ 油を用意しているとはどういうことか？

問35の理解



聖霊と共に歩む人生。「五 聖霊なる神さま」の項で学んでいることを20ページを開いて確認する。

聖化の歩みは聖霊に満たされて歩むこと。ゴールが天国。いつ来るか明らかにされないが必ず来るゴールに備え、聖霊に満たされて歩む。

歌いつつ=讚美しつつ。

キリスト・イエスの日をめざし、  
待ちながら、  
急ぎながら、  
教会と共に歩みます  
(中部中会設立40周年記念宣言  
「終末の希望」より)

考えてみよう



聖霊に満たされた生活とは？

どうしたらそのような生活が送れるか？ 4月7日の学び(恵みの伝達の外的な普通的手段=聖言葉・礼典・祈り)を思い出させるとよい。

月 日 「再臨に備える」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：マタイ 25：1～13

問35

☆十人のおとめ

毎日聖書を読もう

|                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 日<br>フィリピ<br>3:12-4:1 | 月<br>フィリピ<br>4:2-9   |
| 火<br>フィリピ<br>4:10-22  | 水<br>コロサイ<br>1:1-8   |
| 木<br>コロサイ<br>1:9-23   | 金<br>コロサイ<br>1:24-29 |
| 土<br>コロサイ<br>2:1-5    |                      |

☆聖霊に満たされて歩む

暗証聖句

(マタイ25：15)

テキスト

ヨハネによる福音書 11章 17～27節

亡くなって葬られたラザロをイエスが墓の中から復活させた奇跡物語です。11章1～44節まで続く長いお話で、復活させたみ業の前に、この知らせを聞いたイエスの行動、弟子たちへの教え、またマルタやマリアとのやりとりが長く描かれていますから、復活のみ業そのものだけでなく、それに伴う真理を教える物語となっています。41～42節、「彼らに信じさせるためです。」参照。

#### (1) ラザロの葬り

ラザロはマルタとマリアの兄弟で、彼女たちはルカ10章でイエスの訪問を受けていますし、2節でも「髪のもで主の足をぬぐった女」と紹介される程、イエスとは親しい関係だったようです。しかし彼女たちはこの出来事を通して更にイエスとの関係とその認識を深めることになりました。

イエスが「行ってご覧になる」時、17節「墓に葬られて既に四日」と39節「四日もたっていますから、もうにおいます。」とされていますから、屍の腐敗が始まる程の時間が経過しています。ベタニアという村の名前と距離が説明されているのはイエスはその知らせを受けた時、時すでに遅しということではなくて急げば間に合うことを記したかったのでしょう。しかし、イエスは6節、「聞いてからもなお二日間同じ所に滞在された」のです。そしてイエスはこの知らせを聞いた時、4節「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」と説明していますから、イエスにとっては始めからこの出来事の意味と目的は承知済みであり、41節で「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言っていますから、信じた通りの栄光を見せることに重点があったようです。

#### (2) 「わたしは復活であり、命である。」

とりわけマルタやマリアとのやりとりの中で、イエスは「わたしは復活であり、命である」と宣言されますから、イエスは御自身を信じることの真実な意味を教えられました。

マルタとイエスとのやりとりの中で、イエスが「兄弟は復活する」と言われるとマルタが「終わりの日の復活の時に」と言います。それに対してイエスが「(直訳)わたしはその復活であり、命である。」と教えられますから、ここでイエスが教えたかったことは、復活を終末完成時の業として未来に見てとるのではなく、今メシアを信じるこの現実の中で受け取ること、またメシア・イエス御自身こそその復活そのものであり、「わたしを信じる」というイエスとの関係が復活をもたらしていること、そして最後に「復活」は「命」でもあり、「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」のだということです。すなわち、もはや死を味わうことなく、真実な意味で生きることを味わいます。これらの現実を味わうことこそ、「主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」という信仰告白の真実な中身なのです。

マルタやマリアが「もしここにいてくださましたなら」と言うのに対して、イエスが「信じるか」と投げかけますが、これは一緒に「いてくださる」という信頼よりも「わたしを信じる」という、より深い人格的な信頼へと促しているように思われます。イエスこそ「復活」であり「命」であるという信仰はこの深い人格的な結びつきの中でこそ確信されるものなのでしょう。

|       |                    |
|-------|--------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問36       |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問37 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問1     |

## 子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができるのです。

ウェストミンスター小教理問答

問37 信者は死の時、どんな祝福をキリストから受けるか。

答 死の時、信者の靈魂は、全くきよくされ、直ちに栄光に入り、その身体は、なおキリストに結合されていて、復活の時まで墓の中に休む。

## 〈キリスト者の死の意味〉

聖書によれば、人の死は罪の報酬です（ローマ 6:23）。しかしイエス・キリストは私たちの罪を十字架の上に贖い、取りのけて下さいました。それで私たちは、もはや罪ゆえに死ぬ者ではなく、罪と死の法則から解き放たれ、この地上にあってすでに永遠の命の祝福のもとにある者です。十字架と復活の主イエスにあって「死は勝利のみ込まれた」（コリント一 15:54）のです。

しかしキリスト者も地上における死を経験することは、厳然たる事実です。この事実をどのように考えるべきでしょうか。

確かにキリスト者も死にますが、その死は根本的に意味を転換されているのです。すなわちキリスト者にとっては、死は減びではなく、刑罰ではなく、聖化の完成の時です。「死にあって信者の靈魂は全くきよくされ」るのです。死は地上の歩みにおける最後の、そして最大の試練ですが、この試練を通してはじめて、私たちの聖化の歩みは成就するのです。

主イエスも死にさいしてゲッセマネと十字架の試練を経験なさいました。それは栄光への通過点でした。私たちもある意味で主イエスご自身の死をなぞる死を通るのです。死の試練を経てまさにみ国に迎え入れられる者にふさわしい装いをとどえられるのです。

## 〈直ちに栄光に入り〉

死によってキリスト者の靈魂は完全にきよめられ、ただちに栄光に入ります。十字架上で悔い改めた犯罪人に、主イエスは「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ 23:43）と仰せになりました。またパウロも、この世を去ることがすなわちキリストと共にいることであると言います（フィリピ 1:3）。ローマ・カトリックの煉獄思想のように、天のみ国への過程において中間的な場所をもうけることは、聖書にかなう考えではありません。

さらに、キリストによる救いは魂と体の双方の救いであることを覚えることが重要です。主イエスは魂のみの救い主ではなく、私たちの霊肉をも贖われる贖い主です。私たちの全人を新たに下さるお方です。そこでウ小教理問 37 は「体」についても言及します。

死においても私たちは、霊肉ともにイエス・キリストと結ばれています。救いの完成は復活の時（ウ小教理問 38）にもたらされます。キリスト者の体はその時まで「墓の中に休む」のですが、復活の新しい体を持つ間も、靈魂とともに体も「なおキリストに結合されていて」るのです。すなわち全人的に主イエスとの関係を失うことなく、神に造られ贖われたかけがえのない者としてあり続けるのです。

テキスト ヨハネによる福音書 11章 17～27節  
カテキズム 子どもカテキズム 問36

## 「死のときの祝福」

〔単元のねらい〕

死後の世界。子どもたちにとって、大変興味深い主題を取り上げる。未知の世界に対する関心、怖いもの見たさ、好奇心から興味を示す子らも多いはずである。この世の宗教、オカルト、心霊現象などは、そこに付け入っている。そして、子らの心を主イエス・キリストから離そうと企む。背後にあるサタンの働きを見抜かねばならない。学校でも、家庭でも、きちんと教えてくれはしない。ここでこそ、我々の福音の出番である。子どもカテキズム問36は暗唱するには長い。しかし、子らとともに、ていねいに味っていただきたい。そして、また真剣に死後の世界を恐れる子らもいることを忘れてはならない。そのような子こそ、ここで主イエス・キリストの福音を鮮やかに提示できれば、信仰の土台が定まることとなる。

皆の中で、「死んだ後はどうなるの」って、誰かに聞いてみたことのあるお友達はいますか。もしかすると、テレビとか本なんかで、あるいは学校の先生やお父さん、お母さんから、死んだ後は「これこれこうなるんだ」と聞いた事があるお友達もいるでしょう。けれども、それは、全部、確かなことではありません。そう考えている人がいるだけです。「人は、死んだらまた新しく生まれ変わって、また地上に戻るのです」と教えてくれる人がいます。先生も子どもの頃、人間は死んだら、生まれ変わってまた地上に出てくる、というお話を聞いたことがあります。けれども、誰でも人間に生まれ変わるのではなくて、生きている時、善いことをした人が人間に生まれ変われると聞きました。けれど、悪い事をした人は蟻やゴキブリになってしまうのだそうです。たとえ人間に生まれ変わっても、苦しい目に会って死んでしまうそうなのです。これって、本当のことでしょうか。先生は、はっきりと言います。そんなのは、嘘です。空想話です。

けれども、「死んだ後はどうなるの」って言う質問はとてとても大切な質問です。それなら、死んだ後の事は、誰に聞けば良いのでしょうか。誰が教えてくれるのでしょうか。それは、命の造り主なる神さまからです。命の造り主であられる神さまから、教えていただかなければ、分かるは

ずがありません。一度死んだけれども、お甦りになって今も生きておられるイエスさまから聞く意外にありません。死んだ事のない人間が、誰でも死んでしまう人間が、「死んだ後はこうなる、あなる」なんて、分かりもしないことを分かったように、知らないことを知っているように、見たことのないものを見てきたように教えるなんて、本当はできないはずで、してはならないはずで

さて、ベタニアという村にラザロさんという若い男の人がいました。イエスさまにも親しくしていただいていた。けれども今、とても重い病気で苦しんでいました。彼の姉妹のマリアさんとマルタさんは、イエスさまのところへ人を送って、「ラザロが病気です。」と伝えました。けれども、イエスさまは「この病気は死で終わりません。」と仰って、すぐには駆けつけられませんでした。実は、もうこのとき、イエスさまはこのラザロが死んでしまっていることをご存知だったのです。ラザロがお墓に入って既に四日たってしまったとき、イエスさまはラザロのところに行きました。多くの人々がマルタとマリアが悲しんでいる家を訪れ、慰めていました。マルタさんは、イエスさまに言いました。「イエスさま、もしも、死ぬ前に駆けつけてくだされば、ラザロは死ななかつた

はずです。イエスさまが神さまに願う事は、何でも、かなえられると信じています。」イエスさまは、言いました。「マルタ、あなたの兄弟は復活します。」マルタはすぐに答えました。「イエスさま、世界が終わる日には、復活することは私も知っています。そして、イエスさまは何度も、イエスさまを信じる人は、終わりの日に復活すると仰ったイエスさまのお話を信じています。」

イエスさまは、こうマルタさんが答えられたので、このように仰いました。今日の暗唱聖句です。みんなで唱えましょう。「私は復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は誰も、決して死ぬ事はない。このことを信じるか。」こう仰るとイエスさまは、ラザロのお墓に向かって進まれました。お墓は、洞窟の中にあります。その洞窟は大きな石でふさがれていました。ところが、イエスさまは「その石を取り除きなさい。」と仰いました。マルタさんは言いました。「主よ。四日もたっていますから、もう臭います。」心臓が止まっても、1時間くらいなら息を吹き返す人もいます。そして、人の体は、死んだら、どんどん腐って行くのです。一日、二日だったらまだ臭いませんが、四日もたったら……。人々は、今イエスさまが仰ったので、仕方がなく石を取り除けます。すると洞窟の中から、やっぱり腐った臭いが放たれました。しかし、イエスさまは、洞窟の中に向かって大声で叫ばれました。「ラザロ。出て来なさい。」すると、どうでしょう。手と足を布で巻かれたま

まのラザロが出て来たのです。

腰を抜かすほど驚くって言いますが本当に、腰を抜かしてしまった人がいたかもしれません。イエスさまは、何故、ラザロを甦らせたのでしょうか。それは、イエスさまが父なる神さまから遣わされた、真の神さまであられることをお示しになるためでした。イエスさまが復活の命そのものであることを周りの人々にお示しになり、信じさせるためでした。

人間は、誰でも、一度は死にます。けれども、人間は死んでそれっきり、何にもなくなってしまうのではありません。死んでおしまいではありません。僕たち私たちの魂は完全に聖くされ、天のお父さまとイエスさまのところで、つまり、天の国に運ばれます。そこで、神さまを喜び賛美するのです。しかも、臭くなってしまった体、火で燃やされてなくなってしまった体も、イエスさまが復活なさったように、復活させられます。元の体ではなく、きっと自分でも信じられないような、新しい体に甦るのです。先生も天の国での様子、復活する体のことを詳しく説明することはできません。けれども、イエスさまを信じた人は誰でも、今も、死んだ後も、イエスさまと離れ離れになることはないのです。なぜなら、イエスさまが復活の命で、信じる僕たち私たちとイエスさまとは結ばれているからです。イエスさまは今日、僕たち私たちに、心を込めてたずねておられます。「あなたはこのことを信じますか。」

---

### 今週の暗唱聖句

イエスは言われた。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

ヨハネによる福音書 11章 25 ~ 26 節

---

〈目標〉

幼い子供たちの死への恐怖をなくし、天国がすばらしく、喜ばしいところであることを知る。

〈導入〉

「天国ってどんなところだろうね？」  
 「お花がたくさん咲いているのかな」  
 「きれいな川が流れていて、きっと木にはたくさん実がなっているよね」  
 「小鳥も神様を賛美してるね」  
 など自由に思い思いのことを話し合う。

〈展開例〉

「今週と来週の二週で天国を製作する。」

材料／50 cm×50 cm位の平らな箱  
 (お菓子やタオルなどの箱)  
 クレパス、マジックなど  
 色画用紙、折り紙など

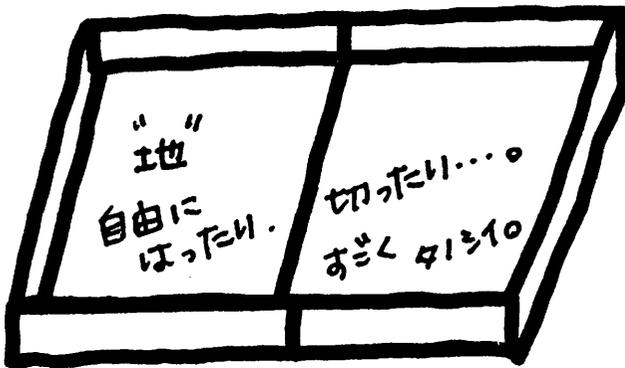
- ① 箱の蓋と底をつなげ、箱庭のように準備しておく。
- ② 地の部分から、折り紙を貼ったり、色をぬったりしてつくる。
- ③ 木や花を立体的に作り、地に貼っていく。

さあ ~~今週~~から、2wにわたり  
 大きな作業をします!

♪ まもなくかなたの♪を  
 ローズみながら、たのしく  
 ひとり ひとりに声かけしながら  
 すすめて いきましょう。

『ふくいんこどもさんびか』  
 57番「まもなくかなたの」

1. まもなくかなたの  
 ながれのそばで  
 たのしくあいましょう  
 また ともだちと  
 かみさまのそばの  
 きれいなきれいなかわで  
 みんなとあつまるひの  
 ああ なつかしや♪



人数によって箱の大きさを加減してください。

〈折り〉

すばらしい天国を用意してくださってありがとうございます。アーメン。

## 〈目標〉

子どもたちは、まだ、死に直面していないかも知れない。しかし、死ということは知っているものです。その子どもたちに、信者が死ぬとどうなるのかを教えましょう。

## 〈考えてみよう〉

① もし家族の人やお友（ベツトなどでも）が死んでしまったらどんな気持ちになるかな？

・ 悲しい気持ちか、それとも嬉しい気持ちになるのか考える。（ラザロの死後マルタとマリヤはどんな気持ちだったかと言うことから考えていきましょう）

② 人（やベツト）が死んだらなぜ悲しいのかな？

・ 今まで一緒にいたのに、一緒にいれなくなったり、一緒にお話しもできなくなるし、一緒に遊んだりできなくなると言う別れの悲しみがあるから。

③ イエス様は「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」とおっしゃられました。それはどういうことだろう。

・ イエス様を信じる人は死なないのでしょうか？ そうではない。イエス様はイエス様を信じる人は死んだ後、イエス様が再び来られるときに復活するのだということを約束なさったのです。

・ イエス様を信じるお友達一人一人も、この約束をしてもらえます。

④ 人間は必ず死ぬし、それは悲しいお別れです。でも、イエス様を信じる人の死はただ悲しいだけではないんですね。何ででしょう。

・ 教会の仲間がたくさんいるから。

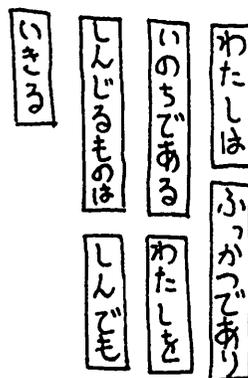
・ イエス様が復活すると約束して下さっていて、復活したとき、イエス様を信じる私たちはもう一度イエス様の前で会うことができるから。

・ イエス様を信じる人たちが死ぬということは、イエス様の約束が本当に起こる時なのです。イエス様を信じる人たちは必ず復活する、その希望が約束されていることを私たちも知ることでできる時なのです。

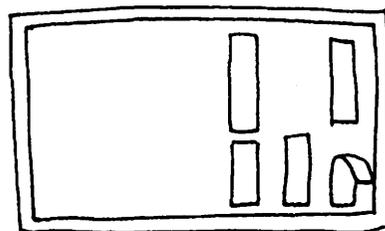
## 〈やってみよう〉

「暗唱聖句カードを作ろう！」

・ まずみんなで、御言葉のカードを作ろう。御言葉のカードには、一言ずつ書いておきます。



・ 次に、そのカードを黒板に貼ったり、机の上に並べよう。そして、覚えた順にカードをはずしていってください。



※今日の箇所はちょっと長いから、前半だけでも挑戦してみよう。

## 〈目標〉

信者が死んでも、罪から解放され永遠の命に至る祝福があることを覚え、希望を持つように導く。

## 〈指導上の心得〉

肉体の死と魂（霊）の死があることを教え、体が死んでも、霊において生きられることを伝える。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・死ぬことがなぜ恐ろしいのだろうか、死んだとき、そこでどんなことが起こるのだろうか、みんな考えて、話し合ってみよう。
- ・「死んでも生きる」という御言葉の意味を考えてみよう。
- ・信じない者には恐ろしい死であるが、信じる者は消められて完全になり、栄光の姿に変えられる、救いの完成する希望のときであることを覚え、イエス様を信頼して生活しよう。

## 〈ワーク〉

1. なぜ、人間は死ぬことになってしまったのでしょうか？
  - a) 人間が神様に背き、罪を犯したから
  - b) もともと死ぬ運命だったから
2. イエス様を信じる者は、なぜ死なないと言えるのでしょうか？
3. イエス様を信じている人でも実際には亡くなったたりするけれども、死んだ後はどうなるのでしょうか？ またどこへ行くのでしょうか？
  - イ) どうなる → ( )
  - ロ) どこへ行く → ( )

〈答え〉1. a 2. イエス様が私たちの罪を負って死んで復活してくださったから 3. イ) 完全に消められる ロ) 天国・イエス様のところ

## 〈目標〉

キリスト者にとっての「死の意味」を知る。

## 〈指導上の心得〉

信じた者も、死ぬのは何故なのか。主イエスを通してのみ、「刑罰としての死」から「聖化の完成としての死」へと、意味が変化することを、共に考えたい。

## 〈展開例〉

(1) 主イエスから離れた死というものが、どういものであるかを話し合う。死ぬことについて、死んだらどうなるのか、考えたことがあるのか。死について、どんなことを聞いたり、読んだりしているか話し合う。

## ☆ポイント

- ・主イエスから離れた「刑罰としての死」の悲しさ、おそろしさに導く。

・死んで終わりではないこと。いじめによる自殺などのような、逃避・救いとしての死が間違っていることも確認したい。

(2) 「死」について、聖書にどんなことが書いているかを調べる。

ローマ 6:4、7～9、23

コリントー 15:54～56

フィリピ 1:21

テサロニケー 4:13、14

ヨハネ 11:25

(ノートやカードなどに書き写してもよい)

## 〈祈り〉

父なる神さま。

イエスさまによってわたしたちは

生きることも、死ぬことも

おそれないでよいことを

教えてくださってありがとうございます。



話し合おう

死について話し合おう。死ぬと言うことはどういうことなのだろう？ 臨終やお葬式に立ち会ったことはある？ 身近な人が死んだときどう感じた？ 自分の死について考えたことはある？

もし様々な意見が出たら、子どもの話を聞くだけで終わってもかまわない。その場合、クリスチャンは「死の時、キリストからどんな祝福を受けますか？」と質問することができる幸いを得ていること、「人の死＝個人的終末」であることを確認し、次週へつなぐ。



聖書箇所を読み取り

マルタが信じていたことは何か？ イエスさまがマルタに信じるように言ったことは何か？ この二つはどう違うのか？ 39節のマルタの言動に着目。イエスさまを信じていると言いながら、この世の理に沿った行動を取り続けている。私たちの信仰はマルタに似ていないか？ ラザロの復活を通してマルタが得た信仰とは何か？ そして、あなたはこのことを信じるか？

2006年、日本キリスト改革派教会創立60周年を記念して、「終末に関する信仰の宣言」を採択する準備が進められています。

月 日 「死のときの祝福」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：ヨハネ 11：17～27

問36

☆死について

☆「このことを信じるか」

毎日聖書を読もう

|                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 日<br>コロサイ<br>2:6-15  | 月<br>コロサイ<br>2:16-23  |
| 火<br>コロサイ<br>3:1-11  |                       |
| 水<br>コロサイ<br>3:12-17 | 木<br>コロサイ<br>3:18-4:7 |
| 金<br>コロサイ<br>4:2-9   | 土<br>コロサイ<br>4:10-18  |

暗証聖句

(ヨハネ11：25～26)

テキスト

ヨハネの黙示録 21章1～8節

神の国の完成、完全な成就を描く箇所です。黙示録では19、20章と最後の審判が語られ、21～22章5節まで新天新地が描かれます。21章1～8節までが新天新地を、9節以下は2節で見た「聖なる都、新しいエルサレム」の姿が描かれます。

### (1) 新天新地

新天新地を語る大切な箇所です。

第一の特徴は、天のみ、地のみという片方ではなく、また地が去り天が到来するというものではありません。天も地も共に更新されます。ですから現在の天も「最初の天」と呼ばれます。つまり現在の天も地も「最初の」もので更新時には共に「新しい」ものとなるのです。

「新しい」というからには「最初」のものとは格段の違いがあるのでしょうか。パウロは人の復活のことを語る中で「天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています」(コリント一 15章40節)と語っています。続けて「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」(同42～43節)蒔かれるというからにはその開花も最初から計画にあるのですが、その最初と最後では大きな違いがあると言いたいのです。天も地も同様に最初からありますし、これは完成されたときにも同様にあります。しかし「最初」のものとは違う「新し」さがあります。

また5節で「万物を新しくする。」と宣言されますから、すべてのものが更新されます。6節「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めてであり、終わりである」と言及されて万物の創造者が、同じく万物の完成者でもあるのです。その意味で主は「初めてであり、終わりである」のです。

また、第二に「もはや海もなくなった」ことに

あります。海はオリエントの昔から人を飲み込んでしまう恐ろしいものとして考えられてきました。20章13節では「海」が「死と陰府」と並べられ、それぞれに「その中にいた死者を出し」「彼らはそれぞれに自分の行いに応じて裁かれ」ます。人を脅かす「海」という存在は裁かれ、新天新地にはその存在の場が与えられません。

### (2) 新しいエルサレム

2～4節では「聖なる都、新しいエルサレム」の到来とその姿が描かれます。詳細は9節以下に描かれますが、ここでは3、4節で「涙をことごとくぬぐい取ってくださる」救い、また7節以下「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐ」恵みが語られています。

新しいエルサレムは第一に「着飾った花嫁のように用意が整えられて」います。第二に「神のものを離れ、天から下って来」ます。この都は地上の教会の栄光の姿ではありますが、あくまでもそれは「天から下って来」るもの、すなわち神が整え、与えるものとして確立されます。

「そのとき」神と人の生活が確立されます。「神が人と共に住み、人は神の民となる。」そしてこれも「神は自ら人と共にいて、その神とな」ることで実現されます。そうしてこれは「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」救いとなります。「死はなく、悲しみも嘆きも労苦もない。」まさに慰めに満ちた世界なのですが、これは決して単なる理想郷を語っているのではありません。なぜなら現実の人の涙をよく知っているからです。「悲しみも嘆きも労苦も」よく知り、戦いがあることもよく知っています。ですから7、8節で「勝利を得る者」と「不信仰な者」があげられるのです。信仰を神から与えられた者たちが現実の信仰の戦いを戦いながら、その完成を仰いでいるのです。

|       |                    |
|-------|--------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問36       |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問38 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問57、58 |

## 子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができるのです。

## ウェストミンスター小教理問答

問38 信者は復活の時、キリストからどんな祝福を受けるか。

答 信者は復活の時、栄光あるものによみがえらせられ、さばきの日に、公に受け入れられ、無罪を宣言され、永遠に全く神を喜ぶことにおいて、完全に祝福される。

## 〈復活の時の祝福〉

聖書は終わりの日の人間の復活について語っています。すべての人はかの日に、魂と体とが再び結び合わされて、再臨の主イエス・キリストの審きを受けるため、み前に立ちます。

信じない者の復活は、彼の罪と不義が神の義によって正当に審判されることによって、神の正義がほめたたえられるためのものです。

しかし信者にとっては、復活の時は救いの完成・成就の時です。信者の復活は、霊肉ともに聖霊によって新しくされる命への復活です。その確証は、信者の復活の初穂としての主イエスご自身の復活です。

信者は地上にある間も、主イエスの贖いによってすでに罪と死の法則から解き放たれた者として、復活の命の先取りの祝福をいただいて歩みますが、その義認の恵みが公にされるのは最後の審判のおりです。信者はその時再臨の主イエスから「公に受け入れられ、無罪を宣言され」るのです。

それはまた、神が彼をくすしいみ旨によって、主イエスにあって永遠に救いのうちに選んでおられた、そのみわざの確かさが証明される時であり、また神がこのご計画にもとづいて、有効召命にあ

ずからせて下さった日から復活の日の日までかずかずの祝福によって彼を守り導き、救いをまっとうして下さった大なる恵みがたたえられる時でもあるのです。

## 〈人の目的の完成〉

復活の日に信者に与えられる新しい体は、もはや死ぬことも朽ちることもない、完全に聖化された栄光の体です。またこの体は、主イエスご自身の復活のみ体に似たものとなります。救いが霊肉ともに（「全人」として）主イエスの贖いにあずかり、主イエスと結び合わされることであるとすれば、まさに復活の日にこそ信者の救いは完成し、成就するのです。

そのように栄光あるものとされた聖徒らは、「永遠に全く神を喜ぶことにおいて、完全に祝福されます。ウェストミンスター小教理問答は問1で、人のおもな目的は神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことであることを記していましたが、復活の時にこそこの目的が完全にとげられるのです。この地上にあっては、主の日の礼拝はみ国の「前味」にすぎませんが、かの日には新しくされた天と地にあって、私たちの神礼拝は文字通りまことの祝宴となるのです。

テキスト ヨハネの黙示録 21章1～8節  
カテキズム 子どもカテキズム 問36

## 「復活のときの祝福」

〔単元のねらい〕

問36の二回目、第二部「信仰の道」の最後の問答となる。問1で明らかにされた「喜び」は、問36の「喜び」で閉じる。永遠に神を喜ぶ事が、救われた私共に与えられた特権である。本カテキズムでは、キリストと結ばれていない死者の永遠の滅び、最後の審判には言及していない。子らに、死後の審きの「恐怖」を語って、信仰へと導くことへの「警戒心」があるからである。しかし、本テキストにおいて記されている「火と硫黄の燃える池」と言う表象によって威嚇しておられる神の激しい救いへの招き、前週に聞いた主イエスの「信じますか」「信じなさい」と言う激しい救いへの招きと同じ愛の心で、この威嚇がなされていることを受け止めて、永遠の喜びへの招待として語りたい。

問36をもう一度読みましょう。「死んだ後はどうなりますか。」「死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。」天の国ってどんな国なのでしょう。

今日読んだのは、聖書が一番最後にあるヨハネの黙示録です。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。」天国とは、神さまと人が一緒に住む場所です。神さまが、僕たち私たちの真ん中にいてくださる場所です。僕たち私たちは、三位一体の神さまの国の民、住民となるのです。そこでは、天のお父さまが「彼らの目の涙をことごとく拭い去ってくださる」のです。

皆は悲しくて悲しくて涙を流したことがありますか。お父さんやお母さんに死なれてしまった人、お友達にいじめられた子、病気で苦しい寂しい思いをしたことのあるお友達、一人ぼっちで枕を涙で濡らしたことのあるお友達がいるかもしれません。けれども、天国では、流した涙は全部、拭われます。地上の生活がどんなに悲しくて、辛くて、苦しくて、痛かったとしても、もう、涙を流すことはありません。涙を流す理由、原因が天の国には何もないからです。喜び、感謝、賛美だけがあるのです。いつも、皆で神さまを中心にして賛美を歌っています。心と声がびったりあって喜びの歌を歌っています。一人一人の心はばらばらではないのです。みんながひとつの心で、仲良く歌っ

ているのです。愛し合っています。いじめる人も、いじめられる人も一人もいません。叱られる事もあります。つまり「悲しみ・嘆き・労苦」という僕たち私たちの心や体を苦しめるものは何もないのです。なぜでしょう。天の国には、「罪」が全くないからです。イエスさまは、僕たち私たちが天の国に入れてくださるために、僕たち私たちの罪を十字架によって、取り除いてくださいました。十字架のイエスさまを信じる人は、罪が赦されて神さまの子です。

聖書には、天国に入れるのは、勝利した人、勝った人ですと、記されています。それなら、何に勝った人なのでしょう。何と戦って勝利した人なのでしょう。けんかに強い人ですか。かけっこの競争ですか。食べる早さを競って勝った人ですか。もちろんそうではないですね。それなら、頭が良くて、テストで100点満点取れた人ですか。そうではありません。それなら、心が優しく、人に親切にした人でしょうか。悪口を言われても、ぐっと我慢して、けんかしなかった人ですか。ちょっと近い感じもしますが、そうでもありません。天国に入れるのは、完全に罪に打ち勝った人です。どんな罪の誘惑にも負けないで、罪を犯さなかったという人です。

そうなると、みんなは天国に入れますか。あなたは勝利者ですか。

改めて皆に聞きます。あなたはイエスさまを信

じていますか。イエスさまはどんなお方ですか。イエスさまは、勝利者です。イエスさまは、僕たち私たちの罪を償うために、十字架についてくださり身代わりに死んで下さいました。イエスさまは十字架で戦って下さいました。それは、罪との戦いでした。罪の支払う価の死との戦いでした。イエスさまは、罪のゆえに死んでいた僕たち私たちをご自分が十字架で死なれることによって、罪の支払う審きを償って下さいました。

罪を持ったままの人は、決して天国に入れません。臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、みだらな行いをする者などは、天国に入れません。それなら、そのひとたちはどこに行くのでしょうか。それは、神さまのおられない場所です。聖書には、「火と硫黄の燃える池」と書かれています。そんな熱い場所にいつまでもいつまでも投げ込まれたままなのです。

しかし、イエスさまは、十字架で死んでくださり、三日目に死人のなかからお甦りになされました。それによって、死の力を打ち破って下さったのです。イエスさまは死のとげである、罪とその背後にいて僕たち私たちに火と硫黄の池に陥れようと誘惑する悪魔の力に打ち勝って下さったのです。イエスさまの復活は死への勝利です。そして、イエスさまの勝利は僕たち私たちの復活で

す。つまり、イエスさまがお甦りになられたので、そのイエスさまを信じている人は誰でも、どんな弱い人でも、どんなに小さな子どもでも、たとえ罪に誘惑されて負けてしまった人でも勝利者にしてもらえます。復活するのです。復活のお命を分けてもらえるのです。イエスさまは死よりも強いからです。世界で一番強いお方だからです。そのイエスさまを信じている人は、イエスさまとひとつに結ばれています。つながっています。イエスさまは、僕たち私たちの親分です。世界一のチャンピオンです。このチャンピオンの仲間は誰でも、勝利者なのです。だから、イエスさまを信じている人は誰でも、必ず、死んだ後は天国に入れます。死ぬ前にイエスさまが戻って来てくださったら、神様と一緒に住むことのできる、新しい天と新しい地にいらしてもらえるのです。

だったら、僕たち私たちは、臆病になって、死を怖がったり、イエスさまを信じて教会に来ていることを恥ずかしく思ったりする必要はないのです。どれほど辛いことがあってもくじけないで、イエスさまが今ここでいつも一緒にいてくださる事を信じることができるのです。僕たち私たちは死んだ後にもいつまでも永遠にイエスさまと一緒にいることができるのです。

---

#### 今週の暗唱聖句

「然り、彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。

その行いが報われるからである。」

ヨハネの黙示録 14章13節後半

---

〈目標〉

私たち自身も死の後、天国に行くことがゆるさ  
れていることを知る。

〈導入〉

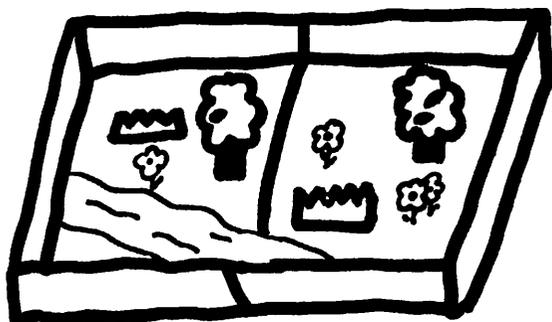
「みんなは、イエスさまを信じているかな？」  
「悲しいことも、痛いことも、淋しいこともない  
ところでは、みんなどんな顔をしているかな・・・  
・・・そうだよ、みんなニコニコだよ。」  
「いつも神さまを賛美したくなっちゃうよね。」

〈展開例〉

「天国の製作を仕上げる」

- ・材料 / 50 cm × 50 cm位の平らな箱  
(お菓子やタオルなどの箱)
- クレパス、マジックなど
- 色画用紙、折り紙など

- ① 人や動物を作る。
- ② 完成したら、みんなで写真を撮ってはいかが  
でしょうか。



☀️ 先週の天国は  
たのしく 造れました？  
今週は 仕上げます。  
ひとをついたり。  
ことりや、どうぶつも  
たのしいです。

さあみんな  
写真に  
撮ろう!!

注意!! 「お花やさんつくりたい」  
「ケキやさんも いるよね♡」  
たのしい想像が どんどん ぶくらんで きたら、  
STOP.  
あくまでも 黙示録 21:1-8 のワクをこえないで  
下さい。 たのしもう!!

〈折り〉

天国を目指し、見上げて、神さまのこどもとしていつもいられますように。アーメン。

## 〈目標〉

イエス様を信じる人たちは、イエス様の約束のとおり復活し、神様と共に生き続けることができる喜びと希望を教えよう。

## 〈考えてみよう〉

- ① 天国ってどんな国なのでしょう？  
みんなで考えて意見を出し合ってみる。
- ② その後、ヨハネ黙示録 21:1-4 を開いてみんなで声を出して読んでみましょう。ここには天国ってどんなところって書いてあったか？ みんなの予想が当たったかどうか話しながら進めていきましょう。(予想をしてもらったことと、聖書に書いてあったことを書き出して比べてみるのも良いでしょう。)
- ③ 天国は神様が一緒にいて下さるところだって書いてあります。今は聖霊を通して神様はお友達と共にいてくださいます。そのことを感じるができるお友達がいるか聞いてみる。  
・イエス様が一緒にいて下さることを実感できているお友達は少ないでしょう。その中で、今は分からないけど、天国では分からないような形ではなくて、分かる形で神様が一緒にいて下さるのだということを教える。
- ④ 天国には、悲しむことがないと書いてある。ここに来ているお友達は、悲しいことにあったことがあるか聞く。そして、それはどんなときだったか聞く。  
・天の国はそのような悲しいことがないといわれていることを教えましょう。  
そして、なぜ天の国にはそのようなことがないかを教えます。  
・天の国では神様が一緒にいて下さるから、神様がいつも一緒にいて下さって悲しいこととか辛いことがないように守って下さるから。  
・神様の前に集められた人間は、もう罪を犯さないようになっているから。

- ⑤ 神様の前に集められたイエス様を信じる人たちは、ズーッと、僕たち私たちを守って下さる神様と一緒にいることができるようになることを語りましょう。そして、それが何よりも嬉しいことであることを教えましょう。そして、この神様といつも一緒にいることのできる天の国と一緒にいることができることが希望であることを教えましょう。

## 〈やってみよう〉

今日は母の日です。みんなでブラバンを使ってプレゼントのキーホルダーを作ってみよう。

141 ページをご覧ください。

## 〈目標〉

信じる者は、復活し神と共に生活でき、いつも喜んでいられることへの恵みへと導きたい。

## 〈指導上の心得〉

復活、神の国、新天新地と、なかなか想像できない事柄だが、神と共にある喜びを強調したい。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・ 生き返ると復活の違いをまず教える。
- ・ 復活すると私たちの体はどうなるのでしょうか、みんなで話し合ってみよう。
- ・ 新天新地とはどんなところだろうか、完成された神の国で、私たちはどういう生活をするのだろうか、話し合ってみよう。
- ・ 救いの最終的目的地は、神の国で神と共に住み、いつも神を喜ぶことであることを覚えよう。

## 〈ワーク〉

1. 復活ってどういう意味だろう。
  - a) 死んでいた人が息を吹き返した!
  - b) イエス・キリストの復活の体のように完全な体に甦らされる
  - c) ゾンビになる。
2. 新天新地(天国)はどんなところなんだろう。ヨハネの黙示録 21:1-4 を読んで書いてみよう。
3. 教会は天国の模型とされています。どこが似ているのかな? 先生と一緒に考えてみよう。
4. ヨハネの黙示録 24:13 の後半を覚えましょう。

〈答え〉1. b 3. 神様が共にいてくださる。神様を礼拝する、等

## 〈目標〉

神と国と、復活の体について知り、希望を持つ。

## 〈指導上の心得〉

神の国とはどういう所なのか。復活したとき私たちはどうなるのか。聖書から正しく教えられたい。

## 〈展開例〉

(1) ヨハネの黙示録 21:1 ~ 8 (もしくは 21:22 ~ 27、22:1 ~ 5 も) を皆で読んで、感じたことを話し合う。

(2) 工作「コースターを作ろう」

## ☆材料

- ① 麻布(生成色で、ザックリしたもの)
  - \* 水洗いしておく。
- ② クレヨン(クレパス)
- ③ ティッシュペーパー
- ④ アイロン、アイロン台

## ☆作り方

- ① 麻布は10cm角に切っておく。
- ② 周囲1cm位を残して、真中にクレヨンで絵を描く。
- ③ 絵の上から、ティッシュペーパーをあて、アイロンで何回か押さえる。
- ④ 周囲1cm位の織糸を抜いてフリンジ状にする。

\* 時間があったら、家族みんなの分も作ろう

## 〈折り〉

主なる神様。

イエスさまによって、わたしたちは、死んだあとによみがえり、すばらしい神の国にいてくださる約束を与えられていることを感謝します。

どうぞ、わたしたちの大切な家族も

共に神の国へ行くことができますように。



話し合おう

天国はどんなところか？ 4月21日に聖化の歩みのゴールとして示された天の国について今日は学ぶ。

天国について知っていることを自由に話させる。



聖書箇所を読み取り

天国＝聖なる都、新しいエルサレムの描写。「目の涙をことごとくぬぐい取る」「もはや悲しみも嘆も労苦もない」「渴いている者には……」など、ストレスに晒される中学生の心に迫る御言葉のオンパレード。とても美しい箇所なので、ていねいに味わいたい。

きれいだな、ステキだなと感じる箇所、意味の分からない語句や箇所などを言わせる。「神の幕

屋」(出エ25～27章)、「夫のために着飾った花嫁」(エフェソ5：26-27)などは聖書を開かせて意味を説明する。



問36の理解

「身体によみがえり、永遠の命を信ず」と告白するとき、何を信じているのか？ 朽ちない体とはどういう意味か？ 永遠の命をもらったわたしたちは天国で何をして過ごすのか？

月 日 「復活のときの祝福」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：黙示録 21：1～8

問 36

☆聖なる都、新しいエルサレム

毎日聖書を読もう

|                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 日<br>テサロニケ 1<br>1:1-10     | 月<br>テサロ<br>ニケ 1<br>2:1-12  |
| 火<br>テサロニケ 1<br>2:13-16    |                             |
| 水<br>テサロニケ 1<br>2:17-20    | 木<br>テサロニケ 1<br>3:1-13      |
| 金<br>テサロ<br>ニケ 1<br>4:1-12 | 土<br>テサロ<br>ニケ 1<br>4:13-18 |

☆身体によみがえり、永遠の命

暗証聖句

(黙示録14：13b)

聖霊降臨の出来事を語る箇所です。

「五旬祭（ペンテコステ）」とは五十日目の祭のことを指し、過越・除酵祭から七週目にあたり、「七週祭」とも呼ばれます。（出エ 34 章 22 節）これは収穫の初穂をささげる祭で、この時に聖霊降臨による語り出しが始まったことは、世界宣教とその刈り入れの保証を表すのでしょうか。

### (1) 聖霊降臨

聖霊降臨は二つの徴が伴いました。一つは「烈しい風が吹いてくるような音が天から聞こえた」。もう一つは「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」「風」は昔から聖霊の象徴に用いられてきましたから、イエスの約束の通り、「天から」の聖霊の派遣が起こっていることを指しているのでしょうか。また「舌」は「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」形で更に明確に現れます。どちらも聖霊降臨の徴として記され、聖霊の降臨が同時に語りだしにも結びついていることを教えられます。聖霊は注がれるだけでなく、必ず「舌」となって話さずにはいられなくなります。それで 1 章 8 節でイエスが「わたしの証人となる」と言われていたとおりです。また、「突然、烈しい風が」と描かれるように、聖霊の降臨はまさに「力」として起こりました。これもイエスが 1 章 8 節「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」と言われていたとおりですし、「霊」が語らせるまま」というところでもわかります。まさに聖霊は力です。そして最後に「分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」とあるように、「一同」には言われず、「一人一人に」起こるのです。これは一人一人がその場の雰囲気

に飲まれたのではなく一人一人が自覚的に、だからこそひとつの言葉ではなく「国々の言葉」となって現れたのです。

### (2) 人々の反応

5 節以降この出来事を見た人々の反応が記されています。「天下のあらゆる国から帰ってきた、信心深いユダヤ人」と「大勢の人」が目撃しました。丁寧に記してあるのはこの出来事が幻でも狂乱でもなく確かな出来事であることを証明するためでしょう。

更に 9 節以下の様々な地域のリストは、まさにイエスが「地の果てまで」と言っていたことの成就を指すのでしょうか。この言葉はちゃんと聞き取られて「わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」と驚きを表します。語り出す方にも一人一人聖霊に促されて各国語で話しますが、それは同時に聞き取る方にも「わたしたちの言葉で神の偉大な業を」という驚きになるのですから、聖霊降臨を受けた本人たちだけでなく、耳を傾けた多くの人々にも聖霊の力と証は届いたこととなります。

つまり聖霊の降臨は語るにせよ、聞くにせよ、それに触れたものたちは静観することができない事柄なのです。ですからそれを否定するものたちは 13 節「あざける者」となって反応しました。

まさに刈り入れの感謝を初穂を捧げて祝った「五旬祭」の日、聖霊降臨による世界の刈り入れが始まりました。その始まりは、烈しい聖霊の力と、その聖霊がとどまった一人一人によって構成される教会とその語りだし、そして「わたしたちの言葉で神の偉大な業」を聞く人々によって描かれています。

ハイデルベルク信仰問答

問54 聖なる、公同の、キリスト教会については、何を信じますか。

答 神のみ子が、全人類の中から、ご自分のために、選ばれた群れをつくり、これに、永遠の生命を与え、み霊とみことばとによって、まことの信仰において一つなるものとして、世の初めから終りまで、集め、守り、保って下さり、わたしが、今も、永遠までも、その活けるえだとなっている、ということであります。

〈聖霊の降臨〉

主イエス・キリストは十字架に死んで三日目に復活され、40日間地上にあって、弟子たちとともに過ごされ、天のみ父のもとに昇られました。しかしすでに地上におられたときに、わたしはあなたがたをみなし子にはしておかない、父が別の弁護者（ヨハネ 14:16）である聖霊を遣わして、いつまでもあなたがたとともにいるようにして下さいと、地上に残される弟子たちに約束して下さいました。そして十字架から50日めに、約束のとおりペンテコステの出来事は実現しました。

聖霊の到来により、神の救いの歴史はみ子の時代から聖霊の時代へとうつっていきます。つまり、み父とみ子とから遣わされ、み子の霊と呼ばれる聖霊が、み子のみ言葉すなわち靈感された（＝聖霊を著者とする）神のみ言葉である聖書をお用いになって、十字架と復活の恵み－罪の赦し、死への勝利、永遠の命の祝福を全地の民にあまねくもたらされ、み国の祝福を拡張していかれる時代が到来するに至ったのです。

ペンテコステはまた、教会の誕生の日でもあります。主イエスは福音の宣教により、聖霊によつ

てご自分の民をこの世からご自分の体なる教会へと召し集められます。そして説教と聖礼典を通して、聖霊において教会に臨在なさいます。今もそのような聖霊の時代、教会の時代です。このように聖霊は教会を通してみ国を広げていかれ、世の終わりの日に地にみ国が完成されるのです。

〈一致と多様性の霊〉

聖霊なる神のお働きの特徴のひとつは、多様性ということです。聖霊は信徒ひとりひとりの個性や賜物を重んじ、これを十分にお用いになって、ふさわしい務めと使命へと召されます。

聖霊は同時に一致の霊でもあられます。性格も境遇も生い立ちも異なる者たちをかしらなるキリストにある一致に導いて、教会をひとつの体とされるのです。

教会は聖霊に満たされ、生かされて、相異なる賜物をたがいの益のために働かせ、補い合って、美しい一致と調和に生きるのです。そしてあらゆる障害や妨げの壁をうちやぶって、キリストのみ体をたてあげ、福音をのべつたえる働きと使命に生きる群とされるのです。

テキスト 使徒言行録 2章1～13節  
カテキズム 子どもカテキズム 聖霊降臨

## 「教会の誕生」

〔単元のねらい〕

今日は、聖霊降臨祭を記念してテキストを選定し、教会の誕生の経緯を学ぶ。教会は聖霊によって、生み出され、育てられ、形成される。その教会へと来ている子らに、既に自分も聖霊の働きにあずかっていることを気づかせたい。既に問34で、教会論に触れたが、ここでは、歴史的な面から教会の姿を学びたい。自分の教会（各個教会）の歴史についても教えることは大切である。本号より一年間、杉山牧師による「中高生のための教会史」が連載される。子どもらに、教会を歴史的に見させることが、非常に大切であるからである。そのために教師自身もまた、よく読んでくださり、教会の姿を歴史的視点から考える力を身につけていただきたい。

今日も愛する皆と一緒に教会に集って、神さまを礼拝できる事をとても嬉しく思います。皆をここに呼び集めてくださった神さまに心から感謝しています。先生は確信しています。天のお父さまは、僕たち私たち一人一人を、その名を呼んで、神の民の祈りの家、キリストの御体としての教会に連れてきて下さったことをです。皆は、そう信じていますか。

教会は、何をするとところですか。神さまを礼拝するところです。聖書を通して語ってくださる神さまからのお話を皆で聴いて、お祈りし、賛美を歌います。そして、一人でも多くのお友達に、イエスさまのことを紹介するのです。教会は世界中で、日曜日の朝、礼拝式を捧げています。

僕たち私たちは、日本キリスト改革派教会という教会の名古屋にある教会、名古屋岩の上教会で礼拝を捧げています。日本キリスト改革派教会は、今から、56年前に生まれた教会です。でも、日本キリスト改革派教会の中には、100年以上も前からある教会もあるのです。この日本キリスト改革派教会は、日本で一番古い教会とつながりのある教会なのです。そして、今は沖縄県から北海道まで140あまりの教会があります。名古屋にも、夏のキャンプで一緒だったお友達が通っている教会があります。僕たち私たちのこの教会は今から、8年前に始まったとても若い教会です。この「改

革派教会」という教会の名前は、中学生のお兄さんお姉さんになると学校の教科書で必ず学びます。それほど、有名な教会なのです。今から、450年以上の昔、ジャン・カルバンと言う先生がスイスのジュネーブで新しい教会を始めました。教科書では「宗教改革」って学びます。この改革派教会とは当時の教会が聖書の正しい信仰からそれてしまったことを、「聖書によって改めましょう」と言って建てられた教会で、僕たち私たちの教会は、日本におけるこの教会の歴史を受け継いでいる教会なのです。

僕たち私たちの教会は、立派な建物がありません。ビルの小さな一部屋です。けれども、ここは、教会です。イエスさまは「わたしはこの岩の上に、私の教会を建てます」と仰いました。「二人でも三人でも、私の名によって集るところには、わたしも共にいるのです」と約束して下さいました。

それなら、一番最初の教会はどのように始まったのでしょうか。イエスさまが、十字架について三日目に復活されて、お弟子さんと食事をしておられた時のことです。こう仰いました。「エルサレムを離れてはいけません。あなたがたは、聖霊なる神さまを受けます。その時には、あなたがたは力を受けて、わたしのことを世界中の人々に伝える人になります。証人となります。」その後、お弟子さん達が見ている前で、天に昇って行かれ

ました。お弟子さんたちは、言われたとおり、お祈りしながら待っていました。「天の父なる神さま、私たちは、これまで、イエスさまのことを信じていることができず、イエスさまの教えてくださったことを悟ることが出来ませんでした。自分達どうしも、誰が一番偉いか偉くないか競いあつて来ました。こんなわたし達を赦して下さい。イエスさまの復活の証人として、強くして下さい。力を与えてください。」

それから毎日毎日、来る日も来る日もお弟子さんたちは、心をひとつに合せてお祈りに集中していました。そして、すでに 10 日たった五旬祭というお祭りの日のことです。その日も、ずっとお祈りの会が続いていました。すると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が、家中に響いたのです。炎のような舌が一人一人の上に留まりました。すると、みんな聖霊に満たされ、外国の言葉で神さまをほめたたえ始めたのです。

お弟子さんたちは、今までイエスさまを十字架につけた人々がたくさんいるエルサレムの真中にいました。ですから、窓を閉めてお祈りしていました。怖かったからです。自分達だって、見つかったら殺されるかもしれないのです。けれども、聖霊を受けた今、お弟子さんたちは神さまの力に満たされて、この物音にびっくりして駆け集って来た人々に、イエスさまの十字架の福音を語り始めました。「あなた達が十字架につけて殺してしまったあのイエスさまは、復活されました。イエスさ

まは神さまです。あなたがたの罪の身代わりに十字架に掛かってくださったのです。罪を悔い改めて、イエスさまを信じなさい。」大胆に御言葉を語りました。これを聞いていた人々は、心を打たれ、「どうしたら良いのでしょうか。」と言いました。お弟子さんたちは、人々に洗礼を受けるように勧めました。その日に、洗礼を受けて仲間に加わった人の数は、3000 人にもなりました。

これが、僕たち私たちの教会が地上に始まった日の光景です。初めの教会には、教会堂はありませんでした。けれども、聖霊なる神様の力によって、皆がイエスさまを愛し、お互いを愛し、お弟子さんたちの聖書の教えを聴き、心を合せてお祈りしていました。

あれから 2000 年たった今、世界中にキリストの教会は広げられました。そして名古屋のこの地にも、天のお父さまのご計画によって、イエスさまのお祈りによって、聖霊が注がれて、僕たち私たちの名古屋岩の上教会が誕生したのです。僕たち私たちは今、聖霊なる神さまによって生まれたこの教会に、聖霊なる神様のお働きによってここに呼び集められ、ここに座ってイエスさまを礼拝しているのです。つまり、初めの教会と同じように聖霊の神さまの力を受けているのです。あなたも、勇気をもってイエスさまのことを伝えることができるのです。

---

#### 今週の暗唱聖句

ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは  
間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。

使徒言行録 1 章 5 節

---

〈目標〉

私たちの教会は、神さまを信じる者の祈りの家であることを知る。

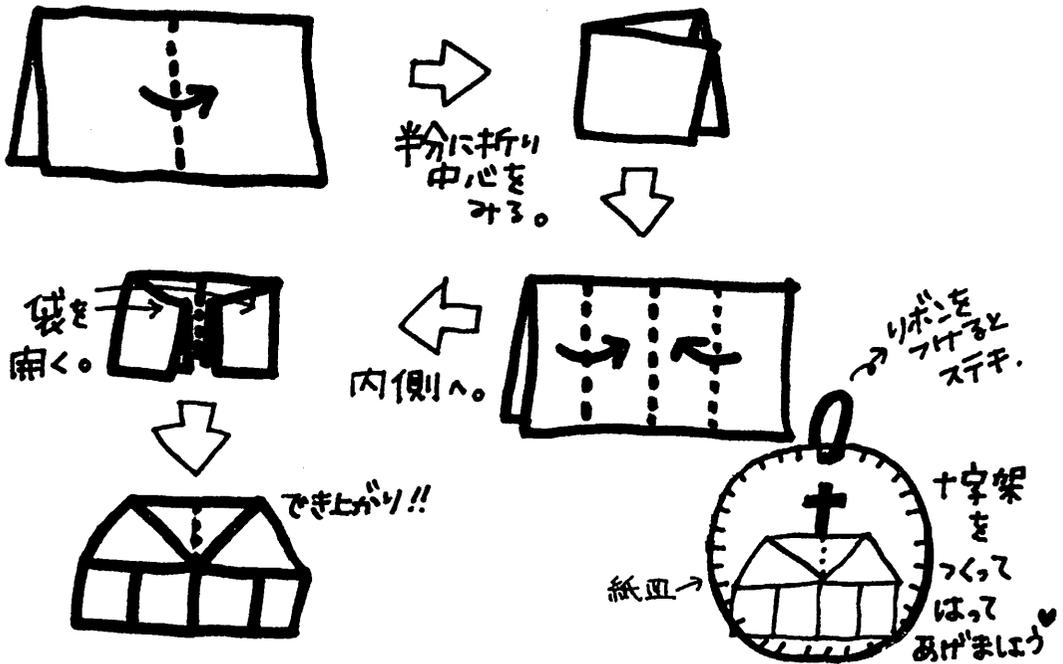
〈展開例〉

「折り紙で教会を作る」

〈導入〉

「教会は何をするところですか？」  
「神さまに礼拝をささげるところですよ。神さまのお話を聴いたり、賛美したり、お祈りをしたり・・・とても楽しいところです。教会にいくことができうれしいね。」

材料／折り紙、紙皿、リボン、  
クレパス、マジックなど



〈折り〉

僕たち、私たちだけでなく、たくさんのお友達がこの教会にいくことができますように。アーメン。

## 〈目標〉

ペンテコステとはどんな日かをともに考え、教会をイエス様が造られたことを教えましょう。

## 〈考えてみよう〉

① 教会には幾つかの大切な日（記念日）があります。みんな知っているか聞いてみましょう。

・クリスマス・イースター・ペンテコステの三つです。

② まだ来始めたばかりのお友達もいるかも知れないので、クリスマス・イースターについて、教師自身の言葉でまず簡単に説明しましょう。

③ それでは、ペンテコステはどんな日でしょうか？ みんなで考えましょう。

・教会の誕生日？ ・イエス様が天に昇られた日？ それとも・・・。（教会の誕生日です）

④ ペンテコステは教会の誕生日です。それでは教会は誰がつくったのでしょうか？

・お弟子さん？ ・イエスさま？ ・大工さん？  
答えはイエス様です。

⑤ イエス様はどのようにして教会をつくられたのでしょうか。

・イエス様が天のお父様のところに帰られたのち、お弟子さんたちが集まっているときに、聖霊を送られました。聖霊を受けたお弟子さんたちはいろんな国の言葉でイエス様のしてくださったことを話したのです。そのイエス様が送られた聖霊によって話された人たちが、沢山イエス様を信じるようになりました。そうして最初の教会ができたのです。

⑥ 今みんなが来ている教会は、この最初の教会と何か関係があるのかな？ 答え聞いてみましょう。続けてどんな関係があるのか、分かる人がいるか聞いてみましょう。その答えは、この教会もイエス様が聖霊を送られて創られた教会だということです。全ての本当の神様を礼拝している教会は、イエス様が聖霊を送ってくださって創られた、イエス様の教会なのです。

⑦ この聖霊は、来ているみんなにも送られるのかな？

・イエス様を信じたときに送られる。

・送られっこない。

答えはイエス様を信じたときに送られます。そして、その聖霊を受けたとき、小さなみんながイエス様の教会の一人となるのだということを子どもたちに教えて終わりにしましょう。

## 〈やってみよう〉

今日は、暗唱聖句のしおりを作しましょう。

・用意する物

紙（画用紙 or 色画用紙）、鉛筆、パンチ、しおりに通すリボン

・作り方

1. 最初に、紙をペンテコステのときに降った聖霊のイメージに切りましょう。



2. 次に、一番上の適当なところにパンチで穴を開けておきます。



3. 裏と表に今日の暗唱聖句を書きます（使徒言行録 1:5）。裏には、「あなたがた」というところにお友だちの名前を書きましょう。



4. 最後にリボンを通してできあがり。



〈目標〉教会の始まりについて子供たちに教える。  
 〈指導上の心得〉送られた聖霊によって教会が生まれ出され、この聖霊によって今も教会が守られていることに注目しつつ指導する。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・ 教会が誕生したのは何が起きたときだったでしょうか、それはいつ頃のことだったでしょうか、みんなで話し合ってみましょう。
- ・ 聖霊はどこから誰に來るか考えてみよう。
- ・ 信じる者に与えられる聖霊は、父と御子から來られる神様です。この聖霊に満たされると力強く福音を伝え、教会を形造る力を得ます。
- ・ 聖霊は、私たちの内に働いて、この教会形成の働きに私たちを召し出し、喜んで尊い務めに与らせてくださることを覚えます。

## 〈ワーク〉

1. ベンテコステって何でしょう？
2. またそれによって何ができたでしょうか？
3. 聖霊はどのようにしてこの世に來られた？  
 ( )と( )によって送られた
4. また聖霊にはどんな働きがある？  
 聖霊は( )を伝え、私たちの心に働かれる
5. 初代教会は何人が集まったのでしょうか？  
 教会をつくり支えてくださっている父、御子、御霊の神様に感謝し、これからも人が集まるようにお祈りしましょう。

〈答え〉1. 聖霊の降臨 2. 教会 3. 父、御子  
 4. 御言葉 5. 約3000人

## 〈目標〉

ベンテコステによって教会が誕生したことを知る。

## 〈指導上の心得〉

教会をつくり、守り、導いて下さる神の業を知る。一方的に語らず、子供に考えさせて正しい理解へと導くようにする。

## 〈展開例〉

- (1) 約束の聖霊：ヨハネによる福音書14章15、16節、使徒言行録1章4b節を子供たちと一緒に読んで、ベンテコステの出来事が神様の約束の成就であることを語る。神様はイエス様が地上を去った後、残された人々をほっておかれなかったこと、そこに神の愛があることを強調したい。
- (2) 聖霊によって力を受ける：使徒言行録1章8節、2章4節を子供たちと一緒に読んで、聖霊に

満たされた弟子たちが、力強く福音を語る姿について語る。それまではできなかったことが聖霊に満たされて初めて出来る様になったことを強調したい。

(3) 教会の誕生：使徒言行録2章14節以降にペトロの説教が記されています。聖霊に満たされたペトロの説教を聞いて、3000人ほどの人が仲間に加わったと記されています(2章41節)。また42節を子供たちと一緒に読み、その群が教会であることを語る。「この出来事はまさに教会の誕生である。」このことを子供たちが自然に理解できるようにしたい。

(4) 今も働かれる聖霊：聖霊は昔のお弟子さんたちに与えられた昔話ではなく、今もみんなの内にあり働いておられることを学ぶ。子供たちとともにどんな例があるかを考える。教会に來ることができ、神を礼拝できること、祈ることができること、神を信じるができること、など。



話し合おう

ペンテコステについて知っていることを話させる。教会の誕生日、聖霊降臨、五旬祭、ペンタ=5（ギリシャ語）、イースターから七週目の日曜日（カレンダーを使って確認）。



聖書箇所を読み取り

「天から聞こえ」「家中に響いた」ゴオオでもビュウウでもいけれど、すごい音がした。それは家の外（エルサレム市内）にいる人々にも聞こえた。何事かと大勢が集まるような事件。使2：41、信じた人だけでも三千人だったのだから、何人くらい集まったのかは推して知るべし。これは信者だけ（家の中にいた人だけ）にあらわされた出来事ではない。集まってきた人々の国の言葉で「神の偉大な業」が語られる。9～11節、地図でどの辺りか確認。

12節「いったい、これはどういうことなのか」どういうことなのか生徒に説明させる。

聖霊が降ることはイエスさまが約束して下さったこと（使1：5、2：33）を確認し、暗唱聖句で結びとする。

旬=10日間。上旬中旬下旬。五旬で50日。  
 $7 \times 7 = 49$ 、 $49 + 1 = 50$ 。  
 といったことを板書するだけでも、教会歴と日常生活を関連させる一助となります。  
 中学生なら知っていそうなものだけど、意外に知らない。  
 こういった一見でもないことに時間を使うと、生徒がCSで自分の意見を言い易くなります。

月 日 「教会の誕生」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：使徒2：1～13

☆ペンテコステ

☆「いったい、これはどういうことなのか」

毎日聖書を読む

|                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 日<br>テサロニケ1<br>5:1-11  | 月<br>テサロニケ1<br>5:12-18 |
| 火<br>テサロニケ2<br>1:1-12  | 水<br>テサロニケ2<br>2:1-11  |
| 木<br>テサロニケ2<br>2:13-17 | 金<br>テサロニケ2<br>3:1-5   |
| 土<br>テサロニケ2<br>3:6-18  |                        |

暗唱聖句

(使徒1：5)

テキスト

ルカによる福音書 17章 11 ~ 19節

この箇所は、主イエスが10人の重い皮膚病の人々を癒されたことが記されています。そこに記されている二つのグループの反応に注意して、この箇所の御言に耳を傾けていきましょう。

### (1) 二つの場面

この箇所は二つの場面から構成されています。まずは11節～14節の部分で主によるいやしが記され、15節～19節までの部分で救いの問題が記されています。

### (2) 重い皮膚病を患っている人々

重い皮膚病を患っている人々は、律法の規定により同じ病を負っている人々以外からは離れて生活しなければなりません。そのために、彼らは、共に集まって生活していました。

そこで共に生活していた人々は、人々から隔離され、他の人々と同じように生活できない人々でした。その人々はみな同じ苦しみをおい、同じ傷を負っていました。そのような人々が生活しているところのそばを主イエスが通りかかれた時にこの箇所の出来事が起こりました。

### (3) 主イエスに叫ぶ人々

重い皮膚病にかかった人々は、彼らのそばを通った主イエスに「私たちが憐れんでください」と叫びました。彼らにとって、この病から癒されたいと願うその思いは、共に非常に重いのであったに違いありません。彼らは癒されたいのです。癒されて、本来の間違った生活を取り戻したいのです。彼らはどうしても主イエスの憐れみを受けたいのです。彼らのその思いは、その叫びに現れているように、切実なものです。

### (4) 主の癒し

このような痛みを持っている人々の切実な願いに対して、その答えを示されます。主はこの人々

に、祭司に見せに行くようにおっしゃられるのです。この祭司に体を見せに行くとは、その体が癒され、本来の生活に戻ることができることが祭司によって公に認められるためでありました。

その祭司に見せに行くようにという主の言葉に服従している最中に、主の憐れみの業が起こります。この時、癒されることを望んでいた全員が癒されるのです。

### (5) あなたの信仰があなたを救った

主の癒しを体験した人々の内、主に感謝をするために戻ってきたのはたった一人でありました。彼は主の前にひれ伏し主を礼拝します。

この戻ってきた人はサマリアの人でした。ユダヤ人から救いの外にあると思われていたサマリア人だけが主のもとに戻ってきたのです。

この者に「あなたの信仰があなたを救った」と主がおっしゃられたとき、この帰ってきた者に与えられた祝福は、他の人々に与えられた単なる癒しの祝福とは違うものでありました。この救いとは今までの隔離された生活からの救いということだけではありません。彼は主イエスによって救われたのです。

10人の癒された者の内、感謝を示したものは一人の外国人でした。その帰ってきて感謝を示し、主を礼拝した者に、主は祝福を与えられました。

### (6) 最期に

このところで重い皮膚病の10人は切実な同じ苦しみを持っていました。そして、10人とも主の癒しを体験したのです。つまり、その主の恵みを皆一様に得ていたのです。しかし、主に感謝を示したのはたった一人でありました。彼は、主に立ち返ったことによって救いの祝福を得たのです。しかもこの、神様の恵みを受けて祝福を得たのは外国人でありました。このことは注目すべき点であるのです。

カテキズム 子どもカテキズム 問37  
 ウェストミンスター小教理問答 問39  
 ハイデルベルク信仰問答 問86, 87

#### 子どもカテキズム

問37 神さまが人に求めておられることは何ですか。

答 神様が私たちに求めておられることは、感謝することです。

#### ハイデルベルク信仰問答

問86 わたしたちが自分の悲惨さから、自分のいかなる功績によらず、恵みによりキリストを通して救われているのならば、なぜわたしたちは善い行いをしなければならぬのですか。

答 なぜなら、キリストは、その血によってわたしたちを贖われた後に、その聖霊によってわたしたちを御自身のかたちへと生まれ変わらせてもくださるからです。それは、わたしたちがその恵みに対して全生活にわたって神に感謝を表し、この方がわたしたちによって讃美されるためです。さらに、わたしたちが自分の信仰をその実によって自ら確かめ、わたしたちの敬虔な歩みによってわたしたちの隣人をもキリストに導くためです。

#### 〈カテキズムの後半の構成〉

『子どもカテキズム』の後半、第三部「生活の道」に入ります。第三部は、人がどう生きるべきか、人の義務についての問答です。内容的には大きく三つに区分されます。一つは「感謝に生きる道」として十戒について、二つは「教会に生きる道」として御言葉と聖礼典（洗礼と聖餐）について、三つは「祈りに生きる道」として主の祈りについてです。カテキズムの後半で十戒と聖礼典、主の祈りを取り扱うのは、キリスト者の生活が十戒を道しるべとしており、聖霊の恵みを受ける御言葉と礼典を欠くことができず、また祈りの生活であるということのあらわれです。このような理解、またカテキズムの構成は、改革・長老主義教会の共通理解と言えるでしょう。

#### 〈感謝の生活〉

その上で、第三部の冒頭に「感謝について」という項目をもうけました。これは、ハイデルベルク信仰問答の構成を念頭に置いて、キリスト者の「生活の道」は「感謝の道」であると言い表すことを意図しています。私たちの生活は、神への感謝という光のもとに照らし出されるのです。

聖書は一貫して、信仰者の生活全体が神の恵みに対する感謝の捧げものであるということを強調しています。「何事につけ、感謝を込めて祈りと

願いをささげ」（フィリピ 4:6）。「何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい」（コロサイ 3:17）。

#### 〈感謝の生活の根拠〉

私たちの生活が神への感謝の生活であるということは、二つの視点で考えることができます。

一つは、「人としての義務である」ということです。問37は、「私たち」ではなく「人」という言葉を用いています。この「人」とは、キリスト者や教会の子どもたちに限定されない、一般的な意味で用いられています。これは、神に感謝することは、本来、すべての人の義務であるという確信を表明しています。すなわち、創造者なる神から、被造物である人に対して、感謝が求められているということです。

もう一つは、主イエス・キリストの救いの恵みに感謝するということです。主イエスは、病気をいやされたサマリア人に対して、神に感謝し讃美することをお求めになりました。主イエスは、そこに信仰をお認めになりました（ルカ 17:11-19）。主なる神は、救われた者が感謝と讃美を捧げることを喜ばれます。

キリスト者の生活は、神の創造の御業と贖いの御業に感謝する生活にほかなりません。

テキスト           ルカによる福音書 17章 11 ~ 19節  
カテキズム       子どもカテキズム 問37

## 「感謝 - 神の求め - 」

〔単元のねらい〕

今日から、第三部「生活の道」が始まる。信仰の道を学んだ者がどのように地上にあって、生きるのか。子どもカテキズムは、その生活を恵みへの応答としての生活、感謝に生きる道としている。恵みへの応答は、感謝に規定されていると理解しているのである。もちろん、「感謝しなさい」とただ命じてみても、恵みに打たれていない者には、空回りとなろう。十戒において前文が、決定的な重みを持っているように、これまで信仰の道で学んだことを確認しながら、感謝の道へと、導きたい。そこでも、問われるのは、教師の生活の姿である。自分自身が良き礼拝者として、教会に仕える者として、証人として、成長し続ける者でありたい。

今日から、子どもカテキズムが第三部に入りました。これまで、僕たち私たちは、神さまが僕たち私たちを神さまの子どもにしてくださるためにどんなことをしてくださったのかを学んで来ました。神さまの前に罪人の僕たち私たちのために、罪を贖ってくださったイエスさまとお働きを知りました。僕たち私たちは、今、イエスさまを信じて救われて神さまの子どもとされています。

皆は、神さまの子どもとしていただいて、嬉しいですか。「ああ、嬉しいな。」って思うお友達は、聖堂なる神さまによって、神さまの子としていただいている証契を頂いているのです。もしもまだ、喜びが湧いてこないお友達がいるなら、焦ることなく、「天のお父さま、イエスさまを信じていますから、神さまの子としていただいた喜びを与えてください」とお祈りしてください。イエスさまが僕たち私たちのためにどんなに大きな愛を示してくださったのかを、知ったら、「ありがとうございます。」「感謝します。」って言いたくなるはずです。そして、神さまが僕たち私たちに求めておられるのも「イエスさま、ありがとうございます。」という感謝なのです。

ある日のことです。イエスさまは、サマリアとガリラヤのとても寂しい道を歩いて、ある村に入られました。その時、十人の人たちが遠くのほうから、大声を張り上げました。「イエスさま一、

せんせーい。どうか、わたし達を憐れんでください。」その人たちは重い皮膚病を病んでいたのです。その当時、この病気はとても恐れられていました。伝染すると考えられていたからです。ですから、この病気になった人は、皆から離れて暮らさなければならぬと掟で定められていたのです。もしも、自分の方に誰かが近づいてくるなら、「わたしは汚れた者です。汚れた人間です。わたしに近づいてはだめでです。」と叫ばなければならなかったのです。ですから、お父さん、お母さん、兄弟からも、引き離されて暮らさなければならぬのです。それだけではなく、人々は、その病気の人たちに「汚れた者、汚れた者」と叫ばせておいて、「あの人たちは神さまから裁かれている、だからあんなひどい病気にかかったのだ」と言ったり、見たりしていたのです。こんなに悲しく辛い目にあっている人はいないと思うほど、本当にかわいそうな人です。

今、その病に苦しんでいる人たちが、自分達の村にもイエスさまが来られたと聞いて、それはそれは大喜びです。何故なら、イエスさまは、人々が一番、神さまから離れている人間と考えられていた、その皮膚病を病んでいた人たちのところにこそ、先ず一番に駆けつけて癒しておられたからです。その嬉しいニュースは、この村の10人の病人にも届いていたのでしょ。ですから、喉も裂けよと、大声を出してお願いしたのです。これ

は、この人たちにとって必死のお祈りなのです。

するとイエスさまは、この人たちを見て直ぐに仰いました。「祭司たちのところに行って、体を見せなさい。」掟によれば、その病気が治ったかどうかは、祭司さんが決める事になっていました。祭司が「あなたは治りました。」と言って初めて、家族のもとに戻れるのです。つまり、イエスさまはこの10人の人に、「あなたがたの病気は必ず治ります。だから、直ぐに、祭司のところに行って良いのです。」と仰ったのです。10人は、イエスさまの約束の言葉を信じて、歩き出しました。すると、どうでしょう。10人とも、途中で完全に癒されたことが分かりました。どれほど、嬉しかったでしょう。遂に、家族の所に帰れるのです。それはそれは、大喜びだったと思います。

一人の人だけが、神さまを賛美しながら、直ぐにイエスさまのところへ飛びはねながら戻って来ました。そして、イエスさまを見つけると、ひれ伏して言いました。「イエスさま、ありがとうございます。あなたのおかげで全く癒されました。今まで、私は、この病気のことでどんなに悲しい思いをしてきたか分かりません。憎しみ、怒りをもって生きて来ました。神さまに文句を言ってばかりでした。けれども、それは間違いでした。神さまは、この私のことを見捨ててはられませんでした。イエスさま、あなたが教えてくださったのです。ありがとうございます。」これを見て、

イエスさまは、仰いました。「良かったね。もう立ち上がって、行きなさい。あなたが私の言葉を信じたから治ったのです。これからも、信仰によって生きてゆきなさい。」でも、イエスさまは、厳しく悲しい口調で、周りの人々に仰いました。「清くされたのは、10人ではなかったか。他の9人はどこに行ってしまったのですか。」

さあ、皆がこの病気を治していただいた10人だしたらどうしますか。僕たち私たちは、このような病気に苦しんでもいないし、イエスさまに治してもらってもいいと思えるかもしれません。けれども、僕たち私たちは、罪を赦して頂きましたね。それは、この重い皮膚病を治してもらったこと以上の素晴らしい恵みです。これ以上に幸いなことはないのです。世界で一番祝福されているのは、罪を赦していただいて、神さまの子としていただいた僕たち私たちです。それなら、僕たち私たちは、どれほど、「イエスさま、ありがとうございます」って言っているでしょうか。この礼拝式は、「イエスさま、ありがとうございます」って皆で言うことなのです。これからも、ますます、イエスさまがどんなに素晴らしい事をしてくださったか、今、していただくかを皆で思って、心から感謝しましょう。そして、感謝しながら生きて行きましょう。

---

#### 今週の暗唱聖句

どんなことにも感謝しなさい。

これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。

テサロニケの信徒への手紙 — 5章18節

---

〈目標〉

「神さまが私達に求めておられることは感謝をささげること」を知る。

〈導入〉

お家や、幼稚園（保育園）で嬉しかったことを自由に話しましょう。

たとえどんなに小さい事でも、「良かったね。嬉しかったね」・・・話を聴いてあげることが大切です。そして、その背後にある神さまの恵みを分かち合い感謝へと、導いていきます。

いつも、どんな時でも「かみさま、ありがとう」と言える幸いを教師自身、証したいものです。

〈展開例〉

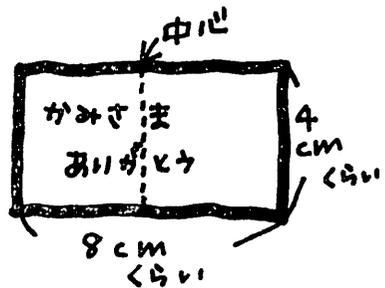
「\*かみさま、ありがとうカード\*をつくる」

・材料/こどもの手の平二枚分の色画用紙  
はさみ  
クレパス、マジックなど

- ① 2ッ折りにした色画用紙にこどもの手形を薄く描きます。
- ② 2ッ折りのまま手の形に切ります。
- ③ 両手を広げた中に「かみさま、ありがとう」と描きます。
- ④ 皆でカードを広げて感謝の祈りをささげる幸いな時をもちましょう。



おや指 だけ。  
ひっくように  
手形をとって下さい。  
開いた時、右手・左手が  
はなれないようにと



〈折り〉

いつも一緒にいてくださり、ありがとうございます。アーメン。

## 〈目標〉

私たちの生活は神様からの恵みによって守られています。その恵みに感謝をする。そして、神様を信じることによって救いの恵みが与えられることを教える。

## 〈考えてみよう〉

① 10人の重い皮膚病の人たちは、どんな状況に置かれていたか。

- ・隔離され、一般の人たちとは一緒に住むことが出来ない。また、一般の人たちが住む町の中にも入れない。大切な家族とも一緒に住めない。どんな気持ちだったのか。

② 彼らは何を一番願っていたのか。

- ・病気が治って、普通の人として生きること
- ・人間らしい生活をする。

③ イエス様が一番喜ばれたのは誰だったか。

- ・彼らはイエス様の言ったとおりに行き、その結果、病は癒されました。その中で、イエス様が喜ばれたのは感謝を捧げに帰ってきた人でした。

④ 病を癒されるとはどういうことか。

- ・子供たちに病気をしたときの話、友達や家族の人が病気をした時、どんな気持ちだったのか聞いてみよう。

⑤ 神様が10人の重い皮膚病の人達を癒されたのち、どうなったのか。

| 1人                  | 9人                |
|---------------------|-------------------|
| ・病を癒された             | ・病を癒された           |
| ・大声で神を賛美した          | ・イエスさまのところに戻らなかった |
| ・イエスさまの足元にひれ伏して感謝した | ・ユダヤ人だった          |
| ・主イエスによって救われた       |                   |
| ・サマリア人だった           |                   |

当時ユダヤ人の中では、サマリア人は神様からの救いはない、と考えられていました。イエス様に癒されたサマリア人は、聖霊なる神の恵みによって信じる信仰を与えられ、感謝し、賛美し、神によって救われ、これからの生活を祝福されたのです。

⑥ 何によって彼は救われたのでしょうか

- ・「立ち上がって行きなさい。あなたの（ ）があなたを救った。」

⑦ 神様が私たちに求めておられることは何でしょうか。

- ・私たちが神様にもらっている大きな恵みに対して、（ ）すること。

## 〈作ってみよう〉

「牛乳パックを使って紙すきをしよう」

142ページをご覧ください。

牛乳パックで紙すきをして、ハガキを作ったら、神様にお手紙を書きましょう。

神様にありがとうって思うことを書こう。昨日一日あった出来事、学校のことや家のことを思い出してごらん。ありがとうって思うよね。

☆土曜日や夏期学校で行ってもよいでしょう。

## 〈目標〉

恵みの大きさ、偉大さに感動し、心から神様に感謝ができるように導きたい。

## 〈指導上の心得〉

恵みを受けるだけで、これに応え、感謝をしないことに対して注意を促したい。

## 〈展開例〉

- ・ イエス様が私たちに下さった恵みを数え上げ、多くの恵みが与えられているのに、御礼をしないとしたら、それはなぜなのかを共に考え、話しあってみましょう。
- ・ 神様が人に求めておられることは何なのかを考えてみましょう。
- ・ 神様の大きな恵みに対して、人はこれに応え、感謝を表し、賛美と喜びを持って自分自身を神様に差し出すことです。それを覚えましょう。

## 〈ワーク〉

1. この重い皮膚病だった人たちは、最初どんな気持ちだったろう。また、治ってからはどんな気持ちだったかな。
  - a) 最初 b) 治ってから
2. イエス様に癒していただくという恵みをもって、何人の人が感謝をしに帰ってきたっけ。
3. みんなは神様からたくさんの恵みを頂いています。
  - a) どんな恵みを頂いているのか考えてみよう
  - b) 恵みを頂いているみんなは神様にどうしなければいけないか考えて書こう。

〈答え〉1. a) 治りたい、辛い、等 b) 嬉しい、等  
2. 一人 3. a) 家族、友達、健康、ご飯、オモチャ、等 b) 感謝をし、神様を礼拝する

## 〈目標〉

神の恵みを覚え、感謝の生活へ導く。

## 〈指導上の心得〉

私たちは、イエスさまを通して示された神の一方的な愛の業（十字架・復活）を知らされることにより、初めて神への感謝をすることができる。恵み抜きにして神への感謝を語るのは律法的になることを注意したい。

## 〈展開例〉

Q. ある人は、友達からプレゼントをもらいました。それは、すごく欲しいものでその人はとても喜びました。みんながプレゼントをもらった本人なら、友達にどうしますか。

上の問いを子供たちに問い、考えさせ、自由に考えを聞いてみる。子供たちの実体験を聞くのもよい。子供たちが、自然に友達への感謝の思いを

抱くように導く。

次にこの話しがたとえ話であることを語り、友達・プレゼントが何をたとえているのかを考えさせる。ヒントを出して子供たちの口から答えるように導く。

答：「友達」＝「神」、「プレゼント」＝「罪の赦し、永遠の生命」（十字架、復活）

あらためて、プレゼントをもらったみんなは神様に対してどうするかを考えさせる。神への感謝の生活（神を礼拝する生活、神の戒めを守る生活、祈りの生活）へと自然に導く。

## 〈祈り〉

天の神様、イエスさまを通して示された神の愛、特に十字架・復活を覚えて感謝します。ぼくたち、わたしたちがそのことを覚えて神様への感謝の生活を送ることができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。



調べよう

レビ記14章から、重い皮膚病を患った人の清めの儀式について知らせる。



聖書箇所を読み取り

なぜ、9人は戻ってこなかったかを考えさせる。戻ってきた1人とどこが違うのだろうか？

- ①病が治る - 身体的回復 - イエスさまの癒し
- ②社会復帰 - 社会的回復 - 祭司の証明
- ③神との和解 - 信仰的回復 - 神への感謝と賛美

10人のうち9人までは③に至らなかった。イエスさまが奇跡の業を行なわれるのは①②のためだけでなく③のため。救われて神に感謝する生活をするため。①②は達成されても結局死んでしまうのだから、③が大切。③が達成された人は必ず神

様に感謝し賛美を捧げるようになる。9人はイエスさまが救い主だと分らなかった。



問37の理解

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそキリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」(テサ1 5:16~18) 救われたわたしたちは、喜び、祈り、感謝する生活を求められている。

わたしたちは、聖霊なる神様の御力によって、全生活にわたって神様に感謝をあらわすことを学び、神様を賛美し、また隣人をキリストに導くことができる。

月 日 「感謝 - 神の求め -」 中学科

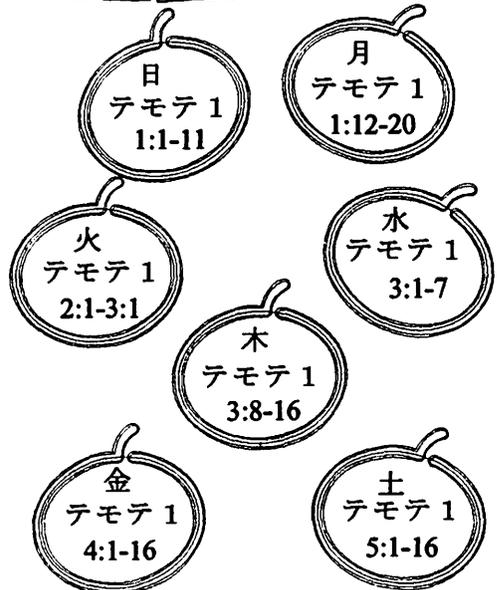
名前 \_\_\_\_\_

聖書：ルカ 17：11～19

問37

☆重い皮膚病を患った人の癒し

毎日聖書を読もう



☆感謝

暗証聖句

(テサロニケ 1 5:18)

テキスト

マタイによる福音書 13章 1～9節、18～23節

この箇所は種まきのたとえ、または四つの種の話として知られている箇所です。教師をしておられる多くの方は、この箇所のお話を何らかの形で耳にされていることでしょう。

〈種まきのたとえ〉

#### (1) 湖のほとりに座って

主イエスは湖のほとりに座って種まきのたとえをなさったと記されています。湖のほとりから、なだらかな丘陵地帯が始まります。この主イエスがおられたであろう、ガリラヤ湖畔の丘陵は畑であったと言われていました。その畑はガリラヤ湖畔からよく見え、そこに集まった群衆にとって、非常に身近なたとえが語られたのです。

そのたとえを語るために主イエスは湖畔に座っておられました。当時、ラビたちは民衆に教えるときに座って教えており、教えをなすときには座ってなすのが一般的であったのです。

#### (2) 種まきのたとえ

このたとえについては細々とした説明は控えます。ただ、当時の種まきの状況を説明しておくことにします。

当時は非常に雑な方法で種がまかれました。手で袋の中の種を掴んでばらまく、あるいは袋に穴をあけ、ロバの背に袋を載せ、種を蒔くのです。そして、蒔いた後に土地を耕し土の中に種を混ぜ込みます。その時に隠れていた石が出て来たり、茨が一緒にすき込まれることが起こります。この方法では、無駄になる種が非常に多く、まさにこのたとえのような状況があったのです。しかし、農夫は多くの収穫を期待し、また確信して種を蒔いたのです。

この種まきのたとえで示されるのは、神の国の福音宣教であり、蒔かれている種とは神の国の福音の言葉です。福音の種まきの働きはこんなにも無駄に見えるのですが、しかし、種を蒔く者は多くの収穫を期待して種を蒔く農夫のように、期待と

確信を持って福音の種を蒔くのです。

#### (3) 耳のあるものは聞きなさい

この箇所では、無駄になった三種類の種の後に、大きな収穫をもたらす種について語られています。失望に終わるような始まりと驚くほどの結果とが比較されます。ここで聞くように進められているものは「良い知らせ」であり、希望に満ちたものです。そのよい知らせを耳のあるものは聞きなさいと語られるのです。この良い知らせは、神様がその支配を立てられる喜びの言であり、神の国の言葉なのです。

〈たとえの解釈〉

#### (4) 悪いもの

マルコ福音書ではサタンと記されています。この者は人の心に蒔かれた神様の御言葉を奪い去っていく者です。その「悪い者」は神様に人を逆らわせようとする者であり、神様を信じないようにさせようとする存在であるのです。

#### (5) 道ばた、石地、茨の中に蒔かれた者

福音は多くの人々に語りかけられ、多くの人という土壌の中に蒔かれます。しかし、福音として語られる、この神の国の言葉を多くの人が悟らないのです。その悟らない人々こそが道ばた、石地、茨の中に種を蒔かれた者です。

#### (6) 良い地に蒔かれた種

「良い地に蒔かれた種は多くのみを結ぶ」。宣教の業は無駄にはならない希望に満ちたものであるとの慰めを受ける言葉です。

また、この言葉は神様の御言葉であり、そのような良い土壌があることは確実です。またキリスト者はそのような良い地とされているのであり、この確信ある言葉のとおり、多くの実をならすことができるのです。つまり、キリスト者は御言葉を悟る者とならされています。

|       |                        |
|-------|------------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問38           |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問39, 40 |
|       | ウェストミンスター大教理問答 問92     |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問90, 91    |

### 子どもカテキズム

問38 あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか。

答 神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心に従うことです。

#### ウェストミンスター小教理問答

問39 神が人に求められる義務は、何ですか。

答 神が人に求められる義務は、明らかにされた神の意志に服従することです。

#### 〈私たち自身は感謝を知らない〉

『子どもカテキズム』は、神への感謝という文脈の中で私たちの生活を理解します。信仰者の生活全体が、神の恵みに対する感謝の捧げものです。

その上で、問38は「あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか」と問います。この問答の背後には、私たちはその感謝のあらわし方を知らない、という考えがあります。私たちが「自然に」「自発的に」神に対する感謝を表すことができるのかと問うならば、いや決してできないと答えざるを得ないのです。私たちは神への感謝の筋道を知りません。むしろ私たちは罪人であり、感謝することを知らない傲慢な存在なのです。

#### 〈感謝を知る源としての聖書〉

私たちは「神のかたち」に造られており、心の内に刻み込まれた心の良心を通して神の御心を知ることができます。また、神は自然界を通しても語っておられます。しかし、罪の故に、わたしたちの神のかたちは歪んでおり、心の良心を通して神の御心を正しく知ることはできません。私たちの目も覆われており、自然界から神の御心を正しく知ることもできません。そのため、私たちは、神の御心を知らず、神に感謝することも知らないのです。それが罪人であるということです。

そのような罪人である私たちが神の御心を正しく知ることができるように、聖書が与えられました。「私たちがそれらを知るために神さまが与えてくださったものは何ですか。」「聖書、神の御言葉です」(問5)。

「聖書に書かれていることは何ですか。」「真の神さまが私たちのためにしてくださったことと、私たちに求めておられることです」(問6)。これはカテキズムの簡潔な目次です。私たちはこれまで、とりわけ、「神さまが私たちのためにしてくださったこと」を学んできました。神の救いの御業、福音を知り、神に生かされる喜びを知りました。そこに感謝が湧き出す源泉があります。福音の喜びが感謝を生み出します。そして、これから「神さまが私たちに求めておられること」を学びます。聖書に書かれている神の求めを学び、感謝をあらわすのです。私たちは、聖書を通して神を知り、神を知ってはじめて、私たちは感謝することをも知るのです。この感謝を原動力として、神から求められることをやはり聖書を通して知り、行うのです。聖書という土台の上で、感謝を原動力として生活するのです。

#### 〈聖書こそ感謝の唯一の道〉

神の御心には、私たち人間に明らかにされている部分もあれば、私たちに秘められている部分もあるでしょう。しかし、神が私たちに求めておられることはみな、聖書において明らかにされています。神の求めるところを聖書以外の何ものかに求める必要はありません。聖書は十分であり、完全です。聖書の御言葉こそ、私たちの感謝の唯一の道です。「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」(詩編119:105)です。私たちは御言葉を悟り、豊かな実を結ぶ者とされています。感謝と献身の実を結ぶのです。

テキスト            マタイによる福音書 13章1～9節、18～23節  
カテキズム        子どもカテキズム 問38

## 「感謝としての服従」

〔単元のねらい〕

信仰は神への服従の生活である。服従という言葉に抵抗を示すのは、古い人間の特質であり、またこの世で使われる服従という言葉のイメージによるのであり、キリスト者であっても、拘束、規制、不自由というイメージを抱く者も少なくないと思う。服従が「律法」として語られるときには、信仰生活はまさに律法主義の過ちに陥る。ここで我々が心がけたい事は、まさに律法主義の過ちを犯さないという点である。救いの喜び、恵みへの感謝が先行して、行いが後続する。そして、それは別の事柄ではなく、二つが一つであることを押さえたい。種まきの譬えがここで語られる。ヤコブの手紙が暗唱聖句としてかけられる。単に良い土地になりましょう、御言葉を行いましょと勧めても、無意味であろう。ここでも、主イエス・キリストが何をしてくださったのかを際立たせたい。

先週は、イエスさまによって重い病気を癒していただいた10人の人たちの話を聞きました。その内たった一人だけが、イエスさまのところに戻ってきて、「イエスさまのお陰で病が癒されました、ありがとうございます。」と言ったのでした。そして、イエスさまはこの人のことをとても喜んでくださったのでした。

僕たち私たちも、イエスさまに向かって、「僕を救って下さって、神さまの子にしてくださいありがとうございます。」と言いたいですね。今、皆と神さまを礼拝しているのは、「僕たち私たちが救って下さって、神さまの子どもたちにしてくださいありがとうございます。」と言っている事です。それを、信仰の告白といいます。それは、賛美になります。ですから、賛美歌を皆で歌うのです。こうして、「神さま、感謝します。」という事は、礼拝式の中で告白しています。けれども、それだけで良いのでしょうか。日曜日の30分だけ、「神さま、感謝します。」と言えばそれで済むのでしょうか。

ある日のこと、イエスさまは湖のほとりに座っておられました。そこに大勢の人たちが集って来ました。そこで、イエスさまは、舟に乗ってあたりに集って来た大勢の人たちにたとえ話を語り始められました。「種を蒔く人が、種まきに出て行

きました。蒔いている間に、ある種は道端に落ちてしまいました。その種は、鳥に食べられてしまいました。他の種は石だらけの土の少ないところに落ちて、直ぐに芽を出したのですが、けれども根がないために、直ぐ枯れてしまいました。また他の種はとげのついた茨の間に落ちて、茨によって、ふさがれてしまいました。ところが、他の種は良い土地に落ち、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなりました。」

この種というのは、神さまのみ言葉のことです。落ちた場所というのは、神さまの御言葉を聞いた人たちのことです。同じ種なのに、聞いた人によって、実が結ばなかったり、実が結んだりします。実を結ぶ人の中でも、百倍の実を实らせる人もいれば、三十倍の人もいます。それなら、僕たち私たちは、今、イエスさまの御言葉を聞いていますね。心の中に、神さまの種を植えていただいているということです。その御言葉を信じる人は、種を受け入れる人です。イエスさまが僕たち私たちのために十字架にかかって下さって、僕たち私たちが神さまの子にして下さったことを信じる人は、誰でも、神の子です。けれどももしも、信じているけれども、感謝はしないという人がいれば、その人は、本当に信じていることになるでしょうか。信じることとイエスさまの御言葉を行うことは、別々のことではありません。

イエスさまが好きなら、イエスさまのことを考えるでしょう。心の中にイエスさまを思う部屋がつくられて行くのではないのでしょうか。そして、どんどんそれは大きくなって、心の部屋全部がイエスさまのお部屋になってしまうのです。ここでは、イエスさまが主です。王様です。ここでは、イエスさまに喜ばれることをしたいと思う気持ちがいつもあります。けれども、悲しいことですが、いつもいつも、そうであるわけではありません。ときどき、自分が中心にいて、イエスさまを小さな、隅っこの部屋に追いやってしまうこともあるかもしれません。そうしまっていることの方が多いな、と思っているお友達のほうがきつと多いでしょう。でも、やっぱりイエスさまが悲しまれることはしたくないな。イエスさまが見ておられるんだったら、こんなことはできないな。そう思っているお友達も多いでしょう。

そしてその人は、間違いなく、イエスさまの御言葉が心の中に植えつけられている人です。そのお友達は、これからも、御言葉を聴き続けてください。心が強くなって、知らないうちに、豊かに実を結ぶのです。あせる必要はありません。種は生きています。神さまの御言葉は生きて働きます。だから、決して自分の力で、「実を結ぶぞ、実を結ぶぞ」って、がんばる必要はありません。自分の力では、決して実を結べません。種の中に力があるのです。植えられた種を毎日ほじくり返して、

根っこが伸びたかな、芽が出てきたかなと、見つめるなら、せっかくの種が死んでしまいます。僕たち私たちは、いつでも、信じて御言葉を聴き、信じてお祈りしていれば、必ず、実が結ばれるのです。

御言葉を聴くということと、御言葉に従うことと一つです。心から神さま感謝します。と言う気持ちがあれば、それを、態度に示しましょう。それは、日曜学校に来ることです。毎日お祈りすることです。お友達を大切にすること、助けてあげることです。一番のことは、日曜学校に来ていないお友達を誘ってあげることです。誘って誰も来てくれなかったお友達も、がっかりしないでください。イエスさまは誘おうしたそのことを喜んでくださっています。御心に従って、どんな立派な行いができたかどうかは問題ではありません。いつも神さまありがとうございますと言う感謝の心を持って御心に従いたいと思っているそのことが尊いのです。どっちが、いっぱい実を結べたのか、お友達と比べる必要もありません。神様は、それによって僕たち私たちを愛する思いを大きくしたり小さくしたりは決してなさらないからです。

僕たち私たちは、「神さま、感謝します。」と言う気持ちを、行いによって示したいと思います。問38を皆で暗唱しましょう。

---

### 今週の暗唱聖句

御言葉を行う人になりなさい。

ヤコブの手紙 1章 22節前半

---

## 〈目標〉

神さまへの感謝の気持ちを、神さまの教えに従うことによってあらわす。

## 〈導入〉

くだものの、種を用意する。(さくらんぼなど)  
 「この種、どうしてあげたら喜ぶかな?」・・・  
 「そう・・・土に埋めてあげようね。」  
 「土に埋めて、お水をやさしくかけてあげると、  
 どうなるかな?」・・・やがて、芽が出て、茎が  
 伸び、花が咲き実がなることを話す。

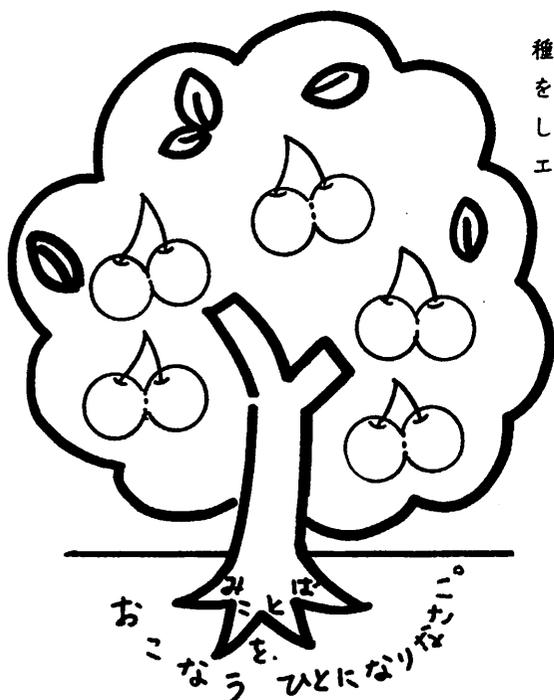
年長組の子が多いクラスでは、もし、種が道ばた・石・いばらの中に落ちたらどうなるか考えさせる。

## 〈展開例〉

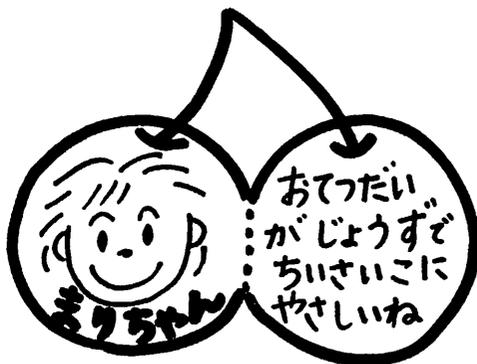
「分級室に6月の壁面飾りを作る」

・材料/色画用紙(きみどり・薄ピンク色)  
 ダンボール紙(幹の部分)

- ① 直径10センチの円を2つつなげて、片方に自分の顔を描かせ、もう片方に教師がその子の「いい所」を短く書く。
- ② 分級室の壁面に、桜の木を貼り、さくらんぼを突らせる。



種を土に埋めるように、神さまの御言葉(種)を聞いたら、心(やわらかな土)の中に大切にしましましょう。そうすれば知らない内に、イエスさまの子どもとしてスクスク成長します。



## 〈折り〉

神さまのこばを、よく聴けますように、そして忘れないようにお守りください。アーメン。

## 〈目標〉

私たちは、神を知ってはじめて感謝することも知ります。感謝を表わすために大切なこと・・・教会の礼拝への出席、毎日の祈り、友誼を大切にすること、友誼を教会に誘うことを教える。

## 〈考えてみよう〉

- ① 私たちは神様に感謝することができるの？
  - ・私たちは罪があるために本当は、感謝をすることができません。
- ② 神様に感謝するにはどうしたらいい？
  - ・聖書のみことばを読み、自分が罪人であることを知り、神様の恵みとその御業を知る。
- ③ 聖書には神様の御心が示されている。
  - ・それは、神様が僕たち私たちにしてくださったことと、神様が僕たち私たちに望んでおられること。
- ④ 神様が私たちにしてくださったことって何？
  - ・救いの御業・・・何の罪もないイエス様が罪のある私たち人間のために十字架に架かって死んで下さった。
- ⑤ 神様が私たちに望んでおられること。
  - ・神様への感謝・・・毎週主の日に教会に来て礼拝に出席する。
  - ・毎日お祈りする。
  - ・友誼を教会に誘うなど。

## 〈読んでみよう〉

手塚治虫さんが書かれた聖書物語があれば子供たちに貸して読ませましょう。マンガになっているので、物語がとてもわかりやすいです。

## 〈くるくる回して遊ぼう〉

種まきのたとえ話を思い出して、どんな意味か考えながら、くるくる回して遊ぼう。

143 ページをご覧ください。

## ・用意する物

色鉛筆、ペンなど。

厚紙、紙に穴を開ける物、細い針金、テープ、ハサミ

## ・やりかた

- ① 絵を好きな大きさに拡大してコピーする。
- ② 色をぬって円を切る。人間の絵は男の人と女の子の人を合わせて切り、いばらの木もまわりを切る。
- ③ いばらの木は、円のいばらのところに貼り付ける。
- ④ 折れ曲がらないように厚紙を貼る。
- ⑤ 円の真ん中に安全ピンなどで穴を開ける。
- ⑥ 針金にテープで人間の絵を貼る。針金は円の半径より長くしておく。
- ⑦ 円の穴を開けたところに針金を通して、少し手前に折り曲げる（直角に）。（危ないので、折り曲げたところはテープか何かを貼っておく）
- ⑧ 曲げたところをつまみにして回すと人間が回ります。

☆よい土地にまかれるように、私たちも種を突らせる働き人となるようにお祈りしましょう。

## 〈目標〉

聖書を読むことによって、神が私たちに何をなし、何を求めておられるかを知るように導く。

## 〈指導上の心得〉

感謝の一番良い表し方は、礼拝に出席し、御言葉に従う生活を送るようにすることだと覚える。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・この種まきのたとえの種と良い土地とは何を表しているのかをもう一度確認し合ひましょう。
- ・同じように実を結ぶということはどういうことかをみんなで話し合ひましょう。
- ・もともと種の中には実を結ぶ力が満ちあふれており、福音も同じです。それを素直に受け入れ、福音の力が働くままに従うならば、大きな実を結ぶことを覚えましょう。

・自分の力や努力ではなく、神の力によって従うことができる。そのようにされていることを喜び、感謝の証としてその力によって、従って行きましょう。

## 〈ワーク〉

1. 次の土地（左）にまかれた種はどうなったか、正しいと思う内容の番号と線で結びましょう。

- |           |               |
|-----------|---------------|
| a) 道ばた    | ア) 実を結んだ      |
| b) 石だらけの所 | イ) 鳥が来て食べられた  |
| c) 茨の中    | ウ) 根がないので枯れた  |
| d) 良い土地   | エ) 茨が伸びてふさがれた |

〈答え〉1. a - イ、b - ウ、c - エ、d - ア、

## 〈目標〉御心に従う。

## 〈指導上の心得〉

カテキズムのキーワードは「従う」である。「従う」＝「実を結ぶ」であることと、「従う」≠「耕す」であることの区別をつけよう。種まきのたとえから、神に従うことを可能にするのは、自分の力ではなく、神の力であることがはっきりと示されます。

## 〈展開例〉

- (1) 子供たちと一緒に種まきのたとえを絵にしてみよう。①道端に落ちて鳥が食べられる種、②石だらけの所で枯れている芽、③茨の地で伸び悩んでいる芽、④良い土地で実を結ぶ種。
- (2) たとえの意味を理解しよう。クイズにしてもよい。種＝福音（神の言葉、聖書）、種蒔く人＝神（イエスさま）、地＝私たち、良い土地＝「御言葉を聞いて悟る人」（クリスチャンの約束された姿）、鳥＝悪い者（サタン）。

(3) たとえの四つの土地は、同じ土地だとして、物語をつくってみよう。（一人一文ずつ順番に物語をつないでみよう。きっとドラマチックな物語ができますよ。）

（例）小学5年生の〇〇くんは日曜学校のクリスマス会に行った。とっても楽しかったのでまた行こうと思った。でも友達に笑われたので行くのをやめた。〇〇くんは中学生になった。勉強は難しいし、先生は厳しいし、部活動の先輩にいじめられたりした。また教会へ行ってみた。日曜学校の先生たちはみんな優しく、イエスさまが好きになった。でも日曜日は部活動に出ないと先輩にまたいじめられる。・・・〈中略〉・・・〇〇くんはイエスさまを本当に信じて洗礼を受けた。

## 〈祈り〉

人生の導き手である、まことの神よ。私たちのかたくなな心を耕し、あなたを愛し、あなたに生きる幸いをお与えください。

聖書箇所を読み取り



1～9節と18～23節までを見比べて、道端・石地・茨・良い地とはそれぞれどう言う意味かを説明させる。表にまとめさせると良い。

| たとえ                                 | 説明                                       |
|-------------------------------------|------------------------------------------|
| 道端 →鳥が食べる                           | 聞いて悟らない<br>→悪い者に奪い取られる                   |
| 石地 →根がない<br>枯れる                     | すぐ受け入れるが根がない<br>→艱難や迫害につまずく              |
| 茨 →ふさがれる                            | 思い煩い・富の誘惑に<br>ふさがれてしまう                   |
| 良い地<br>→100倍<br>60倍<br>30倍の<br>実を結ぶ | 御言を聞いて悟る<br>→100倍<br>60倍<br>30倍の<br>実を結ぶ |

深めよう



自分の生活に照らして、御言とどのように向き合っているか、特に礼拝中の態度について振り返らせる。良い地にまかれた御言は、

100倍、60倍、30倍の実を結ぶ。

問38の理解



御心に従うことは感謝をあらわすこと。御心は御言の朗読、ことに説教を通して明らかにされる。

それ以外に、自分で聖書を読むことも大切。

中学科では聖書を輪読することが多いと思いますが、時には教師が朗読したり、生徒に朗読させてみたりしてみましょう。  
目で見ても、声に出して、耳から聞いて理解します。内容を自分なりに解釈し、相応しい読み方を考えます。交読したり、群読したりしてみます。ナレーター、登場人物に分かれて読めば、劇のようです。

月 日 「感謝としての服従」 中学科

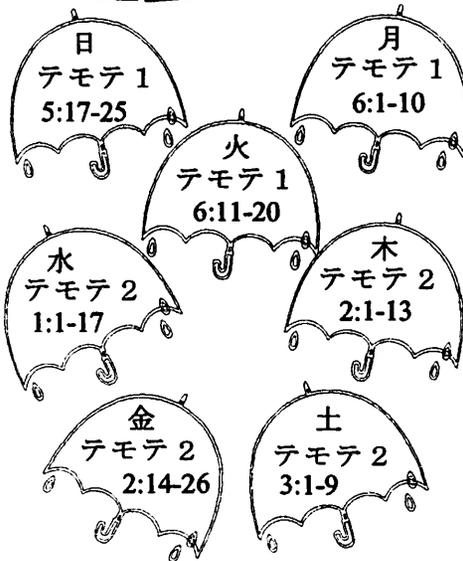
名前 \_\_\_\_\_

聖書：マタイ 13：1～9、18～23

問38

☆種まきのたとえ

毎日聖書を読もう



暗証聖句

(ヤコブ：22a)

テキスト

申命記 6章 16 ~ 25節

この箇所は主が掟を守るようにお命じになっている箇所です。この主の掟は、神様の御心であり、これを守ることの意味に注意しながら、この御言を読んでまいりましょう。

### (1) 主を試してはならない

6章の1節から15節までの箇所で、神様はイスラエルの民にこれから入れられる約束の地をもう得ているかのように、約束の地に入ってからのことを語られます。神様にとっては、未だ見ない土地もそのご計画の内にすでに得ているものとして語られます。

この1節から15節までの箇所でその与えられる土地で守るべき義務が語られています。しかし、そこでは義務だけが語られているのではなく、義務は祝福と恵みから起こってくるのであると言うことが教えられています。神様の恵みはイスラエルの努力と力によって与えられるものではなく、神様が全てを備えてくださる賜物であるのです。その最も大きな恵みである救いの業も、人間の努力によるのではなく、神様の賜物として与えられるのです。

神様が全てを備え与えてくださるのですから、そのような恵みを与えてくださる神様を信頼する事が人間に求められています。ですからマサで神様に不信を抱き、主を試したように主を試してはならないと命じられます。

### (2) 主の目に適うことを行えば土地を得る

17節から19節では、主の掟を守り、主の目に正しいことを行うことによって約束の地に入ることができると語られます。これは、すでに土地を得ているかのように語られてきた、それまでの箇所と矛盾しているように見えます。主のご計画の内ではすでに得ることが確実であり、その約束の内にはすでに得ることができるとして語られました。しかし、このところで、このとき置かれていた状況という現代的なことを語るのです。それに

より、イスラエルの民は主の御業がこれから起こるものと再確認し、その約束の土地を今なお自分たちは得ていないことに気づかされます。彼らは祝福の受け取り手であるのですが、未だ祝福を待望しているのです。神様の恵みは神様の要求の前提であり、また、その神様の要求を満たすことに対して約束された報いでもあるのです。その神様の要求こそ、神様の戒めと定めと掟です。

### (3) 子どもたちに教える

子どもたちに教えるというこの主題は申命記の中で何度か見られる主題です。

子どもたちに教えるべきことは、「あなたの神である主を恐れる」ことです。子どもたちにそのことに対して心備えをさせるのです。子どもたちはいずれの日にか、神様の命令に直面することになります。そのとき、彼らが全人格的に神様を愛することはどういうことかを学ぶのです。

また、このところで、教える段階の第二点は、神様の掟と法を教えるとは、単に知識として教えることだけではありません。つまり、ただ掟や法の内容を学ぶことだけではなく、それらが守られる理由を悟ることであるのです。

これは、この掟や法が人間から出たものではなく、エジプトから導き出された、偉大な力を持つておられる方から与えられたものであることを教え、神様の御支配を教えることなのです。

### (4) 神様の掟と戒めと法とは

神様の掟や法が人々に与えられるとは、神様によって御支配されることにほかなりません。その御支配は、神様が全てを与えて下さることが前提となっており、全てを与えてくださる神様を信頼して、賜物を与えてくださる神様に自発的に従うことであるのです。これこそが、神様の御心であり、その御心を示しているのが神様の掟と戒めと法と言われている律法なのです。

|       |                         |
|-------|-------------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問39            |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問40, 41  |
|       | ウェストミンスター大教理問答 問93 ~ 98 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問92         |

### 子どもカテキズム

問39 神さまの御心の、明らかにされた規準はどこにありますか。

答 十戒の中にあります。

#### 〈明らかにされた神の御心〉

神は、御自身の御心を繰り返し繰り返し私たちに  
お示しく下さいました。たとえば、はじめにア  
ダムとエバに対して、「園のすべての木から取っ  
て食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、  
決して食べてはならない」(創世 2:16b-17a)とお  
っしゃって、御心を明らかにされました。アブラ  
ハムに対して、「わたしは全能の神である。あなた  
はわたしに従って歩み、全き者となりなさい」(創  
世 17:1b)と語られ、御心が示されました。

これらにおいて明らかにされた神の御心は、人  
が神を喜び、神に服従して生きるべきであるとい  
うことです。大切なことは、常に神の恵みが先行  
していることです。神の恵みが与えられ、あるいは  
神の恵みの約束が示されて、その感謝として神  
に服従すべきことが示されています。私たちは、  
神に感謝して、神に従う生活を歩みます。

#### 〈出エジプトの御業〉

このことを端的にあらわす出来事が、出エジ  
プトの御業です。主なる神は、御自身のよしとする  
ままに、奴隷として生活していたイスラエルの民  
をエジプトの地から導き出されました。これは、  
イスラエルの民が大きかったからではありません。  
ただイスラエルの民に対する主の愛の故、また  
主の真実の故にほかなりません(申命 7:7-8)。

出エジプトに際して、主なる神は、民に対して、  
御自身を神とすること、御自身に信頼し従うこと  
をお求めになりました。すなわち、神の民になる  
ということであり、神の恵みに感謝して、神を愛  
するというにほかなりません。出エジプトの

民には、神を愛し、神に信頼し、神のみもとにと  
どまることが求められたのです(申命 6:24-25,  
7:9-11)。この神を愛し、神に従うことの道しる  
べとして、十戒が与えられました。ここに明文化  
された形で神の御心が示されました。

これは出エジプトの民というだけではありませ  
ん。神の民全体に与えられた神の明らかにされた  
御心です。私たちは、これを神に従うための手引  
きとするのです。私たちは、私たちの感謝と愛の  
表明の筋道としてこの十戒を受け入れます。

#### 〈神の御心を知る手引き、感謝の手引き〉

私たちはみな、神の御心に従って歩むことのか  
なわない罪人です。ですから、この十戒を完全に  
守り行うこと、この十戒を拠り所として神の救い  
を得ることはできません。私たちはみな律法の前  
に無力であることを確認しておきます。

その上でなお十戒の大切さは変わりません。私  
たちは十戒によって自らの罪を指摘され、救いの  
必要性を示されます。罪の赦しと新しいいのちの  
ために贖い主イエス・キリストを必要とすること  
を教えられ、キリストを待ち望ませられるのです。  
また、救われてなお私たちの目は覆われており、  
心は曇っています。私たちはなお、神が何を喜ば  
れるのか、神が何を求めておられるのかを十分に  
知ることはできません。私たちはなお、神の御言  
葉を通して、とりわけ十戒を通して、神が求めて  
おられること、神が喜ばれることを学ばなければ  
なりません。私たちは、十戒を通して神への感謝  
と献身の道を学び、喜びをもって主なる神に自ら  
を捧げるのです。

テキスト 申命記 6章 16 ~ 25節  
カテキズム 子どもカテキズム 問39

## 「感謝に生きる道標 - 十戒 - 」

〔単元のねらい〕

第三部第二章が始まる。歴史的カテキズムは、キリスト教倫理を十戒によって指し示してきた。我々も、ここで十戒を語る。十戒とは何か。それは、神からの愛の手紙である。神から民への愛の贈り物である。真実の愛に裏打ちされて、戒めが語られ、掟が命じられている。十戒は、もともとご自身の民として救い出したイスラエルを、救いの恵みの中に留まらせ、自由と愛と感謝によって健やかな地上の旅路を導くための道標である。それ故、この枠の外には、人を生かす真実の自由はない。四回に渡って、十戒に込められている、福音の神からのご自身の民への熱情の愛を聴き取ることに集中する。ここを間違えると、この十戒の学びによる、日曜学校の礼拝式は成立しないからである。我々も神の愛に燃やされて十戒を語らせていただきたい。

今日から、皆と一緒に、「十戒」を暗唱して行きます。礼拝式の中で、ずっと唱えて行きたいと思えます。でも、今日皆で、唱えてみてどんな感じでしたか。「なんだか、難しそうだな。してはならない、してはならないって、厳しそうだな。」つまり、とっても素敵な言葉だなあと言うよりも、ちょっと大変だなあ、いやだなという感じを心に抱いているかもしれません。大人の礼拝式では、毎週、先生たちは心からの感謝と喜びを持って、十戒を唱えています。なぜなら、この十戒を与えてくださったのは、主イエス・キリストの父なる神さまだということを知っているからです。僕たち私たちが救ってくださり、神の子としてくださった愛の神さまが教えて下さり命じてくださるものだからです。

十戒は、一番最初、モーセさんに告げられました。神さまはこのモーセを通して、エジプトで奴隷として苦しめられていたイスラエルの人々を神さまの約束の地、カナンに導かれたのです。そして、約束の地に入ろうとするその時、神さまは、モーセを通して、十戒を与えられました。これは、石の板に神さまご自身が刻みつけてくださった言葉です。十の言葉の一つ一つは、僕たち私たちが生かすための命の言葉、愛の言葉なのです。

ある人が、金魚鉢を見ていました。きれいな赤い金魚が楽しそうに泳いでいます。でも、ずっと見ているうちに、その人は金魚がかわいそうになって来ました。「僕は、こんな広い世界に生きているのに、金魚は、こんなちっぽけな水槽の中に入れられている。そうだ、この金魚たちを外に出してあげよう。」そうして、この人は、金魚鉢から金魚を出してしまったのです。皆のなかにそんな風にした事のある人はいないでしょう。なぜなら、いくらちっぽけな水槽だからといって、お魚は水の中でしか生きられませんからね。魚にとって、海の中、水の中においてこそ、生きられるのです。つまり、自由なのです。水の中は肩苦しくって、息が詰まってしまうなどと、魚は思っていない。この陸の上の世界の方こそ、息が詰まって、生きにくいのです。生きられないのです。

それなら、僕たち私たち人間は、どこで、自由に、喜んで、楽しく、嬉しく、感謝して生きることができるのでしょうか。それは、ここ、陸の上ですか。そういう意味ではありません。僕たち私たち人間は、神さまに造られました。神さまの方向を向くように造られました。神の命の息を吹き入れられて人間は、本当に生きることが出来るのです。ですから、僕たち私たちが自由に、人間らしく生きられるのは、神さまの御言葉の中です。

神さまの御言葉に背いて生きる時に、それは、人間にとって、罪です。命がありません。体は生きていても、本当の命、永遠の命を持って生きることではできません。

神さまは、僕たち私たちがこれからもずっと、神さまの子どもとして生きてゆくことができるように、道を造ってくださったのです。この道は天国への安全で確実な道です。また、この道は、ここから出ると危険ですという線です。電車に乗ったことのあるお友達は、「ホームに電車が入ります。危険ですから、白線の内側までお下がりがください。」と言うアナウンスを聞いたことがあるでしょう。白い線の外に行ったら、危険です。びゅうっと電車が入ってきたら、飛ばされてしまうかもしれません。あるいは、手や頭がかすったら、死んでしまうこともあります。だから、白線の内側まで下がらなければいけませんね。僕たち私たちが、神さまの十の言葉の内側、つまり、神さまを信じて、神さまの御心がはつきり奮かれている御言葉に導かれて、楽しく、自由に生きられるのです。

僕たち私たちが、イエスさまの十字架と復活の御業によって救われています。神さまの子とされています。皆は、地上にいる限りいつまでも、この神さまの愛の中に生きて行きたいと思いませんか。神さまはそのためにこの十の言葉を僕たち私たちに与えてくださったのです。だから、皆で一

緒に覚えたいと思います。大切な事はここでもお祈りです。「天のお父さま、この言葉を心の中に刻み付けてください。わたしがこの言葉を守って過ごせるようにいつも一緒にいてください。」こう祈りましょう。祈りのなかで、覚えましょう。

この十の言葉のなかで、生きている人は、神さまに喜ばれます。だから、自分も楽しくなるのです。そればかりか、あなたの周りにいる人たちも喜んでくれるはずですよ。みんなが楽しく嬉しく仲良く過ごせるのです。神様はそのために、この戒めを与えてくださったからです。誰一人も嫌な思いをせず、誰一人も悲しい思いを持たせないために、この十戒を与えられています。お祈りしながら、この御言葉を守って行きましょう。

けれども最後に言います。今そう決心しても、もしも、僕たち私たちがこの言葉を明日、いえ、お家に帰ってすぐ破ってしまったらどうなるのですか。もう、神さまの子どもではなくなってしまうのでしょうか。いいえ、違います。僕たち私たちが、イエスさまによって救われたのですから、破ったからもう子どもではなくなってしまうということはありません。けれども、もちろんそのままにしては、神さまが悲しまれます。その時には、素直に「ごめんなさい。」と悔い改めるのです。そして、もう一度、始めることができるのです。いえ、何度でも何度でも、新しく始めることができるのです。

---

### 今週の暗唱聖句

またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、  
正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。

申命記 4章 8節

---

〈目標〉

神さまは、「神さまの子ども」である私たちに、10の約束（戒め）を、愛をもって教えて下さったことを知る。

〈導入〉

横断歩道と、止まっている車の絵を見せる。  
「横断歩道を渡ったことがありますか？ 横断歩道を渡れば、車にぶつからないで、安全に渡ることができますね。」

神さまは、私たちに「天国への安全な道」を教えて下さいました。

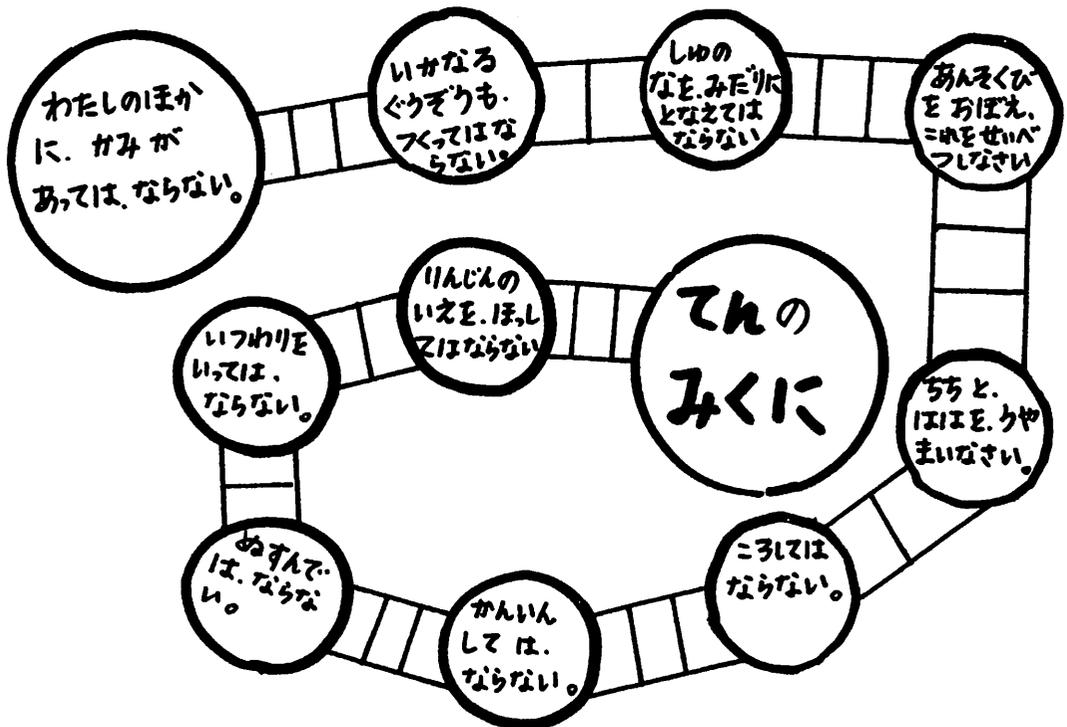
〈展開例〉

屋外編（お天気の良い日など）

① 公園や、広場の地面に「横断歩道」と「10の駅」と「終点」（天国）を描いて、横断歩道はケンケン（片足飛び）で、駅は両足をそろえて渡って遊びます。「天国」目指して、進みましょう。

屋内編 「横断歩道すごろく」

① カレンダーなどの裏紙に、「横断歩道すごろく」を作り、サイコロを振って、目数だけ進みます。10のポイントを作り、円の中に十戒を書いておく。「天国」目指して、進みましょう。（年少児が多いクラスでは、サイコロの目を1・2・3のみにするとよい。）



〈折り〉

10の約束を、聴いて、従うことができますようにお守り下さい。アーメン。

〈目標〉

十戒を守ることを学ぶ。神様は私たちをとっても愛してくださっています。そして、私達に神の民となることを求めています。私たちの感謝と愛を神様に表す方法として、十戒を守ることが必要なのです。

〈読んでみよう〉

先生と子供たち一緒に十戒を読む。

読み終わった後にどんなふう思ったか、イメージと合うものに○をうってもらおう。

- ・してはいけないことばかりでいやだ!
- ・むずかしい!
- ・こんなに守れるかなあ?
- ・ちゃんと守ろう!
- ・僕、私はぜったい守れる!
- ・神様が大好きだから守れるようにお祈りしよう!

窮屈な、あまり良くないイメージを抱いた子が多いかな?

〈考えてみよう〉

① 道を歩いていると信号機を見かけます。赤色は止まれです。止まれの時に渡ってしまったら、どうなるかな? 横を走る車とぶつかってしまいます。この信号機の「赤色=止まれ」、「黄色=注意」と同じように神様は私達が安全に、神様の道を歩んでいけるように、神様を信じて進んでいけるように、私たちを守ってくださるのです。そして、この十戒があることによって、私たちは生きることができるのです。

② 十戒がなかったら?

十戒がなかったら、私たちはどんなふうにか神様を礼拝したり、賛美したらいいかわからないし何をしたら神様が悲しんじゃうのか喜んでくれるのか、わからない。神様は私たちを愛する故に十戒を与えてくださったのです。

〈覚えよう〉

十戒に何が書いてあるかよく、考えながら何回

か読んでみよう。そして、半分づつでもいいので覚えて来週に分級の時に発表しよう!

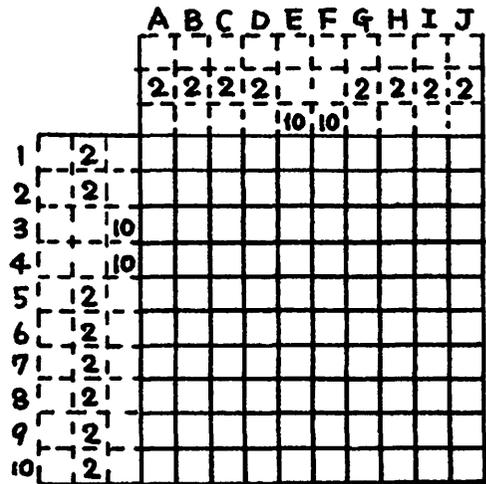
〈やってみよう〉

「イラストロジックで遊ぼう!!」

タテ、ヨコの数字の数だけマス連続して黒く塗りつぶす。

さあ、なにができるかな?

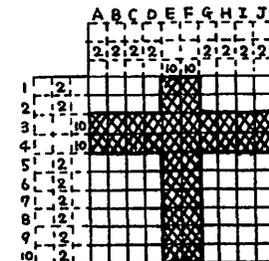
・問題



・やりかた

タテ・ヨコにある数字の分だけ、マスを埋めます。列について、2の列は2マス埋め、10の列は10マス埋めます。行も、2の行は2マス埋め、10の行は10マス埋めます。行と列の組み合わせから、埋めるべき位置を探してください。

・答え



① まず、一番大きい数字のタテの列、EとFをぬる。

② ヨコの列の3と4をぬる。

もうこれで完成です。

十字架ができあがりました。

## 〈目標〉

神様が喜ばれること、求めておられることが、十戒に要約されていることを覚えるように導く。

## 〈指導上の心得〉

十戒はまた、私たちに罪を示し、救いへと導く役割を担っていることを伝える。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・十戒の戒めを知っているか、またそれをどう思っているかをみんなで話し合ってみよう。
- ・十戒がなぜ与えられたかを考えてみよう。十戒は、私たちが神の御前で正しく生きる道筋を示すものである。
- ・十戒を通して、神が喜ばれること、求めておられることを知り、その恵みを覚え、感謝と喜びをもって従う生活へと導きましょう。

## 〈ワーク〉

1. 十戒を全部書いてみよう。
2. 十戒を書いて、そして、読んでみて思ったことを素直に書いてみよう。
3. 十戒は人間が神様の御前にどのように生きればよいか教えるために神様が与えて下さったものです。この十戒は今でも私たちにとって、生活していくのに大事なもののかな？
  - a) 神様の御思いが書かれているものだから大事なもの
  - b) 古いものだからどうでもいい
  - c) 大事にしてもしなくてもどっちでもいい

〈答え〉3. a

## 〈目標〉

神の愛のあらわれである十戒に、感謝と信頼をもって従いたい。

## 〈指導上の心得〉

イスラエルの民は「主が命じられた戒めと掟をよく守」(17節) ったから神の恵みを受けたのではない。神の救いの業はすべて賜物として与えられたことを覚える。このことは20節以下の子供の質問に対する答えにおいて、出エジプトと土地授与という恵みの出来事をふまえた上で神の戒めへの服従が求められていることからわかる。

## 〈展開例〉

- (1) 16節・・・荒れ野の旅の途中、マサ＝メリバで水不足のためにヤーウエを試みた(出エジ17:1～7、詩編95:8～9)ことを指す。20～25節・・・親子の信仰問答。信仰の教育と伝達は家庭でな

された。「これらの定めと掟と法」(20節)は律法のこと。子供への答え・・・出エジプト→カナンの地授与→神の命令への服従による幸い、の順に語られることは重要。

(2) 神の戒めに服従することによって、真の自由と平安を得た人物や、逆に神から離れて不自由になった人物を聖書から探してみよう。前者・・・アブラハム、ノア、パウロなど。後者・・・アダムとエバ、放蕩息子など。(もちろん、前者が完全に従い得たわけではなく、後者が背き続けたわけではない。)

(3) イスラエルの民になりきってみよう。はじめはエジプトの地で奴隷、次に神の導きでエジプト脱出、荒れ野をさまよひ、ついにカナンの地に入る。この時のイスラエルの人々の不安、喜び、かたくなさなどについて話し合う。最後に神様に感謝し、それぞれに自分の好きな御言葉をひとつ選んで、毎日それに従えるように心掛けてみる。

問39の理解



神様の御心の明らかにされた基準が十戒の中にある。神様が10本の指で教えられるようにまとめて下さった。

「道徳律法」という言葉は中学生には教えておきたい。

律法の三効用

- ①市民的効用・・・この世に罪を知らせる。
- ②教育的効用・・・キリストに招く。
- ③規範的効用・・・栄光をあらわす。

も、板書してノートさせたい。教われたわたしたちに特に関係のある第三効用についてよく理解させ、神様への感謝をあらわすため十戒を学ぶことを動機付けとしたい。

聖書箇所を読み取り



主が命じられた戒めと定め（律法）によって示されなければ、何が悪いことなのか分らないほど墮落してしまっていることに着目させる。20節の質問は生徒たちの質問であり、この質問は大人になればなるほど深くなる。世の中の価値観を知るにつれて、さらに何が悪いことなのか分らなくなる。21節以下を自分で答えられるようにしておくように勧める。

1956年パラマウント映画「十戒」

DVD・ビデオで観てみよう。聖書通りのところ全然違うところ、チェックしながら観ると楽しい！

月 日「感謝に生きる道標-十戒-」中学科

名前 \_\_\_\_\_

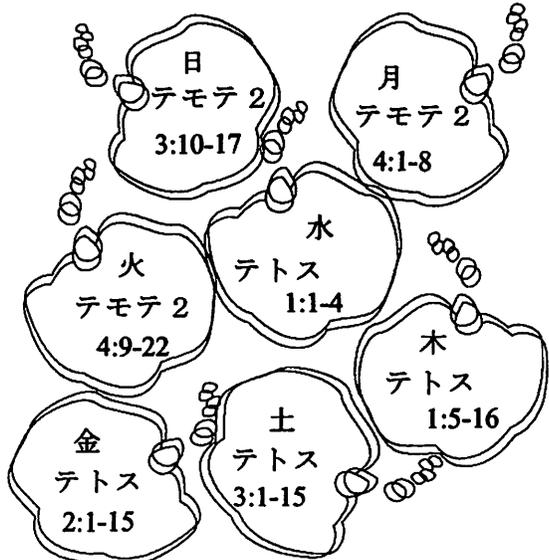
聖書：申命記 6：16～25

問39

☆十戒

☆律法の三効用

毎日聖書を読もう



暗証聖句

(申命記4：8)

テキスト

マルコによる福音書 12章 28 ~ 34節

この箇所は律法の要約が示されている箇所です。律法の要約は共観福音書全てに記されています。それほどに、これは重要なものであり、キリスト者の生活を支配するものなのです。

### (1) どの掟が第一か

この直前の箇所までのところで、主イエスを陥れようとする様々な質問が主イエスに浴びせられてきました。その受け答えを聞いて、一人の律法学者が「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」と尋ねます。様々な律法の規定がある中で、律法全体を集約することに律法学者たちは関心を持っており、そのような背景の中で、ある律法学者が、主イエスにこのように問うのです。この問いはどちらかというところまでの悪意あるものと言うよりは、純粋な問いであると言うことができるでありましょう。

### (2) イスラエルよ聞け

「イスラエルよ、聞け。私たちの神である主は、唯一の主である」との言葉は、当時のユダヤの人々が朝夕繰り返してきた信仰告白の言葉です。主イエスはこのように語ることによって、御自身がユダヤ人として受けてきた伝統に一致していることを示し、ただ一人の神様を証言しています。これによって、ユダヤ教から批判的に見られていた主イエスは、まさにそのユダヤの伝統を受け継ぐ、同じ唯一の神様を拝する者として御自身を人々に明かししているのです。そして、その上で、主は律法の要約を語ります。

神様は唯一であるとの信仰はキリスト者もなすべき信仰告白であり、これこそ、私たちの信仰です。

### (3) 愛

主イエスは神様は唯一の方であると告白なさった後、実際に律法の要約をなさいました。主はそ

の中で、二つのことをお答えになっています。この二つは一般に十戒の第一戒から四戒と第五戒から十戒をまとめたものとして扱われています。主が示されたこれらの第一の掟の両方を支配している動詞は「愛する」です。主イエスは律法の根本的な教えとしてこの二つの愛の戒めを結合しておられます。この律法の総括は、主イエス御自身の権威によってなされているものであるもので、キリスト者にとっては、決定的なものなのです。

### (5) 愛の三つの対象

このところで、愛の三つの対象が示されています。それは、a) 神様、b) 隣人、c) 自分です。

#### a) 神への愛

これは神様への礼拝に結びつけられるものであり、礼拝は義務によってなされるものではありません。神様の愛に対する感謝によって押し出される、神様への愛に結びついています。つまり、神様と私たちとの関係は愛によって結ばれているのです。

#### b)、c) 隣人への愛、自分への愛

このところで自己愛は否定されてはいません。しかし、自己愛を命じておりません。人間は基本的に誰もが自分自身を愛しているものです。その自分自身を愛するのと同じ仕方で自分の隣人を愛するべきだと教えられているのです。つまり、我々が、自分に寛容であり、関心を持ち、自分のために時間を割き、自分の幸せを願うのと同じ仕方で隣人を愛すべきことが教えられています。

ここでの隣人とは、自分の周りにいる近しい人々というだけではありません。自分が嫌だと思う者、自分の敵のような者をも含むのです。

### (6) 愛は愛を呼び起こす

この掟は神様の愛によって呼び起こされるものであり、強制されるものではなく、自発的に実行できるものなのです。

|       |                    |
|-------|--------------------|
| カテキズム | 子どもカテキズム 問40       |
|       | ウェストミンスター小教理問答 問42 |
|       | ウェストミンスター大教理問答 問98 |
|       | ハイデルベルク信仰問答 問93    |

### 子どもカテキズム

問40 イエスさまが教えてくださった十戒の要約は何ですか。

答 「わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と、「隣人を自分のように愛しなさい」です。神と人への愛、二つで一つの愛に生きることです。

#### 〈十戒の要点は愛すること〉

十戒の位置付けについて、私たちはすでに学びました。すなわち、十戒は、先行する神の恵みに応えて神に感謝と献身をあらわす生活の手引きです。神への感謝と献身の道筋として、十戒を読み解くのです。十戒は、神の恵みに対する神の民の応答にほかなりません。

そうであるならば、十戒の要点が「愛すること」であることも理解できるでしょう。十戒の文言は「してはならない」という否定文であり、表面的には人を拘束し、人を不自由にするように思えます。しかし、その要点は、神を愛することと、その神が愛しておられる人を愛すること、この「愛」ということにあるのです。十戒は、神を喜び、人を生かす神の愛の御言葉にほかなりません。十戒は、積極的に「愛すること」を教えています。

#### 〈愛することは聖書全体のメッセージ〉

問40で示されている十戒の要約は、ある律法学者が「律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねたときに、主イエスがお答えになった御言葉です。主イエスはこの要約をお答えになって、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と語られました（マタイ22:40）。ですから、この要約は、ただ十戒の要約というだけではなく、聖書全体の要約であり、聖書全体の基本的なメッセージです。

#### 〈私たちが造りかえる神の愛〉

聖書は、愛することを求めています。それは、神が愛するお方だからです。主なる神は、天地を造り、この世界を造られました。そこには、造り

主としての世界に対する愛があります。さらに、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛され」（ヨハネ3:16a）ました。この神の愛によって、私たちは救いに入れられたのです。この神の愛によって、私たちも愛する者へと変えられました。私たちは愛することを知らない罪人でした。しかし、神の愛によって、いまや愛する者へと造りかえられたのです。愛されることから、愛することへ、です。

#### 〈神を愛することと人を愛すること〉

私たちの愛は、二つの方向性を持ちます。一つは、造り主にして救い主である主なる神を愛することです。これは縦の関係と言えるでしょう。具体的には、聖書の示すまことの神を神として、この神にのみ信頼し、この神をのみ礼拝することです。神は唯一の主なのです。もう一つは、隣人を愛すること、他者を愛することです。これは横の関係と言えるでしょう。

この二つ、縦と横の関係は深く結びついており、一つの事です。というのは、神を礼拝し、神を正しく神として仰ぐときにこそ、私たちは隣人を受け入れ、愛することができるからです。わたしたち自身は愛を知りません。私たちは、神から離れているならば、自分をさえ正しく愛することができないのです。神を愛するときにはじめて、私たちは自分を正しく愛し、また隣人を正しく愛しはじめます。神を愛する者こそ、自分を正しく愛し、隣人を正しく愛する者なのです。ここに、十戒の基本的なメッセージ、すなわち聖書の基本的なメッセージがあります。

テキスト マルコによる福音書 12章 28 ~ 34 節  
 カテキズム 子どもカテキズム 問40

## 「神と人への愛」

〔単元のねらい〕

我々は神の愛に取り囲まれて生かされている。神の愛が心に注がれて生かされている。それゆえに、私どもの内にも、神への愛が呼び覚まされている。この愛は、もともと私どもの内にはなかった。我々に、聖霊によって注がれている神の愛は、真の愛である。この愛が神と人への愛へと私どもを促す。主イエスは十戒を要約して、神と人への愛とされた。愛の掟として十戒を語る。

ある日のことです。イエスさまが神殿の境内を歩いておられました。祭司長や律法学者、長老がやって来て、イエスさまを非難しました。イエスさまが、エルサレム神殿から、商人を追い出しはじめられたからです。それに対して、イエスさまは堂々と答えられました。そこで、一人の律法学者がイエスさまに質問をしました。

「旧約聖書に記されている多くの教え、掟のなかで最も大切なのは何ですか。」と仰ることです。イエスさまは、旧約聖書に記されている言葉を二つ引用して、お答えになりました。それが、今日のカテキズムの問40です。「第一の掟はこれである。イスラエルよ、聞け。私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主をあいしなさい。」「第二の掟はこれである。隣人を自分のように愛しなさい。」つまり、神さまとお友達への愛です。順序は、最初に神さまへの愛、次に一緒にいる人たちへの愛となります。しかも、この二つは別々なものではありません。二つは一つです。神さまを愛しているけれど、人間は愛する事はできないというのでは、本当に神さまを愛していることにはなりません。また、人間を愛しているけれど、神さまは愛する事はできないと言うのも、本当の愛で人間を愛していることにはなりません。旧約聖書の教えは、この二つにまとめられることができるとイエスさまは教えて下さいました。十戒をまとめるとこの二つになるのです。愛に生きることです。

何故、イエスさま、神さまは、僕たち私たちに

「愛に生きなさい。愛して生きなさい。神さまと人々を愛することが人間にとって一番大切なことなのです。」と仰るのでしょくか。それは、僕たち私たちを幸せにしてあげたいとお考え下さる神さまの愛のゆえです。神さまは、僕たち私たち皆を、仲良く、感謝して、楽しく生きてゆけるようにするために、愛を命じられます。愛する事を止めたら、人間は生きてゆけなくなるのです。神さまを信じて生きて行けなくなるのです。

僕たち私たち人間には、意地悪なところがたくさんあります。「これは、わたしのだから絶対使わせない。」とか「友達が泣いているけれど、いい気味だ。」とか「自分は困っていないから、困っている人を見ても知らんぷりしてしまおう」とか、意地悪心があります。冷たい心です。恐ろしい心です。

けれども、神さまには全くそんなところがありません。神さまが「これをしてはいけません。こうしなさい。」と仰ることは、すべて僕たち私たちのためなのです。祝福のため。幸せのため、救いのため、喜びのためなのです。意地悪で「これをしてはいけません」と仰ることなど決してありません。

でも、僕たち私たちは、愛に生きること、イエスさまを信じて生きることは素晴らしいなど思っても、なかなかそのように、できません。なんだか、自分が損するように思ってしまうのです。自分が、なくなってしまうような気がするのです。

ある小さな男の子が、ビンの中に入っている、飴を見つけました。とても、おいしそうです。小

さな手をビンの中に、入れました。そして、精一杯手を広げて、できる限りの飴玉を握り締めました。そして、やった一とばかりに、手を抜こうとしました。その時です。事件が起きました。どうなったと思いますか。そうです。手が抜けないのです。直ぐにでも、飴を食べたくて仕方がないのに、手が抜けないのです。皆だったら、その時、どうしますか。きっと、握っている飴を一つ二つ落として、手のひらを小さくして、手を抜くでしょう。いつまでも、手に握った全部の飴が欲しくて、手を離さなければ、その抜けないままです。

神さまと人を愛さないで、自分のことばかりを第一にすること、それが罪です。罪の中を生きる人は、もうそこで、心の中に、光がありません。暗いのです。楽しい楽しいと思っても、本当の楽しさではありません。悪魔の誘惑に負けてしまった悪い楽しさです。汚れた楽しさです。本物の楽しさではありません。神さまが、僕たち私たちに、十戒を与えてくださった理由は、愛に生きなさいということです。今の小さな男の子で言えば、「手を離して御覧なさい」ということです。神さまは仰います。「あなたが、一番幸せに暮らせるように、あなたたちが、喜びの中で暮らせるように、神さまを愛し、お友達を愛してごらん。

十の言葉をよく聴きなさい。そして、その通りにやって御覧なさい。自分勝手にしないで、私の言うとおりにやって御覧なさい。そうすれば、祝福の中で、生き続けることができるのです。」

どうしたら、愛に生きられるようになるのでしょうか。お友達に意地悪する心と戦うことができるでしょうか。イエスさまを思うことです。イエスさまが僕たち私たちをどれほど愛してくださるかを忘れずにいることです。昔も今も、イエスさまは僕たち私たちを愛しておられます。

昔、良いサマリア人の譬で、学びました。「良いサマリア人」のイエスさまは、傷だらけの僕たち私たちを、お見捨てになられませんでした。ご自分の命をかけて助けてくださったのです。先生は、イエスさまによって、助けていただきました。ですから、イエスさまを愛しています。ですから、少しでも人を愛せるようにとお祈りするのです。皆もイエスさまが好きでしょう。感謝しているでしょう。命を助けていただいたでしょう。そのイエスさまから、天のお父さまを愛し、お友達を愛しなさいと命じられています。今週、イエスさまから頂いた愛を今までできなかつた人に分けてあげませんか。

---

### 今週の暗唱聖句

彼は答えた。

『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、

あなたの神である主を愛しなさい、

また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

ルカによる福音書 10章 27節

---

〈目標〉

神さまを第一にすること（礼拝を捧げること）、  
家族やお友達を大切にすることを、神さまが望んで  
おられることを知る。

〈導入〉

「〇〇ちゃんの、『だーいすき』は、なあに？」  
・・・（イエスさま・おとうさん・おかあさん・  
△△ちゃん・ポチ・・・など、たくさん言ってく  
れるでしょう）

「たくさん大好きでうれしいね。神さまに、たく  
さんの大好きをありがとうございます、と感謝し  
ましょう。」

〈展開例〉

「『\_\_\_\_\_が、よろこぶこと、  
なんでもするヨ券』を作る」

・材料／クーピーペンシル

色画用紙で作ったチケット

・今日は「父の日」ですが、個別のケースを配慮  
しながら、「おかあさん」「おばあちゃん」な  
どにプレゼントしてもよい。

①チケットの中に、お父さん（あるいは、お母さ  
ん等）の顔を描く。

②「\_\_\_\_\_が、喜ぶことなんでもするヨ券」  
の\_\_\_\_\_の所に、いつもの呼び方を書き入れる。

（パパ・おとうちゃん・・・等々）

字の書けるお友達は、ありがとうの気持ちを一  
言書き添える。

『あなたのちちとははをうやまいなさい』  
(聖書)

\_\_\_\_\_のかお

\_\_\_\_\_が、よろこぶこと  
なんでもするヨ券

\_\_\_\_\_より

☆して欲しい事を、なんでも言ってね。

\* 私たちを愛して、大切にお育てくださる神さまが「喜んでくださ  
ること」は、「私たちが真心こめて礼拝をささげること」です。

〈折り〉

これからも、家族やお友達といっしょに礼拝を捧げることができますように。アーメン。

〈目標〉

十戒が教えているのは愛すること、「愛の生活」です。神への愛・人への愛を行うこと。自分を愛するように神様が喜ばれること、人が喜ばれること人が喜ばれる生活をしていきましょう。

〈考えてみよう〉

① 愛って何だろう

・愛とは分かりやすく言うと「好き」っていうこと。

② 愛ってどういうことだろう

・ケンカをすることかな？ 嫌いな人にも優しくすることかな。  
・私たちのために十字架にかけられたこともイエス様の愛です。

③ じゃあ神様に喜んでもらうことって何かな？

・本当の神様を礼拝することかな  
・じぞうとか偶像をおがむことかな  
・友達にいじわるをすることはどうだろう  
・お祈りをするのは？  
・うそをつくことはどっちだろう

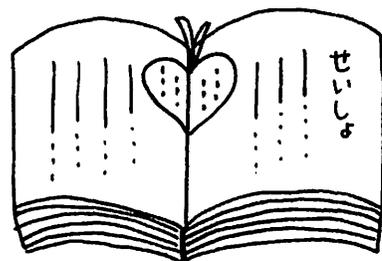
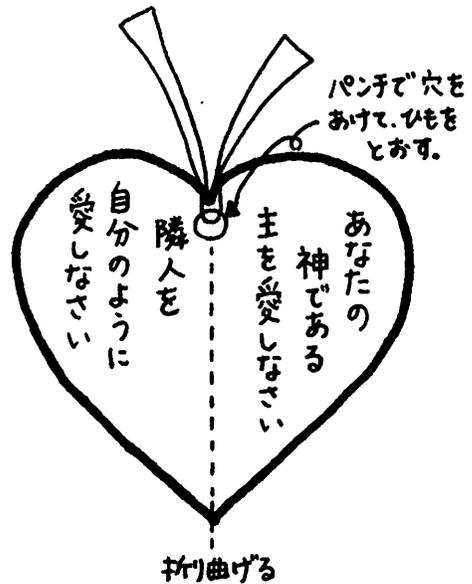
みんなで話し合ってみよう！ 他にもどんなことが喜ばれるか考えてみよう！

〈やってみよう〉

「ハート型しおりを作ろう！」

・用意するもの

色画用紙、はさみ、かくもの(色鉛筆やペン)、パンチ、ひも



こんな感じになります。  
開くとハートがとんできそう。

〈折り〉

天にいますお父さま、いつもわたしたちを愛して守ってくださいありがとうございます。

どうか神さまとみんなを心から愛することができますように。

## 〈目標〉

十戒の意図するところを覚え、神の愛によって生かされることを学びたい。

## 〈指導上の心得〉

神を愛することで、自分と隣人を正しく愛することができるようになることを覚える。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・十戒の要約は何かを、みんなから聞き、その共通の言葉について話し合ってみよう。
- ・神を愛するということはどういうことか。唯一の神を信頼し、礼拝すること。人を愛することはどういうことか、自分の敵や嫌いな人を含む隣人を愛することである。
- ・神と人を愛することが出来るためには、主イエスの十字架の贖いの御業を思い起こすことが大切であると知らせたい。

## 〈ワーク〉

1. マルコ 12:28 ~ 34 を読み、( ) の中に言葉を入れて第一の掟を完成しましょう。

「イスラエルよ、聞け、( ) の神である主は、( ) の主である。( ) を尽くし、( ) を尽くし、( ) を尽くし、( ) を尽くして、( ) の神である主を愛しなさい。」

2. 2つ目の掟で「隣人」と出てくるけど、これは誰のこと？

3. 人を愛するとはどういうことだろう？

- a) 自分の好きな人だけを愛する
- b) 近所に住んでいる人を愛する
- c) 自分の敵や嫌いな人でも愛する

〈答え〉1. わたしたち、唯一、心、精神、思い、力、あなた 2. 自分の周りにいる人全て 3. c

## 〈目標〉

神の律法の要約を理解する。

## 〈指導上の心得〉

律法の三効用(①罪の指摘、②キリストへ導く、③新しい生活基準)を踏まえましょう。日曜学校の大切な目的の一つは、十戒を徹底的に心に刻み込むことです。幼い魂が悪に導かれられないために切に祈りつつ、この務めをはたしていきましょう。

## 〈展開例〉

## (1) 連想ゲーム「神を愛した人々」

ノア、アブラハム、モーセ、ダビデ、ダニエルなど、聖書の主要な信仰の先達たちを、スリーヒントによりあてていくゲームです。

(例) 答えがダビデなら、ヒント 1「末っ子」、ヒント 2「石投げ」、ヒント 3「王様」。ヒント 1 で答えたら 30 点、ヒント 2 で答えたら 20 点、ヒ

ント 3 で答えたら 10 点。5 回くらいやって、合計点を競おう。

(2) 神を愛した人々には、隣人愛が与えられる。上記で回答した信仰の偉人たちの特徴と祝福を語り合ってみよう。各人物において、さまざまな隣人愛が実現されている。

(例) ダビデ：勇気、偉大な王、ノア：従順、救い、モーセ：柔和、とりなし、アブラハム：忍耐、信仰の父、ダニエル：知恵、神の守り。

(3) カテキズムを暗唱し、律法の要約をしっかりと覚えよう。

## 〈折り〉

天の父よ、あなたは信仰の先達において、あなたの真実を証されました。わたしたちもあなたに喜んでいますが、あなたの栄光をあらわしていくことができますように。

問40の理解



10本の指で数えられる十戒を、さらに2つにまとめて下さったのは誰？ その2つを言ってみよう（書いてみよう）。十戒をどう2つに分けたのだろう？ 自分で分けてみて、理由を言おう。第1～4戒、第5～10戒にわけられるのはなぜだろう？ 前半が対神、後半が対人。

聖書箇所を読み取り



第1の掟「心を尽くし」「精神を尽くし」「思いを尽くし」「力を尽くし」はそれぞれどんな状態か？ これに「知恵を尽くし」も加わる。こうして言葉を重ねることで全存在をかけて神様を愛すること、それは神様が唯一の主だからであることを読み取らせる。

第2の掟「自分のように」「隣人を」愛すると

はどういうことか？ 隣人とは誰か？ についてはルカ10：25～を開いて見る。

申命記10章12-22節に、わたしたちが全存在をかけて愛し仕える神様は、公平で弱い者の権利を守る神様であることが記されている。神様を愛すること→隣人を愛すること。

神様を愛する際には全存在をかけて、隣人を愛するときには自分を愛するように、と教えられています。しばしばこれが逆転します。中学生は、自分にも友達や家族にも完全を求めたがる年頃。自分の欠点や弱さを認めて、それでも神様があなたを愛しておられるから、自分を愛することができるのです。それと同じように、隣人の欠点や弱さを認めて愛しましょう。神様は完全なお方だから、自分の全存在をかけて愛して大丈夫。

月 日 「神と人への愛」 中学科

名前 \_\_\_\_\_

聖書：マルコ 12：28～34

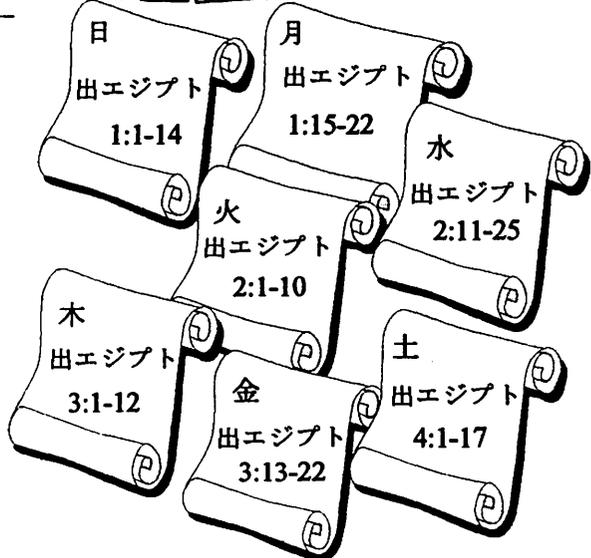
問40

☆十戒を二つにまとめると……

☆神への愛

☆人への愛

毎日聖書を読もう



暗証聖句

(ルカ10：27)

この箇所は、過ぎ越しの規定について記されているところです。箇所としては良く知られている箇所ですが、良く知っている箇所であるだけに注意深く読みましょう。

#### (1) 血を入り口の柱と鴨居に塗る

モーセとアロンが過ぎ越の祭りと除酵祭に関する規定を主から頂いた後、モーセがこの規定を民の長老たちに知らせています。

このところでは、細かいことは語らず、過ぎ越しの犠牲を屠り、儀式として行う入り口の柱と鴨居に血を塗るべきことのみが記されています。入り口の敷居に血が塗られなかったのは、おそらく、血が足につくことによって、その者が汚れることのないためであろうと思われる。

#### (2) ヒソブ

きよめの儀式的折りにしばしばヒソブが用いられていました。(例レビ記 14:1-9 民数記 19:18,19) このヒソブはイスラエルの山野のあちこちに自生している植物です。つまり、神様は儀式のために、無理難題を命じるのではなく、わりとすぐに手に入れることの出来る植物を用いてなすように命じて下さる方であることが分かるのです。

#### (3) 血と過ぎ越し

この血を入り口に塗ることによって、その血を見て主が過ぎ越すといわれています。この血はエジプト人とイスラエル人を区別するための血であり、イスラエルを保護するための血であるのです。それは同時に、イスラエルに大いなる災いをもたらさず、主が過ぎ越して救いを与えるための贖いの血でありました。

#### (4) 儀式を守ること

神様はモーセを通してこの過ぎ越しの儀式を守り続けるべき事を語っておられます。それは、子

孫のための定めとして行えと命じています。その一つの理由として、この時一回限りの過ぎ越しの出来事が、祭儀によって何時までも記憶に留められ、また同時に過去の出来事が現在化されるのです。そのために儀式として、神様はそれを行うように命じておられます。

また、儀式として、過去のことを現在化し、また、記憶に留めていくことによって、神様の御業を子どもたちに教えることにもつながります。神様の救いの御業を子孫に伝える最も効果的な方法が儀式にすることであるのです。その儀式を守ることによって、過去の記憶が子どもたちの間で、まるで現在のことであるかのようによみがえるのです。

#### (5) 子どもたちが尋ねたならば

子どもたちがこの儀式について尋ねたらどのように答えなさいということも書き記されます。ここでは、主がイスラエルを過ぎ越、イスラエルに救いをもたらされたのだということを告げるように命じられます。過去における神様の救いの御業が、この儀式の中で子どもたちに現在化され、神様が自分の民を救い出してくださった事実を、まるで自分の身に起こっていることであるかのように感じることができるのです。

#### (6) 主の救い

「主がイスラエルの家を救われた」とのことが記されています。このところでイスラエルが救われたのは、神様がイスラエルにもたらされた災いからであります。しかし、もう一方で、この時まだ実現していませんが、この大いなる業を通して、イスラエルの民がエジプトから、救い出されるのです。主の憐れみ深い御業によって、この過ぎ越しの出来事によってイスラエルの民は、エジプトから導き出され、救われたのです。

カテキズム 子どもカテキズム 問41, 42  
 ウェストミンスター小教理問答 問43, 44

### 子どもカテキズム

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」です。

問42 この意味は何ですか。

答 かつては、神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、神さまは私たちの神さまとなってくださいました。ここにすでに、神さまの愛の御心があらわれ出ています。この神さまの愛の支配のもとではじめて、私たちは、幸せに、また自由に、生きることができるのです。

### 〈十戒の根拠、神の自己紹介〉

十戒の前書きは、神が御自身のことを名乗られる御言葉、イスラエルの民に対して自己紹介される御言葉です。その自己紹介として、主なる神とイスラエルの民との関係が明らかにされます。神と神の民との関係です。また神の救いの御業が語られます。これらが先行する神の恵みであり、十戒の前提また根拠です。十戒の本文は、神が神の民に対して求められることが明らかにされており、いわば契約内容にあたります。前文では、その十戒の根拠、前提が確認されるのです。

神は、「あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神」であり、この出エジプトの御業を根拠として、神はイスラエルの民に対して、「私は主、あなたの神」と宣言されました。この関係に基づいて、十戒の本文が語り出されます。

### 〈過越の御業〉

十戒の根拠となる出エジプトの御業の中心が、過越です。過越とは、傷のない小羊が犠牲としてささげられ、主が過ぎ越された出来事です。

過越において、主なる神はエジプト人を撃たれました。それはエジプト人の罪の故です。しかし、イスラエルの民に対しては、主はイスラエルの民を撃たれることなく、過ぎ越されました。それは決してイスラエルの民に罪がなかったというわけではありません。イスラエルの民は、主なる神を受け入れず、出エジプトを拒否したこともあるかたくなな民でした（出エジプト 5:12, 6:9）。モーセ

を通して行われた多くの奇跡は、ファラオのかたくなさを明らかにするためであると同時に、イスラエルの民のかたくなな心を造りかえるためでもありました。ですから、イスラエルの民も、本来は主に撃たれるべき民にほかなりません。

過越とは主なる神の愛と憐れみの御業にほかなりません。主はイスラエルの民を選び、憐れまれました。それは、決してイスラエルの民が強かったからでも、優秀だったからでもありません。かたくなな、弱く貧しい民でありましたが、主の愛と真実の故に憐れみを受けたのです。主の憐れみの故に、小羊を犠牲としてほふることが命じられ、小羊をいけにえとして、主が過ぎ越してくださいました。イスラエルの民は、罪の故に撃たれるのではなく、主の憐れみの故に生かされたのです。

### 〈主の憐れみの中に招かれる〉

この憐れみの御業、過越に基づいて、出エジプトに基づいて、十戒の御言葉が語り出されます。出エジプトの御業によって、神は私たちの主、イスラエルの神とされました。私たちを贖って、私たちを神のもの、神の民としてくださいました。主は、イスラエルの民に対して、この憐れみの中にとどまるようお求めになりました。民は、主の憐れみの内に生きるよう招かれたのです。十戒は、この神の憐れみと恵みにとどまるよう求める、神の愛の御言葉にほかなりません。十戒は、神の贖いの御業に感謝して神の恵みに生かされるよう求める神の福音なのです。

テキスト 出エジプト記 12章 21 ~ 27節  
カテキズム 子どもカテキズム 問 41, 42

## 「贖いの御業」

〔単元のねらい〕

改革派教会の《十戒》にとって、この前文を欠かすことはできない。ちなみに、ルーテル教会やローマ・カトリック教会とは、十戒本文の教え方が異なり、またこの前文を付して唱えないという違いがある。これだけでも、改革派教会の特質があらわになるであろう。つまり、我々にとって十戒とは福音であり、福音的律法として受け入れているのである。それは、十戒の前文を味わうことによって、鮮明にされる。それゆえ、我々は、二回にわたって学ぶこととしているのである。

本日は、前文そのもの、十戒を最初に与えられたイスラエルにとっての救いの御業について、即ち、エジプトの国からの解放の御業、その頂点としての過ぎ越しの出来事を物語り、十戒を与えてくださった恵みの神の御心を悟らせたい。

昔、神さまの選んでくださった民、イスラエルの人々は自分たちの国を離れ、エジプトで暮らす事になりました。イスラエルの国に、飢饉が起こってしまったからです。けれども、神さまの民のイスラエルはエジプトの国で神さまの祝福を受けました。最初はわずかの人々だったのですが、子どもがたくさん生まれ、その数が大勢になって行きました。ところが、だんだんイスラエルの数が多くなってくると、エジプトの人々は彼らを苦しめるようになって行ったのです。そして、とうとう自分達の奴隷にしてしまったのです。

神さまは、そんなイスラエルをご覧になっておられました。そして心深く憐れんでくださいました。そして、ついに、神さまはエジプトの王様の子として育てられていたモーセに御声を聞かせられました。それは、モーセが羊の群れを導いて神の山ホレブに来た時のことです。神さまは燃えている柴の中から仰いました。「わたしは、エジプトにいる私の民の苦しみを全部見ています。彼らの苦しみの叫び、痛みを知っています。モーセ、わたしはあなたをエジプトの王様のところに遣わして、私の愛する民をエジプトから連れ出すことに決めている。」モーセはすぐに言いました。「わたしはそんな大変な仕事はできません。」神さまは、モーセに答えられました。「わたしは必ずあなたと共にいるのです。」

神さまは、イスラエルの人々をエジプトから、神さまの約束の地に解放するため、自由にするためにこのモーセを用いて下さったのです。その後、モーセは、王さまファラオのところに行って、神の民イスラエルを去らせて、荒れ野で礼拝させてほしいと言いました。ところが、エジプトの王様ファラオはイスラエルを自由にしませんでした。

そこで、ついに、神さまは、エジプトに 10 の災いをお下しになられたのです。その最後の審きを「過ぎ越し」と言います。過ぎ越しと言うのは、神さまがエジプトの中を審きのために進まれることです。エジプトの国の中で、最初に生まれた人間をはじめ、すべての生き物の初めに生まれたものが死んでしまうことになるのです。

けれども、神さまを信じるイスラエルの人々が、神さまが審きのために通られる時、その審きが過ぎ越すための、しるしをつけるように仰いました。それは、自分の家の玄関に小羊の血を塗るということでした。その血を神さまがご覧になるとき、その家が神さまの御言葉どおりにする神の民であることを、神さまがお認め下さるのです。その家は、誰一人裁かれて死ぬ人はおりません。神さまは、このような審きをエジプトに下す事によって、イスラエルの人々を自由にしてくださったのです。

王様は、小羊をいそいで焼いて食べ、その血を

玄関に塗ったこの過ぎ越しの出来事を、必ず、記念として毎年、繰り返し繰り返しお祭りしなさいと仰いました。大人は、この時のことを知らない子ども達にも、繰り返し繰り返し、教えるように、神さまから命じられました。ですから、イスラエルの行うお祭りの中で、一番大切なお祭り、礼拝となりました。

さて、僕たち私たちは、神さまからの愛の言葉として、十戒を唱え始めています。十戒は、神さまからの、神さまを信じる僕たち私たちへの愛のしるし、証拠なのです。なぜなら、それは、今聞いたお話のとおり、神さまが神さまの民をエジプトの国、つまり奴隷にされて苦しめられていた国、世界から、導きだすため、解放するため、自由にするために、過ぎ越しの御業をなして下さったことで良くわかります。しかも神さまは、ただエジプトから導きだしてそれで、もう、イスラエルに何もなさないのではありません。イスラエルがこれから先、いつまでも、「神さまは愛のお方なのだ。わたし達の神さまは、わたし達を救って下さったお方なのだ」ということを、心の中に刻み付けるために、十戒を唱えさせられるのです。ですから、十戒は 10 の言葉だけを覚えるのではなく、10 の言葉だけを唱えるのではなく、今日のこの言葉を覚え、唱えるのです。そして、神様はどんなに、すばらしい力をもって、救って下さったかをいつも思い出すのです。イスラエルの

人々は、十戒を唱える事によって「心から感謝します。心からありがとうございます。」と神さまの言い続けているのです。神さまを信じる僕たち私たちは、いつでも、神さまに愛されています。けれども、神さまの愛によって、楽しく、嬉しく、感謝して生きるためには、どうしてもしなければならぬことがあります。それははっきりと教えてくださるのが、十戒なのです。

金魚蜂のお話を覚えていますか。金魚が金魚らしく生きるためには、水の中、水槽のなかで生きる、泳ぐ事ですね。それなら、神さまに造られ、愛されている僕たち私たちは、神さまを信じ、神さまを礼拝し、神さまの命が豊かに注がれる場所が必要です。それは、もちろん、この地上ですが、どこでも良いわけではありません。愛の神さまは、僕たち私たちがこの十戒の中で生きる時に、いつまでも嬉しく、感謝して生きれることをご存知なのです。だから、僕たち私たちは、心を込めて、十戒を唱えるのです。

モーセのことも、過ぎ越しのことも、僕たち私たちが、知りません。生まれていませんでした。けれども、僕たち私たちが、今イエスさまによって、救われ、神さまの子としていただきました。ですから、僕たち私たちが、「神さま感謝します。僕たち私たちが、イエスさまによって神さまの子どもにしてくださったことをありがとうございます。」と言う気持ちを込めて、昔のイスラエルの人々に負けないように十戒を唱えるのです。

---

#### 今週の暗唱聖句

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

出エジプト記 20章 2節

---

〈目標〉

旧約聖書に触れる機会として、出エジプト・・・「葦の海」の奇跡を通して、救い出して下さる神さまを知る。

〈導入〉

旧約聖書物語の中から「葦の海の奇跡」の場面の絵を見せながらお話を読む。

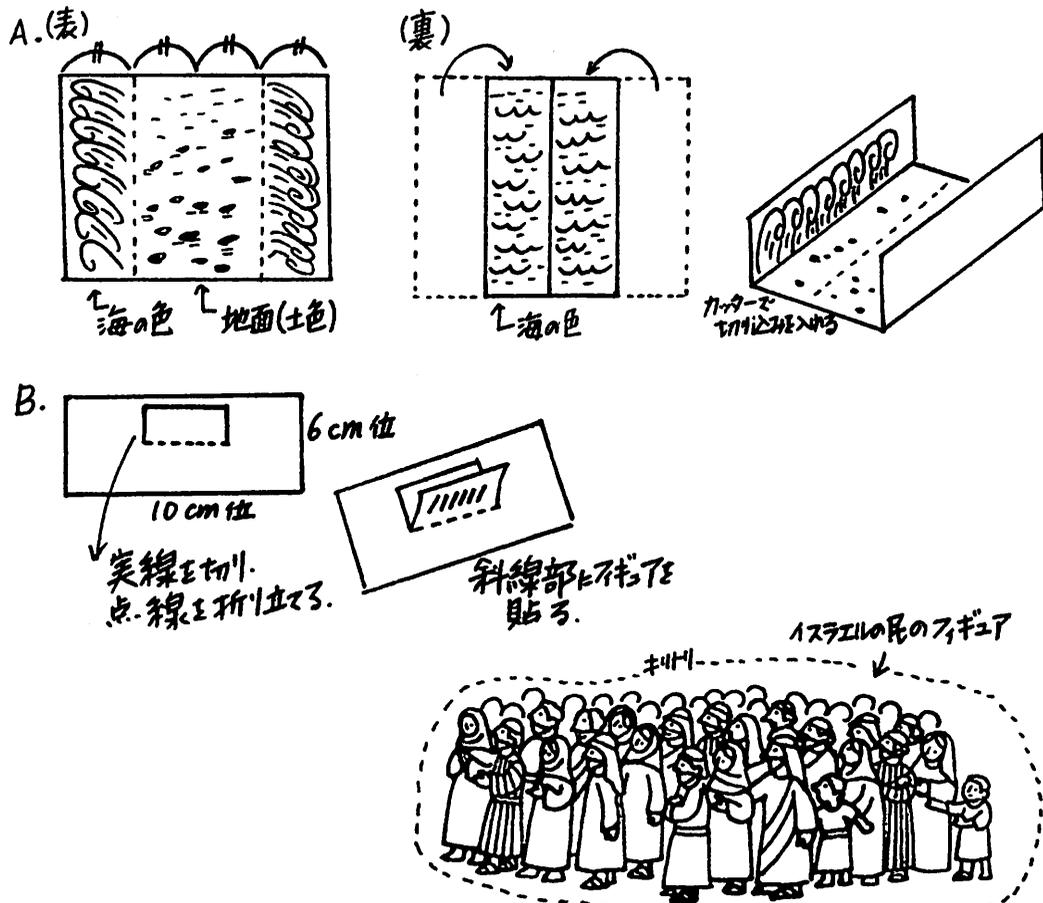
「神さまは海を分けて、敵の手から、神さまを信じる人々を助けて下さいましたね！！ 同じ神さまが、今も私たちを助け、救い出して下さるのです。」

〈展開例〉

「そそり立つ海」

・材料／ハッチ画用紙半分を人数分、クレヨン

- ① クレヨンで、海・地面の部分の色ぬりする。  
(表・裏)
- ② 地面の中央に大人がカッターナイフで切り込みを入れてあげる。
- ③ 下図 B のように厚紙で作り、斜線部分にフィギュア (イスラエルの民) を貼り、②の切り込みに、下から差し入れ「イスラエルの民」の部分だけ出してスライドさせる。



〈祈り〉

神さまが、どんな時もかづよく私たちを、導いてくださりありがとうございます。アーメン。

## 〈目標〉

十戒の前番きのエジプト人の地奴隷の家から導き出した神さまは、神様の民を憐れんで下さり、過ぎ越の犠牲（十の災い）によって救い出してくれました。同様に私たちも救いに導いて下さる神様に感謝をささげましょう。

## 〈考えてみよう〉

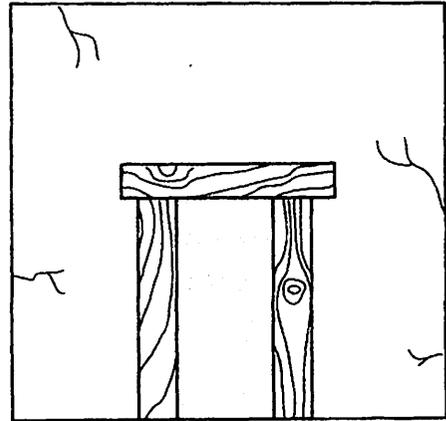
- ・この時代のイスラエル人は、どこの国のどれいだったでしょうか。みんなで考えてみましょう。  
アメリカ？ アフリカ？  
エジプト？ 日本？ インド？
- ・神さまは家の入り口になんの血をぬりなさいといわれたのかな？  
へび？ こねこ？ こひつじ？  
きじ？ こうし？ こいぬ？  
どれだったかな。
- ・イスラエル人は神様の民として、どれいから神さまにすくいられました。  
では、イスラエル人には罪はなかったのかな？

## 〈ぬってみよう〉

「イスラエル人の家と入口に色をぬろう」  
家を好きな色でぬって、入口をこひつじの赤い血でぬりましょう。

※下の図を 200% に拡大コピーしてください。

いえ



いりぐち

## 〈祈り〉

天にいますお父さま、こんしゅうもいっぱい悪いことをしました。だけど神さまはやさしい心でわたしたちをすくってくれます。ありがとうございます。ずっと神さまの子どもでいれますように。

## 〈目標〉

十戒の前文に示された神の御心を、愛の福音として理解し、感謝して生かされるよう導きたい。

## 〈指導上の心得〉

十戒を、改革派教会の特質である福音的律法として理解できるよう教えたい。

## 〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・十戒の前文は、何を示しているかを話し合ってみよう。
- ・十戒の前文の意味は何かを、旧約と新約に分けて考えてみましょう。
- ・それらには共に神様の愛の御心があらわれ出ている。それが何かを確認しましょう。
- ・十戒は、神の贖いの御業に感謝して、神の恵みにとどまり、それによって生かされるよう求める神の福音であることを覚えよう。

## 〈ワーク〉

1. 十戒の前文はとても重要な所です。出エジプト記 20:2 を読み、書いて覚えましょう。
2. 十戒は、大昔（モーセさんの時代）に作られたものなので、私たちには関係ないのかな？
  - a) 関係ない b) 関係がありとても大切
3. その理由は何かな？ 書き出してみよう。
4. 十戒は、私たちに何を求めているのかな？
  - a) 書かれている言葉通りに正しく守ること
  - b) 神の御心と御業に感謝し、喜んで神の恵みに生かされるよう歩むこと

〈答え〉2. b 4. b

〈目標〉十戒の前文を理解する①：過越の出来事を通して、まことの神に出会う。

〈指導上の心得〉出エジプトにおける「過ぎ越し」の出来事を、聖書箇所や写真資料などにより、できるだけ具体的に再現してみよう。全文を学ぶ意義は、私たちがまことの神に出会うことにあります。まことの神に出会うことなしに十戒を読む時、それはとてつもない重荷にすぎません。下記のような遊びを分級に取り入れる時も神に出会うことを背後に押しやらないようにしましょう。

## 〈展開例〉

## (1) サーチゲーム

「過ぎ越し」調査団を結成し、あらかじめ用意しておいた命令書を各隊員に渡す。命令書には、調査事項と調査箇所が書いてある（例）「主の過越」の時、どんなさばきが起きたか。→出エジプト 12:29～30) 調査を終えた隊員より報告を受ける。隊長（教師）がそれらの報告をまとめる。

（その他の調査事項例：主の過越の時に食べたもの。過ぎ越しの意味。過ぎ越しの祭りの時期。ヒソブについて。最後の災いを逃れるにはどうすればよかったか。）

(2) おそろべき御業をもって、ご栄光を示された神をたたえよう。そして二本の柱と鴨居に塗られた血が予表しているものは、十字架の上で流された、イエス・キリストの血であることを確認し、信じる私達には、十戒を守る力が与えられることが約束されている恵みに感謝しよう。

## (3) 十戒の板工作

石模様の板を、ダンボールと色画用紙などで作成し、これから毎週学んだ十戒の言葉を書き込んでいこう。できたものは礼拝や分級で用いよう。

## 〈折り〉

救いの神よ。おそろべき過ぎ越しの御業においても、あなたはご自分の深い憐れみを示されました。どうか律法を守る力をお与えください。

問41、42の理解



十戒の前書きについて二回にわたって学ぶことを伝える。

契約の「前書き」とは何か？ 大王契約（宗主協定。古代オリエントの帝国の大王と属国領主との契約）について説明する。

十戒の前書きは、神様とイスラエルの民（クリスチャン）との関係をあらわす。神様の自己紹介。

①わたしは主、あなたの神、②あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

①神の絶対的主権 - 世界の造り主である神様が自ら手を差し伸べて「あなたの神」と自称して下さる。

②神の贖いの業 - 奴隷の家（エジプトでの奴隷状態・墮落後の奴隷状態）から導き出した。

だから、以下の戒め（条文）を守りなさい。

「救い」→「神の命令を守ること」。逆ではない。

聖書個所の読み取り



神様がイスラエルを奴隷の家から救い出して下さったとき、どのような業が行なわれたのか？ 出エジプトの最後の災い=主の過越の出来事、またそれを正月として定め、毎年過越の祭りを祝うこととなった経緯を読み取らせる。

1999年ドリームワークス・アニメ「プリンス・オブ・エジプト」

DVD・ビデオで観てみよう。かなり笑える。映画「十戒」が下敷きになっていることは間違いないので、先に「十戒」を観た方がより笑える。聖書にこんなこと書いてあるはずないじゃんリストを作成すると楽しそう。映像・音楽的にはクオリティ高いです。

月 日「十戒の前書き - 神の自己紹介」中学科

毎日聖書を読もう

名前 \_\_\_\_\_

聖書：出エ 12：21～27

問41、42

☆十戒の前書き

☆主の過越

|                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| 日<br>出エジプト<br>4:18-31 | 月<br>出エジプト<br>5:1-23    |
| 火<br>出エジプト<br>6:1-13  | 水<br>出エジプト<br>6:14-30   |
| 木<br>出エジプト<br>7:1-13  | 土<br>出エジプト<br>7:25-8:11 |
| 金<br>出エジプト<br>7:14-24 |                         |

暗証聖句

(出エジプト20：2)

テキスト

ヨハネによる福音書 19章 17 ~ 30節

この箇所は主イエスが十字架にかけられて、息を引き取られるまでのことが記されている箇所です。そこに示される神様の愛に注目しつつ読んでいきましょう。

#### (1) 引き渡し

主イエスは十字架刑の判決を受けた後、誰であるかは記されていませんが、「彼ら」に引き渡されたことと記されています。これが誰であるかは解りませんが、恐らく刑を執行するローマ兵であったであろうと考えられます。しかし、一方でその直前までの箇所との関係で、ユダヤの指導者たちと見ることもできるのです。これにより、主の十字架の責任をユダヤ人にも負わせるような書きがなされています。また、そこにこの箇所の意図があるのかもしれませんが。

#### (2) 自ら十字架を背負って

主イエスは十字架を御自身で背負ってゴルゴダまで行ったと記されています。ヨハネが仮にマルコに記されているキレネ人シモンの出来事を知っていたとしても、彼はそのことをこのところに記しません。ヨハネは主イエスが御自身で十字架を背負って行かれたように描きます。それは、主イエスが強いられて死を受け取られるのではなく、御自身から進んでこの死を受け取られ、命を捧げられたことを表しているのです。つまり、主イエスは自ら進んで、罪人の贖いのための死に向かって歩んで行かれたのです。

#### (3) ユダヤ人の王

ピラトが主イエスの罪状書きを「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」としたと記しています。その犯罪者の出身地を書いて、その人物を特定するというのは一般的なことであったようであり、この罪状書きの内容は、四福音書の中で最も完璧なものであると思われます。

この罪状書きは、おそらくピラトがイエスに対

する皮肉を込めて決めたものでありました。しかし、ユダヤの指導者たちはこれを不満とし、変更させようとしたのです。このところに、ユダヤ人指導者たちが、彼らの王と主張し、彼らが仕えていたのは真の王である神様ではなく、ローマ皇帝であったことが表れています。そのことをこのところで彼らは主張したのです。しかし、ピラトは自分が審いたものをそのままにしておくと命じます。このようにして、ピラトが皮肉を込めて審いた言葉が一つの真理、つまり真の王なる方を示すことになったのです。

#### (4) 衣服を分け合う

主の着ていた衣服をローマの兵隊たちが分け合いました。このところで引用されているのは詩篇 22:16 です。これは他の福音書でもなされている詩篇 22 編の自由な引用と同様のものです。この引用によって、この十字架の出来事が旧約で示された救いの契約の成就であることを示しているのです。

#### (5) 成し遂げられた

主イエスは「成し遂げられた」とおっしゃって息を引き取られました。これは、単に何かをやり終えたということを示しているではありません。その終了によって一つのことが完成したことを示しているのです。つまり、十字架の出来事が神様の救いの御業の完成として描かれているのです。主イエスは、神様が行うように命じられた御業を成し遂げることによって、神様の御栄光をこの世に示されました。また同時に、これがキリストによって示された神様の愛なのです。

この御業が成し遂げられたことによって、神様と人との和解が成立し、神様が私たちの神様となって下さいました。神様は、私たちが罪の奴隷から解放して下さい、私たちが神様の愛の支配の下に入れて下さり、神様の御許で自由に生きることができるようになって下さっているのです。

カテキズム 子どもカテキズム 問41, 42  
ウェストミンスター小教理問答 問43, 44

子どもカテキズム

問42 この意味は何ですか。

答 かつては、神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、神さまは私たちの神さまとなってくださいました。ここにすでに、神さまの愛の御心があらわれ出ています。この神さまの愛の支配のもとではじめて、私たちは、幸せに、また自由に、生きることができるのです。

ウェストミンスター小教理問答

問44 十戒のまえがきは、わたしたちに何を教えますか。

答 十戒のまえがきは、わたしたちに、神は主であって、わたしたちの神であり、贖い主であるので、わたしたちは彼のすべての戒めを守る義務があることを教えています。

〈旧約と新約の一致性と区別性〉

出エジプトの御業は神の民の歴史です。旧約のイスラエルの民と私たち新約のキリスト教会は、一つの神の民として歴史を共有しています。ですから、今を生きる私たちも、出エジプトを経験した民であることを覚えたいと思います。しかし、旧約の民と新約の教会は異なっています。新約の教会は、旧約の約束の成就キリストを知っています。旧約の民ももちろんキリストを知っていますが、それは約束としてのキリストです。新約の民は、それが成し遂げられたことを知っています。十字架と復活のキリストを知っているのです。

〈キリストを指し示す約束としての過越〉

神の民イスラエルは、過越の御業によって贖われて、奴隷の家から導き出されました。エジプトの支配から解放されて、神の御言葉に基づいて生きる自由な新しい生活へと招き入れられました。この過越の御業は、傷のない小羊をいけにえとしてささげる、小羊の代償による贖罪です。これは地上の動物がささげられるのであり、完全な代償ではありません。キリストの贖罪を指し示すしるしであり、約束なのです。過越は、やがて成し遂げられるキリストの贖いの御業を指し示すしるし、また約束にほかなりません。

〈過越の成就としてのキリスト〉

御父は、この過越の成就として独り子イエス・キリストを遣わされました。御父は、独り子を私

たちの身代わりのいけにえとして十字架に引き渡されました。神の小羊キリストは、私たちの身代わりとして神の刑罰を受け、十字架につけられました。この十字架によって罪が償われました。

キリストの復活は、キリストが罪と死に打ち勝たれたことの証しです。またキリストの死が私たちの罪の償いとして十分であったことの証しです。御父は、キリストの死をよしとされ、キリストに復活の命を与えました。キリストを豊かに報いられました。こうして、罪人の罪の赦しが天の御父の喜びであることが明らかにされました。

この十字架と復活によって罪からの贖いが成し遂げられました。いまや私たちは、罪の奴隷の家から解放され、罪と死の支配から解放され、神の御前に自由に生きる者とされました。聖霊を与えられ、主を信じる信仰に生かされ、神の御言葉に依り頼む者とされました。ここに神の完全な贖いの御業があります。

〈神の愛に感謝し生きるキリスト者〉

私たちは、このキリストの贖いの御業によって神の民とされました。旧約の民もこのキリストを約束の内に信じて救われたのです。それ故、神の民はみな等しく、この十戒の御言葉によって神の愛の内に生きるよう求められています。私たちは罪からの贖いの恵みの内にとどまるのです。十戒は、キリスト者にとっても、神に感謝し応答する道を教える神の福音の言葉にほかなりません。

テキスト ヨハネによる福音書 19章 17 ~ 30節  
カテキズム 子どもカテキズム 問 41, 42

## 「十字架」

〔単元のねらい〕

十戒の前書きを学んで第二回目、本日は、十字架を語る。過越しの出来事は、十字架の出来事の予型（モデル、プロトタイプ）であった。我々は、かの出エジプトの壮大な救いの御業をはるかに越える救いの御業を見、これにあずかった。子らと共に十戒前文を唱える時、いつでも主イエス・キリストのなしてくださった十字架と復活の御業を思い起こさせたい。十戒を唱えるとき、我々に救い主を送り、救い出してくださった父なる神の愛の言葉として、神を讃え、感謝することができるように導きたい。これから三ヶ月にわたり、主イエスの御業の中心を直接語ることは少なくなるかもしれない。それだけに、本日の、テキストを通して、子どもたちに最も伝えたいし、伝えるべき、主イエスの十字架の愛を語りたい。分級においてスムーズに霊的な対話へと導けるような説教を語るべく祈り準備したい。

今日も、皆と十戒を唱えました。先週に続いて、この十の言葉の最初の言葉、前文の言葉を学びます。

小学生のお友達は、自己紹介ってしたことがあるでしょう。「自分の名前は、何々です。何年生です。何々が好きです。何々をやっています。」この最初の言葉は、言わば神様の自己紹介です。どんな自己紹介を、神さまはなさったのでしょうか。「わたしはあなたがたの神、主です。」これは、天と地をお造り下さった真の神さまが、僕たち私たちの神さまとなってくださった、僕たち私たちは神さまのものだと言う意味です。「あなたがたは私のものだ。あなたは私の大切な大切な宝物です。」と仰ったのです。だから、これは神さまからの愛の語りかけです。それなら、神さまはどうして「あなたがたは私のものだ。あなたは私の大切な大切な宝物です。」と僕たち私たちに向かって仰ったのでしょうか。本当に、そんな風に僕たち私たちを見てくださるのでしょうか。本当に、僕たち私たちは、神さまに愛されているのでしょうか。

先週は、イスラエルの人たちが神さまの大きな力によって、エジプトから救い出されたことを学びました。自分の家の玄関に小羊の血を塗るなら、その家は、誰一人裁かれて死ぬ人はおりませんで

した。けれども、それをしないエジプトの人たちは、神さまによって審かれたのでした。

けれども、先生は、イスラエル人ではありません。皆もそうでしょう。それなら、僕たち私たちににとって、この神さまは、僕たち私たちの神さまではないのでしょうか。いいえ、決してそうではありません。僕たち私たちに、あの過越し以上のすばらしい、驚くようなすごい御業をしてくださったのです。それが、イエスさまがしてくださったことです。イエスさまが僕たち私たちのためにしてくださったこと、たくさんたくさんあります。けれども、一番大切なことって何でしょうか。それが、今日のお話、イエスさまが十字架におつきくださったことです。

イエスさまは、三年あまりお弟子さんたちと一緒に、神さまの国についての説教をし、悩み苦しんでいる人たちのお友達になってくださり、病気の人を癒してくださいました。けれども、律法学者、祭司長たちはそんなイエスさまを妬んだのです。「殺してしまった方がよい、殺さなければならぬ。」そんな風に考えました。そして、形だけの裁判をして、イエスさまを死刑にすることを決めてしまいました。その方法は、一番痛くておそろしい十字架につけて殺す刑でした。もともと、十字架につけられる人は、神さまから最も離れて

いる極悪人がつけられるものなのです。勿論イエスさまには、何一つ罪、悪いところはありません。ただ、良いことだけをなされたのです。ところがこのように、人間の悪い心、汚い心、黒い心がイエスさまを殺しました。

イエスさまは、太い木の柱で作った十字架を、骸骨と呼ばれていた場所まで背負って歩かされました。そこで、兵達たちから馬鹿にされたり、からかわれたりしました。釘で手と足を打ち付けられ、十字架の木はまっすぐに立てられます。イエスさまは、朝の9時から午後3時まで、十字架の木の上で苦しめられました。

イエスさまは、力が弱いからこの人たちに捕まってしまったのでしょうか。違います。イエスさまは、最初からご自分が十字架につくことをご存知でした。そのために、この地上においでくださったのです。人間となられたのは、十字架の上で死なれるためだったのです。律法学者や祭司長たちだけが悪い心、汚い心、罪の心を持っているからではありません。僕たち私たちも、同じように、罪の心を持っています。そのままだと、神さまの怒り、審きを受けて、罰せられなければなりません。けれどもそんな僕たち私たちのために、イエスさまは、ご自分の命を、僕たち私たちの罪の代価として支払ってくださいました。僕たち私たちは、イエスさまの命によって、買い取られたのです。僕たち私たちは、イエスさまによって、神さまのものとしていただいたのです。神さまの

子としていただいたのです。

イエスさまの十字架の御業は、あの過越しの御業以上の救いの事件です。なぜなら、イエスさまの十字架は、イスラエルの人たちだけではなく、全世界の人々を救うための御業だからです。あの過ぎ越しでは、小羊が死にました。そればかりか、あのときから毎年、繰り返され繰り返され小羊が殺されて、過ぎ越しのお祭りが祝われます。けれども、もう小羊が僕たち私たちのために死ぬ必要がなくなりました。僕たち私たちも、神さまの審きを受けることもなくなりました。十字架の上で、神さまの小羊、神さまの御子が死んでくださったからです。

今、誰でも、「イエスさまは、僕のために十字架についてくださったのです。ありがとうございます。」と言って、信じる人は罪を赦されて、神の子どもにしていただけるのです。僕たち私たちは、今、神さまの子とされたのです。イエスさまの命と引き換えに僕たち私たちは天のお父さまのものとして取り戻して頂きました。

神さまは「あなたはわたしのものです。あなた方は私の宝物です。」と仰っておられます。それが、「わたしはあながたの神、主です。」と言う十戒の最初の言葉、神様の自己紹介です。この言葉を、唱える時にはいつでも、「ありがとうございます。感謝します。」って言う気持ちを持ちたいと思います。

---

#### 今週の暗唱聖句

キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。

コリントの信徒への手紙 一 5章7節後半

---

〈目標〉

「わたしは主、あなたの神」と宣言なされた神さまがイエスさまを通して、私たちをお救い下さったことを知る。

〈導入〉

先週に製作した「そそり立つ海」を見せて、神さまの救いの御業を思い出す。

「神さまは、私たちを救い出すために、イエスさまお送りくださいました。イエスさまの十字架によって、私たちは、完全に救い出していただくことができました。」(表現・言葉使いが、幼稚科には難しいかもしれないが、子どもの両手を教師が両手で引っ張るようにして「救い出す」という表現を体で体験させる。)

「○○ちゃんは、神さまの宝物だから、救い出して下さったんだよね」

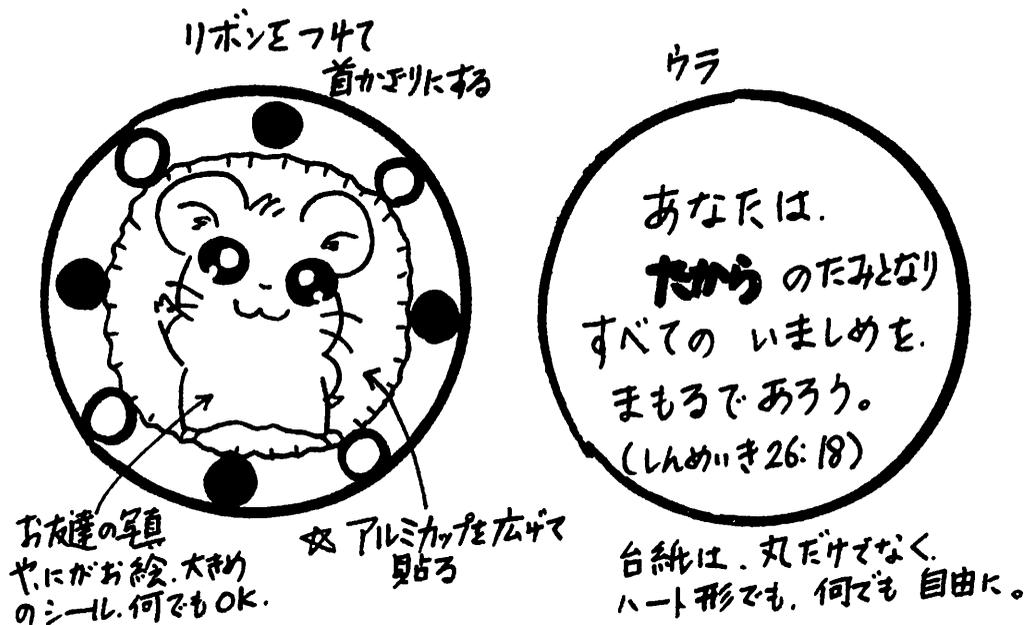
〈展開例〉

「キラキラペンダント

……私たちは神さまの宝物の」

・材料／(お弁当用)アルミカップ人数分、色リボン、色丸シール(事務用)、色画用紙

- ① 色画用紙で直径12センチ程の円を切り取る。
- ② アルミカップを広げて、①に貼り付ける。
- ③ カラフルな色丸シールを宝石に見立てて、好きなように貼っていく。
- ④ 首の長さに合わせてリボンをつける。
- ⑤ ペンダントの裏に「あなたは宝の民となり、すべての戒めを守るであろう。(申命記 26:18)」を教師が書き込む。



〈祈り〉

神さま、私たちを宝物のように、大切にしてくださいありがとうございます。アーメン。

〈目標〉

先週のお話では、過ぎ越しの犠牲が子羊の血によって成し遂げられました。今日のお話では、今生きる私たちのためにイエス様の身代わりの血によって救いの業が成し遂げられるためでした。その神さまの愛に気づかせて、私たちの神さまであることを感謝しましょう。

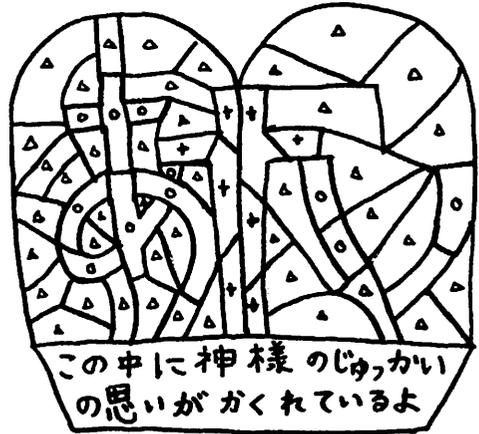
〈考えてみよう〉

- ・ 過ぎ越しの犠牲の時はこひつじが死んだけど、今日のお話では誰が死んで下さったのかな？
- 旧約の犠牲で示されていたこひつじはイエス・キリストを示しています。小羊の犠牲はイエス・キリストによって完全なものとされました。
- ・ イエスさまはどのような死にかたをしたのかな  
火あぶり、じゅうでうたれた、かたなできられた、じゅうじかにつけられた  
どれだろう？
- ・ イエスさまはなぜじゅうじかにつけられたのかな？
  - ・ 悪いことをしたから
  - ・ みんなが十字架につけろといったから
  - ・ みんなの罪の身代わりになるため
  - ・ 十字架で死にたかったため

〈ぬってみよう〉

「なにがでてくるかな？」

この中に神さまのことがかくれてるよ！



〔ヒント〕

十を黄色。○を赤色。

△を好きな色で(黄・赤以外)

ぬってみましょう。

〈祈り〉

天にいますお父さま、わたしたちのためにイエスさまがじゅうじかにかかってくれてありがとうございます。これからも神さまの愛にかんしゃして生きていけるように。そして、神さまのためにじぶんをささげられますように。

〈目標〉

過越と十字架の関連を示し、教会に生きる私たちも、この十戒によって神の愛の内に生きよう求められていることを覚えたい。

〈指導上の心得〉

過越を完全に成し遂げたのはキリストの十字架であり、復活はその完成であることを覚えたい。

〈展開例〉

以下のことをヒントにしつつ生徒と対話して、理解を深めていきましょう。

- ・ 過越は、どのような儀式を成したのかを考えてみよう。
- ・ この過越は、何を表していたのでしょうか。みんなて話あつて見ましょう。
- ・ 過越に示された神の贖いの御業が、キリストによって完全に成し遂げられ、私たちはそれを信じるだけで救いが約束され、保証される。

〈ワーク〉

1. イエス様の十字架の上には、何と書かれていましたか？
2. 正しいのはどちらですか？
  - イ) イエス様はご自分が十字架に架けられることを
    - a) 知らなくて逃げ出した
    - b) 最初から計画だとしておられた
  - ロ) イエス様はどんなお方ですか？
    - a) 悪いことをたくさんした
    - b) 何一つ罪のない正しいお方
  - ハ) イエス様はどうして十字架に架かったのですか？
    - a) 私たちの罪の贖いをするため
    - b) 自分が悪いことをした罰

〈答え〉1. ユダヤ人の王 2. イ) b ロ) b ハ) a

〈目標〉

十戒の前文を理解する②：キリストの十字架を通して神に出会う。

〈指導上の心得〉

新約の時代に生きる私たちにとっての出エジプトであるイエスさまの十字架と復活の出来事を、弟子ヨハネの悲しみと喜びを通して味わい、心に刻みつけよう。

〈展開例〉

- (1) ヨハネ 19:16 ~ 27 を、全員で斉読する。
- (2) 聖書を閉じ、十字架の周りにいた人を言い当ててみる。教師は黒板などに簡単な絵を書いていく。
- (3) 「愛する弟子」はゼベダイの子ヨハネと言われている。イエスの母マリアを引き取ってから主イエスの復活に出会うまでの心の動きと行動をた

どってみよう。6月2日〈展開例〉(3)の要領で、一人一文ずつ順番に言っていき、ドラマをつくってみよう。(但し聖書記事には忠実に)

(例) ヨハネはマリアを家に案内した。家に帰ると兄のヤコブもいた。みんなその日は悲しみに打ちひしがれていた。ただマリアは「あの方は復活なさいますよ」と言っていたが、信じられなかった。酵母を入れないパンを食べたが、おいしくなかった。疲れていたので早めに寝た。翌日朝寝坊した。ユダヤ人たちを恐れて、一日中家の中にいた。そして次の日の朝、マグダラのマリアからイエスの墓が空になっていると聞いておどろいた。すぐに墓を見に行ったら本当に墓は空になっていた。その日の夕方、ベトロの家でみんな集まっていると、なんと主イエスが現われた。ヨハネも他の弟子たちも喜びに満たされた。彼らはもうユダヤ人を恐れなかった。



問41、42の理解

十戒の前書き二回目。

「かつては……」と「今は……」を比較してまとめさせる。

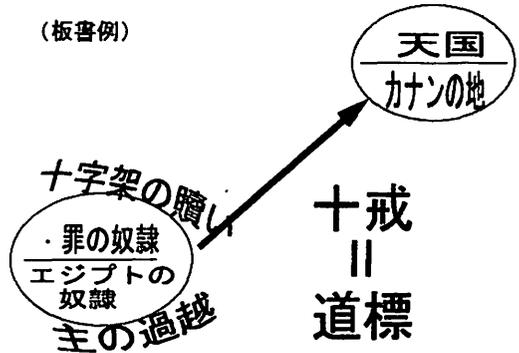
|       | かつては | 今は |
|-------|------|----|
| だれを   |      |    |
| どこから  |      |    |
| どのように |      |    |
| どこへ   |      |    |
| その記念  |      |    |

過越と十字架&復活の御業の関係を知る。

過越の犠牲はキリストの十字架の予型であり、出エジプトはわたしたちが罪の奴隷状態から救われたこと、約束の地は天国にたとえられる。十戒は、イスラエルの民が約束の地へ導かれる行程の道標として与えられた。同じように、救われたわ

たしたちが天国へ至る行程（聖化の歩み）の道標でもある。イスラエルの民が過越の祭りを毎年祝い儀式をくり返すように、教会も聖餐を行ない主の贖いの業を覚える。

(板書例)



月 日「十戒の前書き - 贖いの御業」中学科

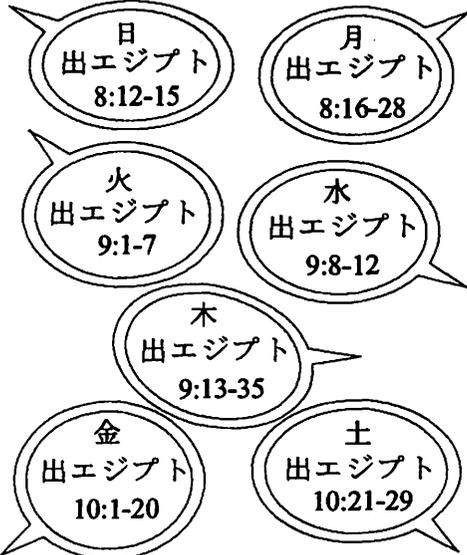
名前 \_\_\_\_\_

聖書：聖書：ヨハネ 19：17～30

問41、42

☆奴隷の家から導き出した神

毎日聖書を読もう

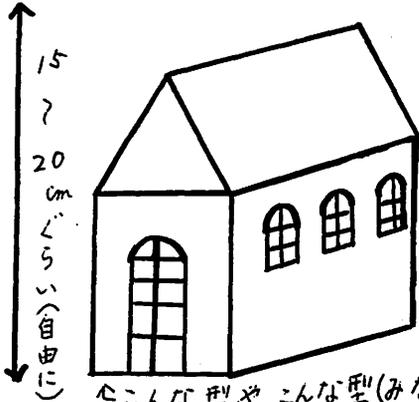


☆十戒は道標

暗証聖句

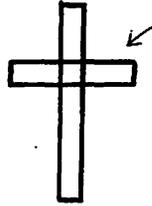
(コリント1 15：7c)

《4月7日分 小学科下級展開例（工作）》

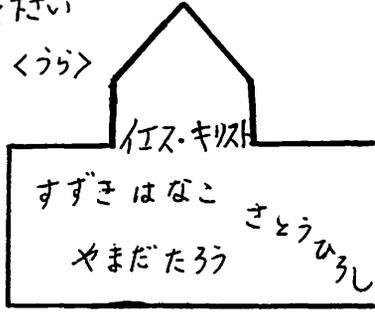
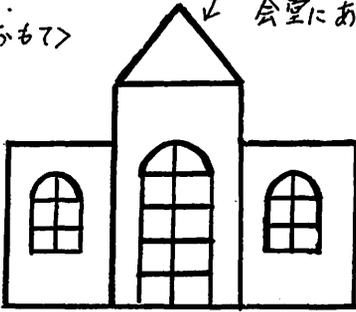


15  
7  
20 cm  
ぐら  
い(自由  
に)

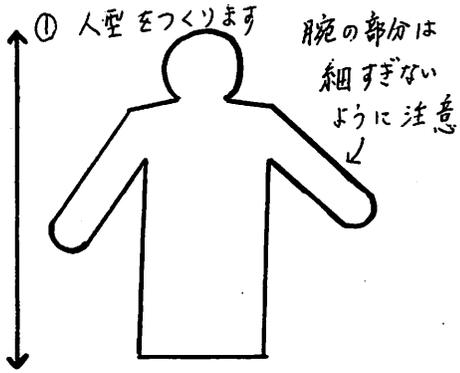
こんな型や こんな型(みなさんの教会の  
会堂にあわせて作して下さい  
くもて)



最後に屋根につけて  
できあがり!  
折れまがりやすいので  
厚めの紙を使うといいぞ  
しょう。



《4月14日分 小学科下級展開例（工作）》

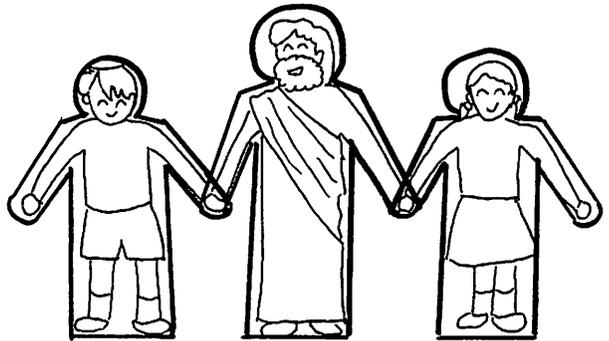
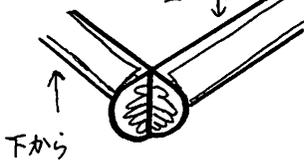


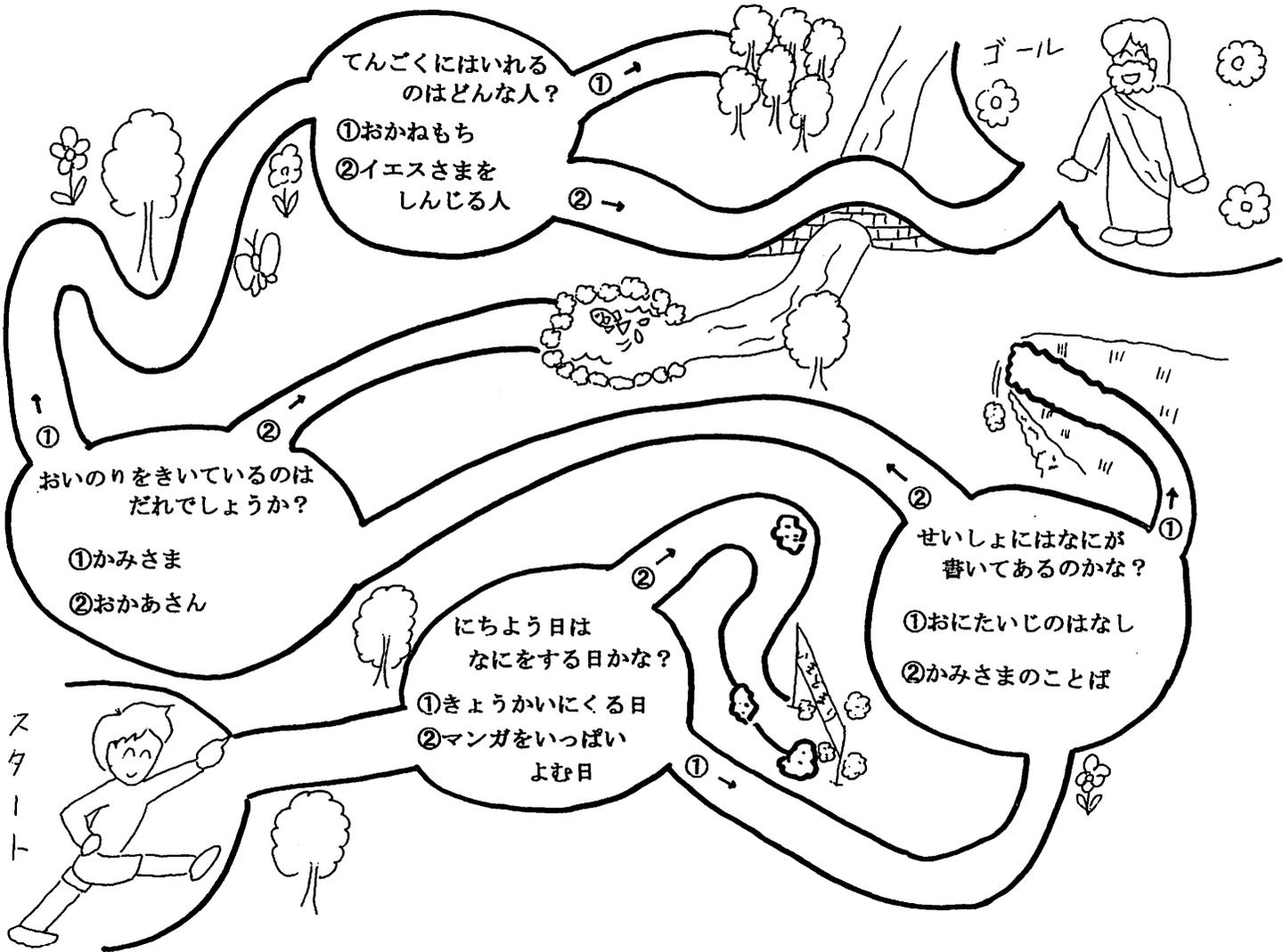
② それぞれ自分の姿の絵をかいたら、  
手の部分に半分程切り込みを  
入れます。



④ できあがり!

③ 手の切り込みを隣の  
人型と組み合わせます  
上から





# 母の日のプレゼントを つくってみよう!!

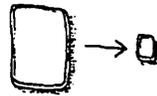


● 用意するもの

透明プラ板0.2mm厚 はさみ、アルミホイル、はし、油性マーカー、オーブン、穴あけパンチ  
タウンページ or 厚手の雑誌 びも or キーチェーン、パンチ

① プラ板に油性マーカーで絵柄を描く。または写す。

焼くと約1/6程度に縮むので出来上がりの6倍の大きさで作ります。



これぐらい縮みます。

② はさみで好きな形に切りとる。なるべくとがった部分はそろけて下さい。

キーホルダーの穴もあける。



③ オーブントースターに入れ 加熱する。

オーブンはあらかじめ加熱しときます。



アルミホイルを4枚くらいにした上に  
プラ板をのせます



角が尖ると  
おどります



さらに待つと縮み終り。

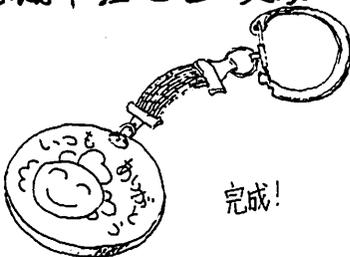


縮んだものをアルミホイルで包み、  
開いたタウンページの上に置きます。

④ プレスする。

タウンページを上から手で押えつけて平らにします。

⑤ ひもまたはキーチェーンをつけます。

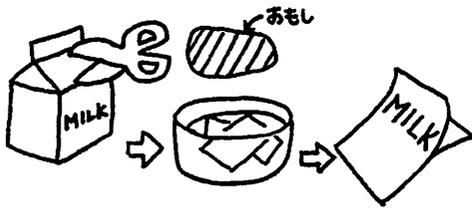


完成!

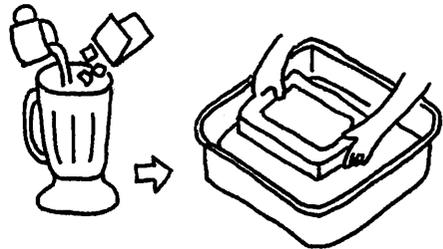
- ※ キーチェーンは手芸店や鞆島ハズ
- プラ板は玩具店、模型店で手に入れて下さい。
- ・あらかじめ試作しておくことをお勧めします。
- ・プラ板は切り分けておくとう便利です。

## 牛乳パックを使って紙すきをしよう

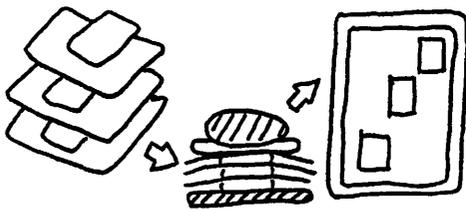
用意する物・・・紙すきセット、すき枠より大きな容器、布（ハガキより大きなもの）、牛乳パック（またはバージンパルプと粘剤）、ミキサー、アイロン、しっかりした板二枚、おもしろになるもの



1. 使用後の牛乳パックをよく洗い、適当な大きさに切って、24 時間水につけます。おもしろをのせてもよいですね。
2. ふやけたパックをよくもんで、コーティング部分をはがします。残ったものがパルプです。パック一つでハガキ四枚分です。



3. パルプを小さくちぎって、水と一緒にミキサーにかけます。パック一本分で水 800cc です。15 分から 20 分ほど断続的にかくはんします。
4. かくはんした材料を大きめの容器に入れ、すき枠ですき上げ、すだれの上に平均 5mm くらいになるまで繰り返します。（大きな容器がなければコップで流し込みます。）



5. 布または新聞紙の間にすき上げた紙を置き、それを重ねます。上下を板等ではさみ、静かにおもしろをし、水分を切ります。
6. ガラス、板等に貼り付けて乾燥させます。



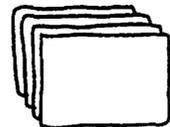
7. 生乾きのときに低温でアイロンをかける、きれいに仕上がります。



紙すきセット  
ハガキ用 56104 ¥1,000

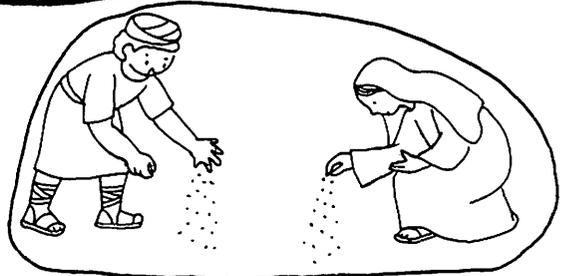
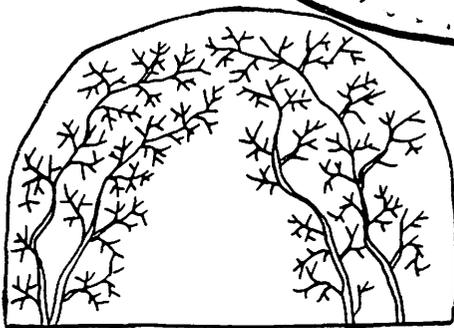
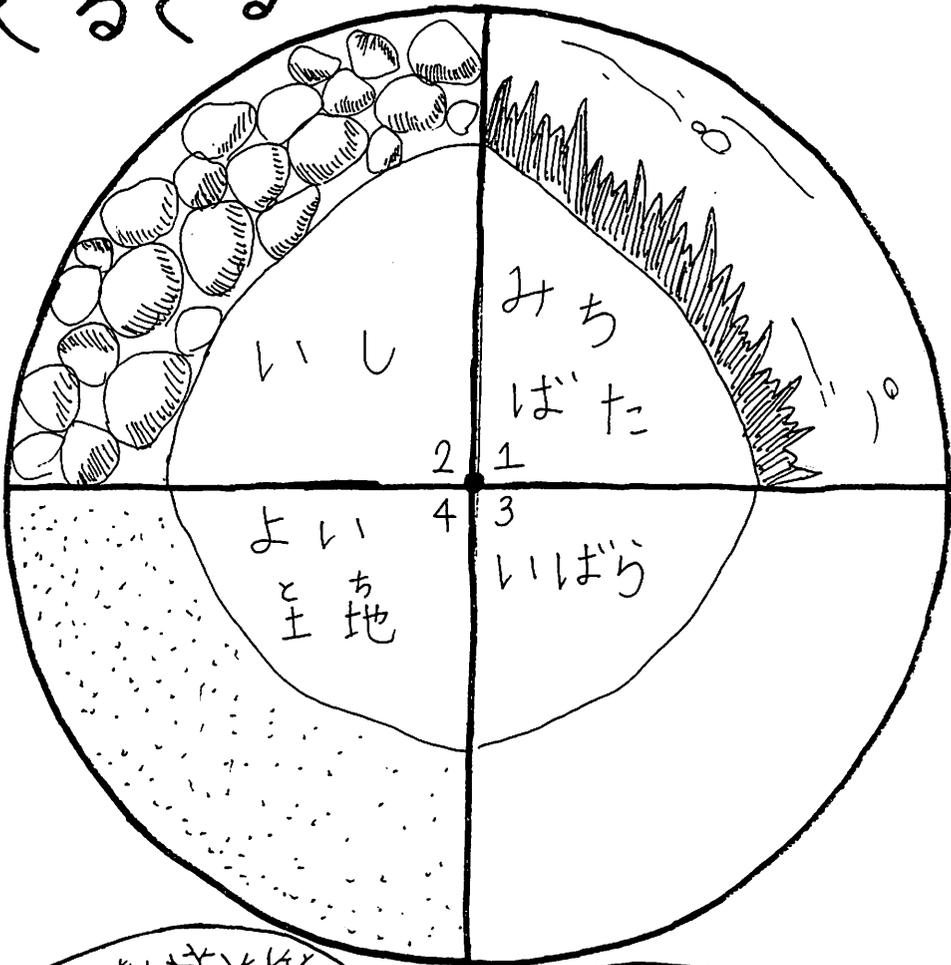


紙すき粘剤  
11358320 ¥380



バージンパルプ 5シート  
(1シートでハガキ約 8枚)  
11358310 ¥580

くるくるまわして あそぼう！



# 日曜学校 2002年度カリキュラム (2002年7～9月分)

2年サイクル第2年 (子どもカテキズム問34～85)

| 月日<br>教会暦・行事                         | 主 題            | 子どもカテキズム     | 参考教理問答                |
|--------------------------------------|----------------|--------------|-----------------------|
|                                      |                | 聖書箇所         | 暗唱聖句                  |
| 単元の目標                                |                |              |                       |
| 7月7日                                 | 第一戒 神を神とする     | 問 43,44      | ウ小教 45-48、ハイデ 94,95   |
|                                      |                | マタイ 4:1-11   | 出エジプト 20:3            |
| 神を神とする戦いに勝利された主イエスを仰ぎ、神の御前に生きる幸いに招く  |                |              |                       |
| 14日                                  | 第二戒 刻んだ像       | 問 45,46      | ウ小教 49-52、ハイデ 96-98   |
|                                      |                | ヨハネ 2:13-22  | 出エジプト 20:4a           |
| 刻んだ像を用いることはもちろん、内なる偶像礼拝を斥ける。正しい神礼拝   |                |              |                       |
| 21日                                  | 第三戒 神の御名       | 問 47,48      | ウ小教 53-56、ハイデ 99-102  |
|                                      |                | 使徒言行録 3:1-10 | 出エジプト 20:7a           |
| 主イエス・キリストの御名を用いて礼拝し、神を讃美する使徒の姿に倣う    |                |              |                       |
| 28日                                  | 第四戒 主の日の安息     | 問 49,50      | ウ小教 57-62、ハイデ 103     |
|                                      |                | ルカ 6:1-11    | 出エジプト 20:8            |
| 主イエス・キリストを礼拝する主の日の喜びとその安息を分かち合う      |                |              |                       |
| 8月4日                                 | 第五戒 父母を敬う      | 問 51,52      | ウ小教 63-66、ハイデ 104     |
|                                      |                | エフェソ 6:1-3   | 出エジプト 20:12a          |
| 与えられた人間関係を神の恵みとして受け入れる心を養う           |                |              |                       |
| 11日                                  | 第六戒 殺人の禁止      | 問 53,54      | ウ小教 67-69、ハイデ 105-107 |
|                                      |                | 創世記 1:20-31  | 出エジプト 20:13           |
| 生命の主なる神を示し、殺してはならない理由と生命の尊厳を学ぶ       |                |              |                       |
| 18日                                  | 第七戒 姦淫の禁止      | 問 55,56      | ウ小教 70-72、ハイデ 108-109 |
|                                      |                | 創世記 2:18-25  | 出エジプト 20:14           |
| 生命と性の関わり、性の尊さ、結婚の神聖を学ぶ。キリスト教「性教育」    |                |              |                       |
| 25日                                  | 第八戒 盗みの禁止      | 問 57,58      | ウ小教 73-75、ハイデ 110-111 |
|                                      |                | マタイ 25:14-30 | 出エジプト 20:15           |
| 私たちのすべてが神さまから与えられたものである。どん欲や浪費が禁止される |                |              |                       |
| 9月1日                                 | 第九戒 偽りの禁止      | 問 59, 60     | ウ小教 76-78、ハイデ 112     |
|                                      |                | マタイ 26:69-75 | 出エジプト 20:16           |
| 神の真実の愛に応えて、私たちも隣人に誠実を尽くして歩む          |                |              |                       |
| 8日                                   | 第十戒<br>むさぼりの禁止 | 問 61,62      | ウ小教 79-81、ハイデ 113     |
|                                      |                | エフェソ 4:28-29 | 出エジプト 20:17a          |
| むさぼりは偶像礼拝である。自分に与えられたものを分かち合う心を養う    |                |              |                       |
| 15日<br>敬老の日                          | 神の掟を喜ぶ生活       | 問 63         | ハイデ 86, 90            |
|                                      |                | テトス 2:11-15  | テトス 2:14              |
| キリストの贖罪によって善い行いに熱心な民とされていることを確信し、励む  |                |              |                       |
| 22日                                  | 律法に背く人間        | 問 64         | ウ小教 82、ハイデ 114        |
|                                      |                | ローマ 7:13-25  | ローマ 7:19              |
| 私たちが罪人であることをあらためて示し、救い主を仰ぐことへ導く      |                |              |                       |
| 29日                                  | 十戒の完成者キリスト     | 問 64         | ウ小教 85,86、ハイデ 114,115 |
|                                      |                | ローマ 8:1-11   | ローマ 8:1               |
| 神の民の罪を償い、霊の生命をお与えくださる主イエスを信じる幸いに生きる  |                |              |                       |

# 日曜学校 2002年度カリキュラム 年間計画

2年サイクル第2年(子どもカテキズム問34～85)

| 月 日   | 教会暦・行事 | 主題(仮題)                         | 子どもカテキズム |
|-------|--------|--------------------------------|----------|
| 2002年 |        | 第二部 信仰の道 五 聖霊なる神さま             |          |
| 4月7日  | 進級     | 神の民の祈りの家                       | 問34      |
| 14日   |        | キリストの体なる教会                     | 問34      |
| 21日   |        | 再臨の約束                          | 問35      |
| 28日   |        | 再臨に備える                         | 問35      |
| 5月5日  |        | 死のときの祝福                        | 問36      |
| 12日   | 母の日    | 復活のときの祝福                       | 問36      |
| 19日   | ペンテコステ | 教会の誕生                          | 聖霊降臨祭    |
| 26日   |        | 第三部 生活の道 一 感謝について<br>感謝—神の求め   | 問37      |
| 6月2日  |        | 感謝としての服従                       | 問38      |
| 9日    | 花の日    | 第三部 生活の道 二 感謝に生きる道<br>十戒—感謝の道標 | 問39      |
| 16日   | 父の日    | 神と人への愛                         | 問40      |
| 23日   |        | 贖いの御業—過越                       | 問41,42   |
| 30日   |        | 過越の成就—キリスト                     | 問41,42   |
| 7月7日  |        | 第一戒 神を神とする                     | 問43,44   |
| 14日   |        | 第二戒 刻んだ像                       | 問45,46   |
| 21日   |        | 第三戒 神の御名                       | 問47,48   |
| 28日   |        | 第四戒 主の日の安息                     | 問49,50   |
| 8月4日  |        | 第五戒 父母を敬う                      | 問51,52   |
| 11日   |        | 第六戒 殺人の禁止                      | 問53,54   |
| 18日   |        | 第七戒 姦淫の禁止                      | 問55,56   |
| 25日   |        | 第八戒 盗みの禁止                      | 問57,58   |
| 9月1日  |        | 第九戒 偽りの禁止                      | 問59,60   |
| 8日    |        | 第十戒 むさぼりの禁止                    | 問61,62   |
| 15日   | 敬老の日   | 神の掟を喜ぶ生活                       | 問63      |
| 22日   |        | 律法に背く人間                        | 問64      |
| 29日   |        | 十戒の完成者キリスト                     | 問64      |

| 月 日    | 教会暦・行事  | 主 題 ( 仮 題 )        | 子どもカテキズム |
|--------|---------|--------------------|----------|
|        |         | 第三部 生活の道 三 教会に生きる道 |          |
| 10月 6日 |         | 教会                 | 問 65     |
| 13日    |         |                    | 問 66     |
| 20日    |         |                    | 問 67     |
| 27日    | 宗教改革記念日 | 恵みの手段              | 問 68     |
| 11月 3日 |         | 御言葉                | 問 69     |
| 10日    |         |                    | 問 70     |
| 17日    |         | 礼典                 | 問 71     |
| 24日    |         | 洗礼                 | 問 72,73  |
| 12月 1日 | アドベント   | 待降節                | 待降節      |
| 8日     | アドベント   | 待降節                | 待降節      |
| 15日    | アドベント   | 待降節                | 待降節      |
| 22日    | クリスマス   | 降誕祭                | 降誕祭      |
| 29日    | 年末      | 一年の感謝              |          |
| 2003年  |         |                    |          |
| 1月 5日  | 新年      | 聖餐                 | 問 74,75  |
|        |         | 第三部 生活の道 四 祈りに生きる道 |          |
| 12日    |         | 祈り                 | 問 76     |
| 29日    |         |                    | 問 76     |
| 26日    |         | 主の祈り               | 問 77     |
| 2月 2日  |         | 呼びかけ               | 問 78     |
| 9日     |         | 第一の祈願              | 問 79     |
| 16日    |         | 第二の祈願              | 問 80     |
| 23日    |         | 第三の祈願              | 問 81     |
| 3月 2日  |         | 第四の祈願              | 問 82     |
| 9日     |         | 第五の祈願              | 問 83     |
| 16日    |         | 第六の祈願              | 問 84     |
| 23日    |         | 頌栄、アーメン            | 問 85     |
| 30日    |         |                    | 問 85     |

## 編集後記

●日曜日の朝、ビルの礼拝室は子ども達で溢れます。中学科は寒い冬の朝、外の階段の踊り場で・・・！教会へ導かれたこの子らが全員、信仰告白へと導かれますように（名古屋岩の上传道所日曜学校）。●教案誌の作成に携わり、良き学びができたと思います。また、教案誌を作る大変さと、難しさを感じました（津島伝道所日曜学校）●今回は豊明教会 SS 教師 6 名で執筆を分担しました。よき訓練と恵みが与えられました（豊明教会日曜学校）。●初めての教案作成。担当者徹夜。教師会二回開催し皆で検討、さらに検討。問答と聖句、その展開の関連、検討が必要な部分あり。これまでとスタイル変更（関キリスト教会教会日曜学校）。●表紙について・・・生まれてきたことに感謝して、生きていることに喜びを感じてほしいな、と

いう願いをこめて。ちなみに樹に手をはえているのではなく、後ろに誰かがいるのです（宮川裕希子、名古屋教会）。●〈子らをキリストへ〉〈すべての信徒のための日曜学校教案誌〉これが本誌の祈りと目標。伝道の武器となりたいたいです。継続できますようお祈り下さい（相馬伸郎、名古屋岩の上传道所宣教教師）。●教案誌の継続とさらなる充実のためにどうかお祈りください（木下裕也、豊明教会牧師）。●教師と親の祈りが祝福されますように（村手淳、太田伝道所宣教教師）。●各教会が分級展開例を作成する新しい試みが導かれたことを神様に感謝します（春名義行、津島伝道所宣教教師）。●それぞれの新しい歩みが祝福されますように。御教会の福音宣教の業が祝福されますように（望月信、高蔵寺伝道所協力牧師）。

| 執筆担当         |                 | 編集部           |
|--------------|-----------------|---------------|
| 聖書研究         | 分級              | 相馬伸郎（長）       |
| 前半・・・村手淳     | 幼稚科・・・名古屋岩の上传道所 | 木下裕也          |
| 後半・・・春名義行    | 小学科下級・・・津島伝道所   | 村手淳           |
| カテキズム研究      | 小学科中級・・・津島伝道所   | 春名義行（会計、販売取次） |
| 前半・・・木下裕也    | 小学科上級・・・豊明教会    | 望月信（書記、編集）    |
| 後半・・・望月信     | 中学科・・・関キリスト教会   |               |
| 説教展開例・・・相馬伸郎 | 表紙イラスト・・・宮川裕希子  |               |

### ●編集部より

『子どもカテキズム』を用いて行なう『日曜学校教案誌』も第二年目、皆様に第五号をお届けすることが出来ますことを心から感謝致しております。

今号から、「中学生・高校生のための教会史」の連載が始まりました。一年間の予定で、初代から現代までの教会の歩みを学んでまいります。中高生に、自分達の拠って立つ信仰が、世々の教会を生かしてきた「命ある伝統」によって生み出されてきたことを、少しでも感じてもらえればと願います。テキストを中高生に読ませるだけでも、素晴らしいと思います。しかし、何よりもそこで教師と共に読み、教師が問いを發して、子ども達と共に考え、感じる事ができたら、どれほどすばらしい学びとなる事でしょうか。

既に、他中会ばかりか、他教派、他教会でも『子どもカテキズム』『日曜学校教案誌』を用いて下さっているとの声を多数伺っております。今号には、神港教会の紹介、神戸改革派神学校牧田吉和校長からのご寄稿など、嬉しいばかりであります。これからも、広く執筆者を求めて参りたく願っております。

何よりも、今号から、各教会の日曜学校単位で分級展開例を執筆していただきました。以前に、草加松原教会の「教会学校教師心得」を拝見したことがあります。その中に、教会学校教師の条件の一つとして、「チームワークをもって仕事に当たり得る者」とありました。全くその通りであり、それは教会の奉仕のすべてにおいて妥当するはずであります。本誌発行の意図の一つに、日曜学校「教師会」の神学的、霊的、実践的な充実のために奉仕したいとの願いがありました。どうぞ、あなたの教会の日曜学校教師会もこの業に参加していただきませんか。心からお待ちいたしております。

少しでも皆様のお役に立つ日曜学校教案誌をと思い、皆様に開かれた編集の体制を整えたいと考えております。教案アイデアやご意見、ご批判など、どんなことでもご遠慮なく編集部までお寄せ下さいませ。

締め、情性に流されることなく、「一人でも多くの子どもに、そしてたった一人の子どもに」、この素晴らしい福音を、主イエス・キリストを愛と喜びを込めて共に紹介してまいりましょう。

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『日曜学校教案誌』

2002年4・5・6月号(季刊)

第5号

2002年3月17日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会  
編集・発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部  
名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎  
〒458-0008 愛知県名古屋市緑区平手北2-1701 協英ビル3F  
Tel/Fax. 052-877-8962  
頒布取り次ぎ 津島伝道所 宣教教師 春名義行  
〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30  
Tel/Fax. 0567-26-4221  
印刷 株式会社あるむ  
頒価 900円(本体価格)

---